第六師團も亦、直に安平より鳳凰山西方に進出し、其一部は沙崗臺の東方に達し、左翼第四師團に勢援す。

沙崗臺附近に留りし敵の歩砲兵若干は、午前八時、左翼第四師團の一部に擊退せらる。右翼第五師團は、午前六時、開を冒して嶮峻なる山路を北進し、其前衛黄竈棚に達するや、敵は前塔子附近の高地に砲二門を備へて俟つとの報あり。乃ち第廿一旅團の一部をして其右方の山路を迂回せしめ、午後四時頃、進路上の敵を擊退し、勢に乘じて邁進し、薄暮李家屯に達し。前衛は蓋州河を瞰下すべき一高地を占領して前哨を張れり。而も敵は戰意なき者の如く、小數の監視哨の如き者を殘し、川を渡りて退却せり。

軍司令部は同日午前六時、正白旗を發し、八家子に至り、前進せる師團の戰況を聞き、敵の防禦線は沙崗臺、鳳凰山の高地に在らずして、蓋平々野の北方高地なることを知り、更に前進して午後三時、前安平に至りて宿す。午後六時、中央隊なる第六師團は鳳凰山の線を占領し、砲兵第六聯隊をして其高地の北端に進出して、砲兵陣地を撰ばしむ、中央隊の右翼なる第三師團も徐家屯、老爺廟の線より、鳳凰山の東北に連る一帶の丘陵を占領し、砲兵第三聯隊は其高地の一角の陣地を選定せり。敵は全く蓋平の平野に退却し去りて、其東南西三面の丘陵脈は全く我占領する所となれり。

七月八日は專ら敵情偵察に勉む。

公報に曰く、

土人の言に依れば蓋平附近に約二萬、海山寨に約二千、同地附近に約一萬の敵あり、蓋平北方高地及西臺附近の高地には砲兵を備へ又大石橋附近には依然敵兵駐屯し漸次增加の模樣ありと

敵は海山寨附近より蓋平附近に亘る間及西臺北方高地附近を占領し午後一時頃より鐵道を以て海山寨附近に軍隊を下車せしめつゝあり、湯地南方約二里の花紅溝附近にも敵兵あるものゝ如し

第三節　總攻擊

七月八日、軍命令の要旨に曰く、

敵は石門子附近に其首力を集中せるものゝ如し。青石嶺舖方面敵情に就て得る處なし、軍は明九日蓋州河左岸の敵を攻擊せんとす。

第五師團は天明と共に西臺北方高地の敵を攻擊すべし。

第三、第六の二個師團は第五師團の攻擊進捗に伴ひ、老爺廟及鳳凰山の線より進んで蓋州河右岸各當面の敵を擊攘すべし。

第四師團は海山寨方面に對し、軍の左側を援護し第六師團の攻撃に聯繫すべし。
騎兵旅團は第四師團の左に連繫して、軍の左側を援護すべし。
予は老爺廟にあり。

軍司令官は既に此命令を發し、戰を督せんが爲に前安平の宿營地を發せしは、七月九日午前零時三十分なり。同四時、已に北嶺を越え、將に蓋平の平野に出でんとす、時に前面の戰勢は漸く進捗し、第六師團は小海寨より右方復州街道に沿ふて着々攻撃の歩を進め、第三師團亦其右方に連りて、次第に敵を可頭寨の線に壓迫せり。我砲兵は、蓋州河左岸に陣地を布き敵は蓋州河の北岸繆家屯と其右方馬圈子とに砲を配置し、其主砲は後方なる東西双頂山に在り。砲戰漸く酣ならんとす。老爺廟に在りし軍司令官は、直に馬を進めて其東北方に展開して、蓋州河を渉り、其第一線は直に蓋平城の東に亘る線に進出し、第四師團の一部も此機を利用して、鐵道線路より蓋平城の西部に突進し、第三師團も其歩兵の大部隊既に河を渉りて、繆家屯の敵陣地に肉薄せり。敵は西双頂山一帶の砲兵陣地より盛に我を砲撃しつゝあるに拘らず、其各線に亘れる歩兵は早く既に蓋州河北岸に亘れる守線を捨てゝ北方高地脈に退却す。

彼我砲戰漸く盛なる時、我歩兵は各線並び進む。六時半頃小銃の戰鬪既に酣に、敵は全力を注ぎて防戰克く力む、而して西双頂山の敵砲、殊に優勢に且頑強に、其照準亦正確にして、我歩兵の前進を阻礙すること甚し。

然れども我歩兵は此猛烈なる砲撃に逡巡するものにあらず、第六師團の歩兵は、其左右翼第六師團右翼隊及第三師團左翼隊は一齊に敵を追撃して、蓋州河畔に進出す、北岸の敵砲兵盛に之を砲撃して以て我前進を沮止せんとす、而も我歩兵は危險を侵して蓋州河を渉りて猛進す。是に於て繆家屯花圈子に在りし敵砲兵は蔡家屯の線に退けり。

是より先、小泉少將の率ゆる第六師團左翼隊（歩兵第二十三聯隊に騎兵工兵若干を加ふ）は、高家屯方面より蓋州河を渡りて蓋平南門に向ひしが右翼隊方面の戰況進捗するに從ひ、共に敗敵を追撃して東双頂山を攻撃するに至れり。

攻撃歩兵は高粱畑を利用し、散開して高地を攀登せしが、敵之を見て、石門方面より盛に砲撃し、我は地物の據るべきなき平野に曝露せるを以て、前進頗る困難を極む。歩兵攻撃の進捗を見たる我砲兵は、犖地前進し來りて遂に蓋州河に達し、大膽なる徒渉を行ひ、砲兵第六聯隊の一部隊は蓋平東門以北に進出し、砲兵第三聯隊の一部隊は繆家屯東方に位置し、猛烈なる砲戰再び開かる、時方に午前七時、敵の司令部所在地なる石門子附近より東

西双頂山は悉く彼我砲彈の飛集する處となりたり、我歩兵は時機到れりと爲し、踴躍して前進し、第六師團の歩兵は先づ敵火を侵して東西双頂山の一角に達し、敵の陣地に突進せり、第三師團の歩兵も亦東西に連れる高地を占領せり。

左翼第四師團は此日川村大佐(宗五郎)の指揮せる部隊を以て先づ小米寨を占領せしめ右翼隊(西島少將)及左翼隊(安東少將)をして二道に岐れて前進せしめ、蓋州河の北岸に敵兵を擊攘し、蓋州河を徒渉し、右翼隊は蓋平西北方の新開嶺を據守せる敵を驅逐し、左翼隊は敵の交通線路たる海山寨の停車場を攻撃して、之を占領せり。時正に八時二十分、我全軍の歩兵は皆敵の主要陣地に迫り、殊に東西双頂山に迫れる第六師團は既に敵の陣地を占領し、敵の敗勢既に定まる。

東西双頂山既に陷る。敵は石門子附近に集中して大に頑強に抵抗を持續せしも遂に支ゆる能はず、陣地を捨てゝ大石橋街道を退却す。第六師團は直に前進し、終に石門を占領し、第四師團も亦新開嶺西北地方を領有せり。

第三師團も亦第六師團の右に聯りて、石門の東方なる老青山を占領し、右翼第五師團と關家甸に於て連絡を取れり。時に正午十二時。蓋平平野は全く我有に歸す。

此役小泉少將負傷し、其他戰死者百五十名に達せり。敵の死傷は明ならずと雖も、約三百に達したるものゝ如し。

第三十三章　封鎖艦隊の行動

敵艦隊は多大の苦辛と日子とを費して其敗壞せる艦艇を修理し、其閉塞せる水道を開通し、全隊を擧げて旅順港外に逸出したるに拘らず、我艦隊猛撃に遇ひ、空しく港内に歸還したること既記の如し。然れども敵は一敗の爲空しく灣内に斃伏するものにあらず、早晩機に乘じて港口に逸出し、浦鹽艦隊と合して後圖を爲すべく若し能はずんば、附近中立港に竄入して艦隊を保全せん。若し到底封鎖線を破る能はずんば止むを得ず封鎖線内に遊弋し、陸上の日本攻圍軍を威嚇せんと欲す。

敵が危險なる港口を出でんとする所以のもの、我攻圍軍の包圍線益進みて要塞の運命刻々に迫るを以てなり。敵は如何にしてか我攻圍軍の鋒鋩を挫かんとし、故に頻々艦艇を龍王塘より小平島方面に派し、攻圍軍の左翼を脅嚇するに努む。蓋し要塞陷りて艦隊獨り全きを得ざればなり。而も毎々我艦隊の砲撃を受けて其目的を達する能はず、背面の壓迫頗る急にして要塞の運命益々蹙まる、敵艦隊は苦悶の極、今は窮鼠猫を噛まんとする窮狀を示せり。

我艦隊は爲に益監視を嚴にし、我實力封鎖線以外には一歩も敵の逸出するを許さず、然れども港口より東海岸に沿へる一帶の海面は、敵艦艇の脫出頻々なりしが爲に、自ら彼我衝突の地點と爲り、六月二十三日の港外海戰より八月十日の黃海々戰に至るまで殆と砲火を交へざるなし。

第一節　水雷襲撃の續行

六月二十三日敵艦を港内に壓迫したるの後、僅かに四日を經、同月二十七日を以て、第十二水雷艇隊（司令少佐山田亨）をして旅順港外の敵を攻撃せしめたり。同隊は此命令を受けて同夜旅順港外迄進行したるに、會々敵の窺知する所と爲り、探海燈の熾なる照射と、砲臺及び軍艦の猛烈なる射撃とを受たるにも拘らず、敢然勇を鼓して猛進し、黃金山下に在る二本檣三煙突の敵哨艦を襲撃したるに、該艦は水柱を揚げて轟然沈沒するを認めたり。夜暗くして其艦の正體は明知する能はざりしも、戰鬪艦又は一等巡洋艦ならんとは攻撃隊の認めたる所なりと云ふ。我が襲撃と共に、敵の驅逐艦は直ちに我を攻撃し來りたるを以て、我亦之に應戰し、盛に砲火を交へたるが、敵艦中の一隻は俄かに艦腹を現はし、白煙を揚げつゝ轉覆沈沒せり、此攻撃中戰死海軍大尉權藤嘉義以下十三負傷海軍中尉矢野祐太郎以下二名なり。

越て七月七日夜第六艇隊（司令少佐内田良隆）は旅順口港口に在る敵の哨艦を襲撃するため雨霧を冒して港口に近づきしも天明に至るまで敵を發見せず然るに翌八日午前五時三十分に至り第五十八號艇（艇長心得中尉中牟田武正）は黃金山下の濛氣の内に敵艦「アスコリド」の碇泊するを認め之を襲撃せしが其効果は明ならず艇隊は敵の要塞より猛烈なる砲撃を受け第五十八號艇、第五十九號艇にて各下士一名重傷を負へり。

同艇隊は八日拂曉に於ける襲撃の効果明ならざるを遺憾とし、僅に一日を隔て十一日午前零時過旅順口外防材附近に進行し港口の哨艦「ヂアナ」型に對し襲撃を試み第五十七號艇（艇長大尉三田村誠造）、第五十九號艇（艇長心得中尉大寺景吉）は之に對し水雷を發射せしが其効果亦明ならず敵は猛烈なる砲火を以て防禦せしも我艇隊には一の損傷なし。

第二節　鮮生角附近の海戰

此時に當り攻圍軍は既に劍山の要害を奪ひ、三日間に亘る敵の逆襲を擊退し、占領方に確實となる。敵艦隊乃ち我攻圍軍の左翼を脅威せんと欲し、龍王塘小平島附近に出で來るもの數々なりしが、七月九日に至り大擧出動せり。

九日午前七時頃より敵艦「バヤーン」、「デアナ」、「パルラーダ」、「ボルターワ」、「ノーウキック」、砲艦二隻、驅逐艦七隻は數多の掃海船艇を先頭として漸次に港外に出で同日午後鮮生

角より龍王塘附近に來る我驅逐隊の一部は敵の掃海を妨害するの目的を以て屢々之と砲戰し第三艦隊の一部は小平島附近に在りて之と對應し午後二時頃に至り敵艦「バヤーン」と多少の砲火を交換せしが午後四時頃に至り敵は漸次に港内に退却せり我艦艇には驅逐艦朝潮に於て給仕一名輕傷したる外一の損害なし。

敵艦隊は毎々出動すれども未だ意を逞しうする能はず。乃ち若干の驅逐艦を鮮生角東灣に派遣し、此に潛伏して攻圍軍の左翼を側射するの計を企つ。我艦隊之を偵知し、大尉桑島省三の指揮せる第十四艇隊竝に特に同艇隊に附屬したる第十號、第十一號の兩砲艦及三笠富士の艦載水雷艇に命じて此潛伏敵艦を砲撃せしむ。當時烟霧は深くして効果を認むる能はざりしが、後其一隻の沈沒したるを知れり。事二十四日午前三時に在り。

第三節　驅逐艦の勇戰

我攻圍軍の戰程日に進捗するに因り、敵艦隊は屢々鹽廠附近に出で來り、攻圍軍の左翼を惱ませり。我艦隊は之を擊退すると共に益封鎖線を鞏固にし、最も勇敢に其任務を遂行せり。就中八月五日に於ける驅逐艦曙、朧、電三艦の行動は公報亦特に其勇猛なる動作を稱揚せり、曰く。五日午後四時頃驅逐艦曙（艦長少佐九津見雅雄）、朧（艦長少佐竹村伴吾）の二隻は敵情偵察のため旅順口港外に至りしに敵の驅逐艦十

四隻急に我に向ひて突進し來り彈着距離に入る頃其四隻は南西に、七隻は正南に、他の三隻は鮮生角の方向に針路を取り我を包圍せんとするものゝ如し二艦は午後四時四十分約五千米突の距離より敵と猛烈なる砲火を交換しつゝ針路を北東に取り鮮生角の方向に進みたる敵驅逐艦三隻の前面に出て之を壓迫猛撃したるに敵は直に艦首を轉じて港口に遁走す依て之を追撃し午後六時過に至れり此時我驅逐艦電（艦長少佐篠原利七）も亦來り合して一隊を爲し更に南方に分離せる敵の驅逐艦十一隻に迫りしが是れ亦港口に向ひたるを以て戰鬪を止めたり我三艦には一の損傷なし敵の驅逐艦は午後六時頃悉く港内に入れり敵の損害に至りては明ならずと雖も我三艦が敵の十四艦を壓迫攻撃して其活動の目的を達せしめざりし勇猛の動作は全軍の歎美して措かざる所なり

第三十四章　摩天嶺第二回の敵襲

第一節　我の防備——敵の誤算

若し敵將をして、神機妙算ありて、眞に我軍を摩天嶺以南に擊退し、既に失へる連山閉、分水嶺等の諸要害を奪還し、其敗勢を挽回せんと欲せば、何故に其第二回目に來襲せし兵力と勇氣とを以て、最初の夜襲に斷行せざりしが、彼が七月四日に來襲せし時は、我軍摩

天嶺を占領すること日尙淺くして兵の配備未だ完全ならず、地形の踏査未だ充分ならざりしを以て、優勢の敵に襲撃せられたらんには、加ふるに敵情の偵察も亦未だ十分ならざりしを以て、優勢の敵に襲撃せられたらんには、我兵如何に勇敢なるも、或は摩天嶺を敵手に委したるや未だ知る可らず。然るに敵將は戰略を誤り我軍既に左翼は新開嶺より、右翼は下馬塘に到るまで、確實に之を占領し、敵兵壕を築き、砲兵陣地を設けたる時に方り、再び襲撃を試みたるは、其勇斷す可しと雖も遂に敗北に歸せざる可からざるは、固より論を竢たざるなり。試に此時摩天嶺附近に於ける我第二師團の各隊配備を觀ん。摩天嶺占領後前面の敵と相對陣するや、右翼松永旅團の守備する新開嶺より、左翼谷山聯隊の防禦せる下馬塘の北方、背陰亭に到るまで、其峻坂を越え、鳥道に亘れる前哨線約八里、師團の戰鬪面として決して短小なりと云ふ可らず、其地形亦決して最良の防禦地と稱するを得ず、日露兩軍其地を換へ、我軍彼が如き優勢の兵を以て摩天嶺を攻撃せば、露兵は半日を支ふること能はずして、撃退せられしならん想ふに敵將は一度我軍の防禦配備を偵察したれば、若し再び更に優勢の兵を以て之を攻撃せば、摩天嶺を回復して我軍を分水嶺以南に撃退し、側背の患を除き得可しと思ひしならん、然れども我軍は夙に敵の企圖を看破し、其再襲撃あるを慮りたれば、之に應ずる防禦手段は遺憾なく準備せられ前哨歩哨の配置周到なるのみならず、更に各幹部は其部下を指揮し、

日夜工事を急施し、極めて堅牢なる散兵壕を摩天嶺一帶の高地に掘り、且つ砲兵陣地を其の最高峰に設け、敵兵襲撃に對する防禦手段は遺憾なく準備せらる、此の時に方り師團の前衛となりて摩天嶺の守備に任じたるは、歩兵第三十聯隊(越後村松)にして聯隊長馬塲大佐は一大隊をして摩天嶺を越えて前哨線を張らしめ、而して自餘の二大隊は警報あらば、直に綏急に應じ得る如く、五峰觀、李家舖等の各所に舍營し、松永旅團の方面、南新開嶺には、歩兵第四聯隊第七中隊より、二條の道路上に各一隊の獨立下士哨を派遣し、中央新開嶺の西方約千五百米突の谷地に第三中隊前哨とし、右翼北新開嶺には、第六中隊より二個分隊分遣し、下馬塘方面に在ては、第八中隊を韓家堡子附近に位置せしめ其前方に小哨を派遣し、中央王家子方面に對しては、第六中隊をして大道溝の路を塞がしめ、北方は第九中隊を黄家堡子に出して、背陰亭を警戒せしめたり。

敵は第一次の敵襲に當り、特に日曜日の夜を卜し、エスキゾストの名に依り神助を借ると稱し、將士を激動したるものゝ如くなりしが、再度の夜襲も亦七月十七日の日曜日にして且露土戰爭の時、露兵が勇戰奮鬪、大に土軍をシプカ峠に破り、遂に之が爲め全勝を博し露國軍隊武勇の名譽を歐洲列國に藉かしし、今に至るまで彼等の誇りとする戰勝紀念日に屬せり。

再度來襲の際は既記の如く、小哨、前哨中隊、及前哨大隊の位置は以前と同樣なれども、此時の防禦線は、摩天嶺の頂界線に在るを以て、敵の來襲に對しては、小哨、前哨中隊及前哨大隊共に何等の抗戰を試みることなく、豫め本防禦線即ち摩天嶺の頂界線まで引上ぐ可きを命せられたり、然るに敵は少數の兵にて、先づ新開嶺方面に威嚇的襲撃をなし、然る後大部隊の兵を以て、摩天嶺を襲撃せしかば、我軍に於ては敵の未だ歩哨線に到達せざる前に、潜伏斥候の報告により其來襲を知り敵をして更に覺知せしむることなく、各前哨線は悉く引き上げて本防禦線に就き、徐に戰鬪準備を爲せり、敵之を知らず、四日の夜襲に惡戰血鬪せし我前哨線悉く其手に落ちしかば、敵は我軍を以て摩天嶺を死守するの決心なき者と爲し、妄進して大打撃を受くるに至れり。

第二節　新開嶺方面の敵襲

新開嶺方面の防禦に任せられたるは、山本大佐の率ゆる歩兵第四聯隊（仙臺榴岡）にして、松永少將前衞司令官として之を指揮し、北新開嶺、新開嶺、南新開嶺各要地に散兵壕を築き防備頗る嚴なりしが、七月十七日午前零時十五分潜伏斥候より「兵未詳の敵來襲せり」との急報に接したり、少將は直に各隊の警急集合を命じ、同一時山本大佐をして第五、第八中隊を率ゐて前哨に赴援せしむ然れども此方面に來襲せし敵は大部隊にあらずして、前進

するの狀なきを以て、少將は集合せし板橋少佐の第三大隊をして、一時前進を中止し同二時五十分摩天嶺方面の前哨に敵襲ありとの警報に接し、少將直に自ら板橋隊を率ゐて前進し、同五時新開嶺に達せり。是より先き、拂曉山本大佐は、隈大尉の率ゆる第四中隊をして敵情を偵察せしむ、午前七時三十分中隊はマクウメンザ（媽溝門子）の東北方に達し、敵の歩兵約一中隊と衝突し、之を撃退して、同高地を占領せしが、同九時三十分摩天嶺方面より退却せる敵の歩兵約一中隊は、隈中隊の側面に向て背進し、同時に約二個中隊の敵兵堵灣より來援せしより、一旦隈中隊の爲に撃退せられし敵兵も亦返撃し爲に隈中隊は三面より猛烈なる射撃を受け、且地形不利なるを以て、非常の苦戰に陷れり。是より先き松永少將は六時三十分頃より、摩天嶺の方向に銃聲を聞き、又七時三十分頃より、マクウメンザ方向の銃聲又猛烈なるを聞き、第二大隊長代理小林大尉をして、武田（第五中隊）中村（第八中隊）の二中隊を率ゐて隈中隊を援助せしむ。小林大尉急行して同九時三十分、マクウメンザ東北方約三千米突の高地に達し、恰も摩天嶺方面より退却して、今や將に隈中隊の背後に迫らんとする敵に出會せしが、敵は戰を交へずして堵灣方向に遁逃せり、暫時にして山本大佐も土岐、松井、村山の三中隊を率ゐて來援し諸中隊は更に前進して、マクウメンザ東方の高地に到り、退却せる敵を追撃せしかば、其首力は我軍の猛烈なる射撃を受け、

直に塔灣に退却すること能はず、狼狽して楊木林子方向に潰走せり。

第三節　摩天嶺の激戰

七月十七日は、既記の如く露軍に於ける吉兆の日なり。夜襲軍の總指揮官は本國より新來の勇兵を率ゐ、西伯利亞軍團長として其英名夙に歐洲に薄ける伯爵ケルレル中將なり。中將は別働隊を編制して一面は新開嶺、一面は下馬塘の方面を攻撃せしめ、自ら歩兵第九、第二十四聯隊、及ドブロジンスキーの率ゆる第九師團の第三十四聯隊の三個聯隊を率ゐて、摩天嶺に向ひたり、故に摩天嶺の役は、我名將岡崎少將對露國の驍將ケルレル中將と我勇將馬場大佐、對、露國の猛將ドブロジンスキー大佐との戰鬪なり。

摩天嶺方面にては、十七日午前零時十分、松永枝隊の守備する新開嶺に敵襲ありとの報に接し、又潜伏斥候の報告により、優勢の敵兵來襲せるを確めたれば、各歩哨より前哨大隊に至るまで悉く摩天嶺の最高峰に撤退し、各本防禦線に就きたり。此時聯隊長馬場大佐は、既に戰鬪線に出馬して、各隊を部署し、前日來より砲兵陣地の右側にありし、高松少佐の率ゆる第五、第七中隊を砲兵掩護として、其陣地に就かしめ、他の二中隊を防禦線の右翼後に集合し、姫田大尉の率ゆる砲兵第二聯隊第六中隊も、亦豫定の陣地に就き、午前三時、防禦準備全く終れり。

敵は前回の襲撃によりて、我軍の各前哨所在を知るが故に李家堡子に近づきし頃は、最も警戒を嚴にして進行せしが、四顧寂寥、一兵を見ず。尚進行して我軍の防禦陣地なる可しと想像せし小關帝廟附近に到りしも、更に我兵の隻影を認めざりしかば、茫然危惧の念を生じ、逡巡して復た進行せざりしが、午前四時三十分、敵の首力は金家堡子の南方高地及廟溝方面より、雲霞の如く增加し來り、其先頭は既に我防禦陣地に對し、大關帝廟を中心として、約三千米突に連亘し、攻撃隊形を取りて散開し、射撃を始めたるも、濃霧漠々展望不便なるを以て、我兵敢て應戰せず。

午前五時、天全く明け、霧亦散ず。前方を瞰視すれば、敵兵は、南摩天嶺の最高地點に對する我防禦線の左翼より、北、小高嶺の北方高地に至るまで、約三千米突間に濶蔓せり、此時戰鬪の序幕は既に開かれ、兩軍の銃聲所々に起る、敵は逐次其兵を戰線に增加して、益我防禦陣地の弱點なる摩天嶺西南方高地より、我左翼に壓迫して之を包圍せんとするの狀あり、馬場大佐は急に宮川少佐をして第九、第十二中隊を率ゐ赴援せしむ、是に於て少佐は、電光石火、所令の地點に達し、其前方約五六百米突の高地を占領せる約二中隊の敵と對戰せり。

本防禦戰の前面に在ては、高草木少佐(重列)自ら其率ゐる第一大隊全部を散兵壕に散開し

て、敵兵と戰鬪を開始せしが、午前六時三十分に至り、敵の兵力益增加し漸く猛烈なる射撃をなして、我軍を攻撃し始めたり、時に我師團は分れて三方面に在り、松永少將は自ら山本聯隊を率ゐて新開嶺を防禦し、第二十九聯隊は連山關の南方劉家嶺に舍營し、而して第十六聯隊は下馬塘の敵と對陣せり、故に摩天嶺方面に在る我軍は、實に僅に第三十聯隊あるのみにして此方面に於ける敵兵の四分の一に充たず。

敵は斯の如く、四倍以上の兵を以て、漸次猛烈に攻撃し來りたれば、我防禦線を指揮せる第一大隊長高草木少佐は、縱橫自ら戰線に奔走し、各兵孰れも一死を賭して防戰に努めけれども、敵は梯隊にて交々猛烈なる射撃をなし衆を恃みて益々前進せり、既にして第二大隊長高松少佐（鐵太郎）は其部下を率ゐて、疾風の如く來援し、直に散兵壕に散開して射撃せり、而も敵兵の增加する者も亦益々多く、其先進部隊は、猛進して既に大關帝廟の東方高地を占領せり。是に於て兩軍の戰鬪は益々猛烈となりて、勝敗の機時々刻々に迫り來れり。

我砲兵陣地は防禦線の左翼、摩天嶺の最高峰に布かれ野砲六門儼として敵の前進を待つ。敵が衆を恃みて猛進し來るや我砲兵は照準を正し、百雷一時に落下し、敵は忽ちにして動搖を始めたるも、暫時にして復頑然として攻勢に復し、射撃を續行せり、此時馬塲聯隊の三個大隊は、既に悉く戰線に參加したれば他に增援隊を要求すべからず、而して敵は歐露の精

鋭を以て有名なるカザン、キエラの勁兵が、曉將ケルレル中將の指揮下に在りて、決死奮闘するが故に激戰二時間、午前八時二十分頃より、兩軍全線の戰鬪は益猛烈を加へ、敵は殊死血戰せしも、我兵亦奮闘能く防ぎ敵は遂に防禦陣地に肉薄すること能はず、高丘に立ち雙眼鏡を以て敵軍の運動を觀望せし馬塲大佐は、之を見て急に我步砲兵に命じ、猛烈に射撃したりければ、關帝廟方向の敵兵先づ動搖す、神戸旅團副官之を見て叫んで曰く『敵兵動搖す、突貫の時機來る失ふ可らず』と、言未だ畢らず、敵の動搖益々甚し、是に於て高松少佐は、旅團長、聯隊長の命令を待つに遑なく獨斷を以て坂川中隊に突貫を命ず。

坂川大尉は直に其手兵を提げ、劍を拔て自ら士卒に先ち、敵陣に突貫す。敵兵潰易、直に散亂し、坂川大尉は一兵を損ふことなくして所命の高地を占領し、更に其兵を散開し、砲兵と力を併せて、小高嶺及大關帝廟前に在る敵兵を射撃す。敵は其兵を整頓し再び攻勢に轉せんと欲したるものゝ如きも摩天嶺の最高峰より猛射する榴散彈を蒙り午前九時遂に來襲の目的を遂ぐること能はず、其主力は金家堡子の谷地に沿ひ、一部は甜水站方向に退却せり、然れども我左翼西北の高地を占め、我防禦陣地に突撃せんと欲したる敵兵は今村、太田、小澤、川瀨の四中隊と對戰し、抵抗して容易に退却の色なかりしが、小高嶺及大關帝廟方面の敵既に退却するや我兵の勇氣百倍せるを以て、高草木少佐は、今村、太田の二中

隊をして、宮川少佐は小澤、川瀬の二中隊をして突貫せしむ、今村、太田の二中隊先づ猛進敵陣に突入し續いて小澤、川瀬の二中隊も突貫し、銃々相撲ち劍々相撃ち、惡戰格鬪數十分敵は遂に西北方高地を棄てゝ退却せり。

敵は午前九時十分、全線退却を始めたれば高松隊は、敵兵の左翼に、高草木隊は中央に、宮川隊は左翼に向つて進撃せり、敵の一部隊は、三角山（我展望兵派遣の所在）他の部隊は小關帝廟の後方（我前哨中隊の所在）に停止して、其頽勢を輓回せんと欲し、再び交戰せしと雖も、防禦より逆撃に轉じたる我兵は、其勢磐石を千仞の崖下に轉ずるが如く、到底敗兵の能く支ゆ可きにあらずして塔灣方面に潰收せり、是より先き師團長より急行赴援を命ぜられたる、林少佐（景敏）の率ゆる第二十九聯隊第三大隊は、各兵をして輕裝せしめ、約五里の行程を疾驅し、敵兵稍動搖を始めたる頃摩天嶺に到着せしかば、第三十聯隊の各大隊と共に猛進し、力を協せて三角山小關帝廟附近の敵を擊退せり。

敵兵全く李家堡子方面に退却せしを以て、岡崎少將は更に高草木、高松、及林大隊に命じ三方より射撃を行はしめ、自ら馬場大佐と共に前進す。

追撃隊は步々抵抗せる敵を驅逐し、李家堡子東方千米突の鞍部に到り、諸方面より潰走して、混亂せる敵に向ひ、猛烈に集射せり。

李家堡子南方高地を占領せし敵の收容隊は之を見て我追撃隊に對して猛烈なる掩護射撃を始めしが遂次退却したるを以て、第三十聯隊の第一、第二大隊は其地點に停止し、第二十九聯隊第三大隊は、更に猛進して李家堡子、西南方高地まで敵を追撃せしが、午後三時半に至り、敵は遠く我射撃線外に退却せるを以て、追撃隊は戰鬪を止めて逐次本隊に復歸せり。此の戰鬪に於て左翼新開嶺、右翼下馬塘を襲撃せし敵の總數を合算すれば、少なくとも二師團ありたる可し。而して殆ど十二時間に亘る激戰なりしかば、高松少佐以下三百三十名の死傷者を出せしが、敵の死傷は、我軍にて埋葬せし死體のみ百五十、捕虜五十四、其負傷は約我四倍以上ありしが如し。

指揮官岡崎少將此戰に於ける各兵奮鬪の狀を觀て歎じて曰く、斯の如き勇敢なる兵を率ゐて戰鬪せば、決して敗を取ることなしと。

摩天嶺の捷報、天聽に達するや、第二師團に勅語を賜ふ。

第二師團ハ我ニ倍セル敵軍曉霧ニ乘ジ摩天嶺及其附近ヲ襲撃シ來レルニ對シ長時間激戰大ニ之ヲ破リ且之ヲ追撃シ以テ恢復ノ企圖ヲ挫折セリ

朕深ク其勇武ヲ嘉ス

第四節　下馬塘方面の敵襲

敵の摩天嶺附近襲撃に際し、馬塲聯隊に亞ぎ惡戰せしは、下馬塘方面を防禦せる谷山聯隊なりとす。

下馬塘は連山關の北方約二里半に在り、是れより敵地に通ずる道路三條あり、一は北方に通じ、黄家堡子、橋頭を經て、本溪湖に達し、二は西北方に通じ、大道溝、王家堡子、黄泥溝を經て、安平に達し、三は西方に通じ、韓家堡子、小高嶺を經て塔灣に達す、此間丘陵山脈到る處に、蜿蜒起伏して殆んど平坦の地なく、之を攻撃する易きに非ざれども、之を防禦するも亦容易の業にあらず、初め第二師團の鳳凰城を發するや、第三十聯隊前衛となり、連山關より摩天嶺に出で、第四聯隊は左側枝隊となり、連山關より新開嶺に出で、松永少將之が司令官たり、第十六聯隊亦連山關より下馬塘に出で、谷山大佐之を指揮し、七月初旬より各其方面を警戒せしが、敵襲の前日、即ち十六日、谷山大佐は、吉田大尉(護朗)の第八中隊をして左翼前哨とし、韓家堡子に、第六中隊の末松大尉(四郎)を中央前哨として大道溝に、第九中隊の梅澤大尉(喜一)を右翼前哨として黄家堡子に、各其部兵を率ゐて警戒の任に當らしむ。

下馬塘方面に在りては、十七日午前三時五十分摩天嶺方面に敵襲あるの報に接し、枝隊長谷山大佐は、直に全隊に警急集合を命じ、第二大隊長加藤少佐(丈)をして第七中隊を率ゐ、

遼陽街道韓家堡子附近に前哨勤務せる吉田中隊を援助せしむ、第七中隊は午前四時三十分、第五中隊は、同四時四十分集合を終り、共に防禦線に向つて前進し、白川少佐(健太郎)の率ゐる第三大隊は同六時下馬塘の西端に集合を終り、防戰準備全く整ふ、是より先き、同五時頃、敵の歩兵約一中隊、猛進して小高嶺の我下士哨を襲撃して川久保、吉田の二中隊は、此戰に對し、射撃を開始せしが、敵は益增加して忽ちにして第一線は約三中隊となれり、加藤少佐は乃ち機先を制して、我より敵を脅撃せんとし、齋藤中隊をして防禦陣地の西北方高地より、敵の左側に向ひ攻撃を行はしむ。恰も好し白川少佐は須賀田中隊(第十四聯隊)を率ゐ來援し、兩軍相對して射撃戰を續行せり。

中央前哨の勤務に任じ、大道溝附近に前哨線を張り、安平より下馬塘に通ずる道路を警戒せし末松大尉(四郎)の率ゐる第六中隊は、前夜來下士哨三十名を右翼の高地に派遣せしが、敵の歩兵我小哨線を配置せし石門嶺の東側、約五百米突の高地に現出したり、依て大尉は直に其中隊を麾き、自ら先頭に立ちて小哨の北方なる防禦陣地に就く、時に午前六時、敵兵數百既に指呼の間に迫れり。

午前六時三十分、敵兵は增加して約二中隊となる末松大尉は其中隊全部散開して應戰せしに、同六時四十分頃、敵兵は益々增加して一大隊以上となり。同六時五十分、敵兵は尙ほ

益增加して、其戰線を東北方に延長し、我防禦線の北方斷崖絶壁の最高地を奪取したり、此時我援隊尚ほ未だ到らずして、中隊は益苦戰の狀態となれり、是に於て末松大尉は、戰線を奔走して兵士を激勵せしが、忽ち敵彈大腿部に中りて倒れたるも尚自ら劍を杖き、敵前に立ち叱咤號令せり。而も流血淋漓として苦痛甚しきを以て、後藤中尉(鶴治)代つて中隊を指揮せしも、暫時にして戰死し、佐藤少尉(悌造)亦負傷し浦野少尉(幸治郎)代つて中隊を指揮せしも、亦忽ちにして戰死せり、此時に方り殆ど四五倍の敵兵が、各所の高地を占領して、猛烈に我兵を瞰射せしを以て、中隊は殆ど其三分の一を失ふに至りたれども、熊野特務曹長創傷を忍びて中隊を指揮し、下士協力して其陣地を死守し、一人も退却せる者なし、既にして佐藤少尉は負傷して後方に收容せられしが、中隊の幹部悉く死傷せるを聞き、再び戰線に出でて中隊を指揮し、暫くして援隊到り、我軍漸く有利の地に立つや再び熊倉特務曹長と同じく、奮戰勇闘自ら士卒に先だちて敵陣に突入せり。

此時枝隊長谷山大佐は、下馬塘に在り、末松前哨中隊より敵兵來襲の報に接したるも枝隊長は牛圍(第十一中隊)田村(第十二中隊)の二個中隊を有するのみなりしが、同八時十分敵兵益增加し一大隊以上に及び、我は非常の苦戰に陷りたりとの急報ありしかば、谷山大佐は直に自ら牛圍、田村の兩中隊を率ゐて、猛進石門嶺に向ひ、午前八時四十五分、二道溝に

達し、僅に一小隊を以て聯隊の豫備隊とし、牛圍中隊を左翼とし、田村中隊を右翼として末松中隊の右線に增加して敵と應戰せしめたり、是に於て射擊力は略ぼ同等力となるに至りたるも、敵は既に最前より有利の地を占めて、瞰射せしが故に我軍の損害甚だ多く、勝敗未だ決せざりしが、此時田村中隊は分れて二面の敵に當る、而して品田小隊の占領せる陣地は最も掩蔽して敵に接近し得可き地點なるを以て、田村大尉(亥佐美)は之をして前方高地の敵を擊攘せしめんと欲し、自ら品田小隊の位置に在りて時機を待てり、然れども敵の陣地亦堅牢にして、且高地に展望兵を置き、我兵の動作を瞰視せしむるを以て、容易に接近すること能はず、午後零時四十分、敵兵約一中隊激烈なる掩護集中射擊により、蟻地に猛進して、品田小隊に突擊し來る、是に於て小隊は急霰の如く彈丸を猛射し、友軍も亦協力奮戰しければ、敵兵は瞬時にして死傷數十人を出し、將に退却せんとす。大尉大に叫んで曰く『敵兵退却、宜しく逆擊して其陣地を奪取す可し』と。乃ち品田中尉は、多田特務曹長と共に、一個小隊を率ゐて敵の左翼に突貫せり、各高地に在る敵兵は之を見て、猛烈なる一齊射擊をなし容易に進むこと能はず、乘嵩曰く『危險なり、暫く森林に避けん』と、大尉肯かず『突貫々々』を叫び猛進す、將に敵陣に迫らんとして敵陣其胸部を貫く。大尉斃れて尚右手に劍を揮ひ、口に『突貫』を叫んで遂に瞑せり。

田村大尉「突貫」の一語を殘して殪るゝや、品田小隊の兵氣益す振ひ、皆叫んで曰く「中隊長の仇、討たざる可からず」と、奮激能く戰ふと雖も、敵は益々猛烈に我兵を亂射し品田中尉亦斃れ多田特務曹長代りて小隊を指揮せしが、忽ちにして負傷し、兵員亦過半を失ふに至りたれば、遂に後方の遮蔽物に退却して、敵彈を避くるに至れり。

斯の如くにして激戰は尙繼續せられ第十一中隊長牛圓大尉(重次郎)も負傷したれば、戰線の三個中隊は何れも其首腦を失ふて、聯隊長の指揮下に、交戰せざる可からざるに至れり、此時摩天嶺方面の敵兵既に退却せるを以て、川久保中隊、須賀田中隊、及齋藤中隊は、大道溝の戰聲盛なるを聞き來援したれば、我軍頓に優勢となり、攻勢に轉じて猛擊せしかば敵は遂に支ふること能はず、同五時退却せり我軍之を追擊せんと欲したれども、其陣地嶮峻にして、容易に近接するを得ず。此戰鬪に於て我軍の死傷は、戰死將校四名、下士卒三十名、負傷將校五名、下士九十二名にして、末松中隊に七十八名、田村中隊に四十一名の死傷者を出せり、此方面に來襲せし敵兵は、狙擊歩兵第十二聯隊を主として、第二十一聯隊の一部も加はれり、而して其死傷は約五百以上に達せしが如し。

第三十五章　細河沿の激戰

第一節　細河沿の地勢——激戰前の活動

橋頭(細河沿)は、東方分水嶺と、南方、連山關方面より流れ來る合流點、細河の左岸に在り、河の右岸は、紅庙子より賈家堡子に至るまで、斷崖壁立登攀し能はざる嶮山にして、其西方には旭山の山脈蜒蜿として、南北に蟠り、旭山と橋頭の間には、又一帶の斷崖壁立して、天然の堅壘をなす。敵は之を利用して、其陣地を細河合流點の左岸より旭山の南地に至るまで、約四千米突一大灣形をなして、半永久的角面堡を築き、掩堡を掘り、以て我軍を防禦す。軍語を假りて之を言へば、實に所謂要機と要害とを具備せる防禦陣地なり。且つ敵の陣地は、大抵約五十米突の高地にして、我軍は全く斜射せざるを得ず、而して我軍紅庙子方面より進出せんとすれば、敵の砲火を冒して散兵は二百米突より大ならざる正面を以て躍進せざる可からず、又遠く南方より迂回せんとすれば、約四五里の間、嶮峻なる山又山を蹈破して、尙家堡子の西方に出でざるを得ず、橋頭は實に是れ難攻易守の天然城なり。

敵の北分水嶺を棄てゝ北走するや、一時本溪湖及橋頭西方に退却せしが、七月十二日頃より再び我軍の方面に運動を試み、約三萬の敵、八門の砲、橋頭に集中せりとの情報あり、同十三日第四十六聯隊より佐藤中隊、及野崎騎兵中隊。偵察斥候として敵情を捜索せしめ

翌十四日、第三大隊長橋少佐は其宿營地四道溝を發して、北分水嶺を越え、山咀子に到りしに敵は戰意なく、我兵を見て忽ち山中に逃走したるを以て、午後十時岩田中隊は、思山嶺に到着して露營し、本隊は山咀子に、小泉中隊は本溪湖方面の敵に備へんが爲に、老母嶺を占領して、同じく露營せり。

十五日、山咀子に在りたる、橋少佐の率ゆる第二大隊本部は、楊木溝に進出、平井大佐の率ゆる第四十六聯隊は、羽生大隊と共に頭道溝を發して、羽生大隊は二道溝に、第四十六聯隊本部は、山咀子に前進せり。

十六日、木越旅團は騎兵第十二聯隊（一中隊と二小隊を缺く）野戰砲第十二聯隊の第二大隊（第四中隊缺く）工兵第三中隊、衞生隊半部を北分水嶺の東麓草河長嶺に集合して、午前六時楊木溝に向ひ前進す此日橋少佐は、右翼前哨よりの急報に接し直に思山嶺に集合して、敵の來るを待ちたるも、暫らくして退却せり。

十七日午前十時、橋大隊は思山嶺出發、各戰鬪部隊は小河峪に於て輕裝となり、午後三時頃より敵歩兵若干紅旗子方向より前進し、續いて又約一個中隊我左側を迂回し來る。松江中隊の位置は其陣地高くして畧射し得るを以て、敵兵の銃聲に應じて斃るゝ者算なし。敵は爲に逡巡して稍動搖の色を現はし、歩兵は橋頭に、騎兵は千金溝方面に退却せり。

十八日楊木溝に前進中なる木越少將は其各前哨部隊よりの情報に接し、兵力を集合するの必要を認め、各〻に所要の命令を與へて部署を定め、而して代家堡子東南方の高地は砲兵陣地として最適當なるを以て、原田聯隊の岡村大隊、及玉置砲兵大隊、小出砲兵中隊をして、砲兵陣地を選定せしむ。尋で岡村少佐の代家堡子附近に前進して、其南方高地の敵を擊退するや、代家堡子以南の高地には又敵の隻影を認むる能はざるに至れり。

第二節　平井聯隊の苦戰

敵は少くも二聯夜激戰し得る戰鬪力を有しながら、何故か銃砲未だ相交ゆるに及ばずして退却の兆候あるを以て、前橋大隊は、午後五時三十分、敵情偵察の爲め、第六中隊（岩田大尉）を先頭とし橋頭に向つて前進せり。

午後六時。岩田中隊の代家堡に達するや、細河左岸の低壁壕に埋伏せる敵の歩兵は、俄然一齊射擊をなして、我先頭隊を迎擊せり、橋少佐は直に其全部を散開し、同地附近の地物を利用して之と應戰せり、然るに敵兵頗る頑強にして、午後六時三十分には、橋頭西部陣地の中央斷崖上に在る敵砲三四門も既に砲火を開き、又歩兵約三個大隊、細河を隔てゝ峻峻なる高地上の塹壕に據り我軍に向つて猛烈に銃砲を送り、我兵の死傷續出し我軍益不利の狀態に陷れり、此に於て橋少佐は自ら豫備隊を率ゐて前進し、平井大佐も亦忽ち警急集

合を行ひ、獨斷を以て先づ羽生少佐の率ゆる第一大隊をして急進、橋大隊に增援せしむ。此時戰鬪正に闌なりしが我增援隊は銃砲彈下を潜りて續々散兵線に到着せり、時既に午後七時を報ぜり。

前衛司令官木越少將は此急報に接し、豊田少佐の率ゆる第三大隊に命じ、代家堡子の第一戰に增加せしめしが、敵の砲兵は盛に射撃して、其進路を妨害せり。

兩軍の戰鬪は、益激烈となりて、午後七時三十分に至るも、銃聲止まず、我砲兵は約二里を隔つる楊木溝に在りしを以て、如何に急行するも既に日沒に垂んとし戰鬪に參加する能はず、爲に我兵數時間敵の銃砲彈を受け、死傷者甚だ多く、我軍益不利の狀態に陷りしが、橋少佐は劍を抜き戰線を指揮し、各將校兵士も死を決して、奮戰勇鬪一步も退却せず。平井大佐も亦增援隊として最前線に進み、一民家を本部として、各隊を指揮せり。

午後八時三十分、敵の砲聲は沈默に歸したれども、彼我砲兵の小銃は毫も減せず、同九時過ぐる頃漸く緩徐となれり、是に於て我軍全線戰鬪隊形を以て夜を徹するに決す。

同八時四十五分、紅庙子三叉路附近に開進す可き第二十四聯隊(原田大佐)第一大隊(岡村少佐)は第四十六聯隊(平井大佐)の中央後に開進し、其開進終るや、步兵第一小隊を千金嶺方面に分遣し、專ら本溪湖方面の敵に對し、我右翼を警戒せしめたり。

前衛司令官木越少將は敵兵意外に頑強なるを見て、更に明旦を期し、我砲兵の援助を借り、紅庙子より敵の本陣地を攻撃し、橋頭を畧取せんと欲し、各部隊に所要の命令を與へて、時機の來るを竢つ。

午後十時、兵力未詳の敵密集隊を以て細河を渡渉し、軍樂を奏して、我橋大隊の前哨に向つて來襲し來る、其勢頗る猛烈なりしも、我兵亦勇敢に應戰し暫時にして之を撃退せり。

第三節　砲兵の奮戰

是より先、玉置少佐の率ゆる砲兵第二大隊(第四中隊缺く)は、師團長の命に依り其放列を紅庙子の南方高地に布き、拂曉を待つて、砲火を開始せんが爲め、夜暗に乘じて前進したるも、行程約三里、總て崎嶇たる峻坂なるが爲め、午後四時四十五分に至り漸く陣地に到着し、直に放列を布き、日野中隊先づ砲門を開き、數個の着發彈を敵砲兵陣地に送りて、其距離三千四百米突の近極限(最近距離の意)を得たり、依て我山砲十二門は、其照尺を正し、猛烈に發射せしに敵は少しも應ずる色なく、野砲二十四門を以て、我軍に向ひ猛烈なる集中火を行ひたり、是に於て兩軍の砲戰は益激烈となり、其の響天地に震ひ山岳を撼かし、寂寞たる天地は忽ち修羅場に變じ戰鬪は尅一尅に悲慘の光景を呈せり、此時砲兵第一大隊未だ所命の陣地に就かざるを以て、第二大隊は倍數の敵を受けて、非常の苦戰に陷りしが

激戰約半時間砲兵第一大隊は、漸く紅廟子西端の谷地底に放列を布き、猛烈に敵砲兵を射撃し、敵は一時沈默せしが、午前六時二十分頃より、復た盛に砲火を開きて挑戰したるを以て、我砲兵は榴彈射撃をなし、更に曳火彈を發射し砲戰劇烈を極む。

此時新に張家堡子の南方高地に顯はれたる敵の砲兵は、我五中隊の砲兵陣地に向ひ、一層猛烈なる射撃をなしたるも、我亦應戰に努め、一時敵砲を沈默せしめたるも、八時頃。敵は再び砲火を開き彈丸の我放列線内に落ち來ること雨の如し。

我兵勇氣愈奮ひ、機敏なる動作は益發射速度を增加することを得たり、然れども我各砲兵陣地にも、死傷甚だ多く、午後二時半頃には、線各を通じて、砲兵隊のみの將校以下即死十名負傷四十餘名の多きに至れり。

既にして敵の砲兵は其目標を變換して、我軍の左翼を猛撃せしを以て、第二中隊は更に此砲兵に對して猛射せり。

午後四時頃に至り我兵彈藥の補給十分となりしかば、前線の山砲約三十門、射撃頓に猛烈となり、敵兵稍動搖の色を現はしたるを以て、第二大隊の第五中隊は其陣地を六本松に轉換し、第一大隊第三中隊は小河峪の西方畑地に至り、共に動搖せる敵の歩兵に向つて、曳火彈を發射せり、同四時四十五分、更に目標を張河堡子西方高地に在る敵の歩兵に變換し、

同五時第三中隊は師團長の命により、今村、原田兩聯隊の前進を掩護する爲め、其陣地を小河峪南方高地に變換し、張家堡子西方高地に在る敵の歩兵に向て曳火彈を注げり、是に於て此方面の敵は、大なる損害を受け退却せり、依て我砲兵は、同五時十分、細河沿一帶の掩堡に據れる敵の歩兵に向つて猛射せしかば、敵は遂に全軍潰亂し多大の死傷を遺棄して退却せり。

我第一線右翼の歩兵之を見て先づ突貫し、續いて全線一齊に猛進細河を徒渉して敵を追撃し、忽ちにして旭旗は翩翻として敵の射撃陣地に翻れり。

此日の砲戰、敵は野砲二十四門を有し、加ふるに鞏固なる防禦工事を施し、歩兵も亦完全なる掩堡に據り、共に頑強に抵抗したれば我軍の攻撃は非常に困難を感じ、殊に砲兵は適當の陣地なく、午前五時より午後五時に至るまで、約十二時間勇戰闘奮遂に能く敵を撃退したるは多とするに足る者あり。然るに第一線の歩兵は昨日來代家堡西端より其南方高地に亘りて、陣地を固守し、砲戰の結果を待ち、而して又歩兵第二十四聯隊の岡村大隊は、敵の右翼より攻撃す可き命を受け、夜半紅廟子を發して、細河沿西南方山地脚に向つて潛行しつゝあり、歩兵第二十三聯隊の大島大隊（第一中隊缺く）は、午前九時より運動を起し、歩兵第四十六聯隊の左翼に延伸し、岡村大隊との中間に在りて、攻撃の時機を待てり。

連山關に在る第二師團長西大將は、昨夜來橋頭方面の銃聲盛に聞ゆるを以て、午前八時下馬塘に在る二個中隊を援兵として派遣せしが、戰鬪更に進捗せざるを以て、午後零時四十五分更に谷山大佐をして第二中隊を率ゐて戰鬪に參加せしむ。

午後零時四十分、井上中將は既に迂回の途上に在る今村大佐に向ひ、更に「第二十四聯隊岡村大佐の左翼に連り、山地に沿ふて敵の右翼を攻擊すべき」旨を命じたり、然れども今村聯隊の進行路は、非常に嶮惡にして、兵士の疲勞亦甚だしく容易に目的地に到達すること能はず、午後一時、第二十四聯隊第三大隊長平田少佐は、昨夜來師團の戰鬪激烈なるを聞き獨斷を以て其一部を塔溝に殘し、自餘の諸隊を率ゐて橋頭東北方高地に向ひ前進し、千金嶺附近に達す旅團長は乃ち山咀子北方に在る志波大隊（二中隊缺く）をして其北方に若干の兵を殘し、其他を以て老母嶺附近を占領し、本溪湖方面に對して、警戒せしめたり。斯の如く各隊攻擊の準備は既に定まりて、戰機亦熟せり。今は只今村聯隊迂回運動の進捗するを待つのみ。

第四節　今村聯隊の迂回運動

今村大佐の率ゐる歩兵第十四聯隊（小倉）は、十八日酷暑を冒して、北分水嶺の嶮を越え、其夜山咀子に露營せしが、夢魂未だ家山に到らず、忽ち師團長より前進の命令あり直に警

急集合をなせり、蓋し師團長の總豫備隊となり、時機により戰鬪開始中なる木越旅團に增援せんが爲なり、聯隊は午前三時集合を終り、暗夜進行を起し、午前六時漸く思山嶺に達して、別命の下るを竢てり、時に前面の砲戰既に開かれ、我傳騎は頻々敵兵頑強の報を齎らせり。

井上師團長は、乃ち今村大佐を招き、其二大隊を率ゐ、我左側の嶮山を攀ぢ電光石火敵の右翼に出で、攻擊す可きを命じたり。

大佐直に前進の準備を了へ午前七時三十分、思山嶺を出發して、小河峪南方の高地に沿ひ、午前十一時まで目標地たる細河の前岸、張家堡子附近の平地に出でんと欲したれども、或は絶壁に進路を遮られ、或は山谷に陷ゐりて方位を誤り、容易に進行すること能はず、具さに辛酸を嘗め、張家堡子に着せしは既に午後三時を過ぐ。

聯隊の思山嶺を出發してより既に八時間を經たれば、彼我の戰況を知るに由なきを以て、各將校兵士は其身の疲憊を忘れ、或は戰機を逸せしかを憂ふ。偶一騎あり、疾風の如く馬に鞭ち馳せ來る、近いて之を見れば土方師團副官なり、副官は直に師團長の命を傳へ、聯隊をして岡村大隊の左翼に連繫して、敵の右翼を攻擊せしむ。且つ報するに彼我の戰況を以てす。

衆始めて尙戰機に後れざるを知り、快哉の聲、各處に起る。

今村大佐は直に竹下、平岡兩少佐を招き、各隊の向ふ所を部署す、即ち平岡大隊をして、第二十四聯隊岡村大隊の左翼に、竹下少佐をして二中隊を率ゐて、其左翼に增加せしめ、自ら二個中隊を以て豫備隊となり、各猛進して敵の右翼に出づ。

此時兩軍の戰鬪尙闌にして、右は代家堡子の北方細河の左岸より、左は張家堡子の西方に到るまで、戰線約二里、兩軍の砲聲數萬、電擊雷搏、砲聲天に震ひ、銃聲地を撼し、光景實に凄愴を極む。

午後四時頃には、我軍第一線の諸隊は一齊猛進して敵の防禦陣地に迫り、砲兵第二大隊は五本松高地に放列を進めたり、是に於て彼我の銃砲火は、益激烈を極め、敵亦死力を致して頑強に防禦せしが、今村聯隊は神兵天より降り來るの勢を以て其右翼を脅威しければ、敵は稍動搖の色を現せり、井上中將之を見て直に先づ其右翼隊をして突貫を行はしむ。

敵は遂に支ゆること能はずして、大安平方面に向つて退却を始め、恰も竹下大隊の進路なる花紅溝(張家堡子の西北方高地)北方高地より、其西方に重疊せる山脈脚に出づ竹下少佐は、直に之を猛射して擊攘せしめ、追躡して、紅花溝南方高地點を占領せしに、敵兵の尙細河右岸より陸續敗走し來るあり。少佐乃ち部下に命じ、猛烈に一齊射擊せしむ。敵は倉

皇狼狽、多くの死傷者を遺棄し、混亂を極め、四方に潰走せり。

岡村大隊の左翼に增加を命ぜられたる平岡少佐は、其大隊全部を率ゐて所命の如く、彼の右翼高地に向ひしが、此時敵は我軍の援隊來着して其右翼に迫りたるを知り、益銃砲火を盛にし、援隊の前進を阻害せしかば、大隊は容易に進行すること能はざりしが、平岡少佐は奮然劍を拔て自ら先頭に立ち『前へ』の號令を下しつゝ勇進して、特に前面の高地に達せんとする一刹那、敵彈の爲に、其腹部を貫通せられて斃る。

平岡少佐已に敵彈の爲に斃る。而も各中隊は之が爲に、士氣毫も沮喪せず、大隊長の仇を打つ可しと叫びて益猛進し、加藤、平田兩中隊の如きは、期せずして同時に敵陣地に突貫し、奮戰勇鬪せしかば、敵兵其鋭鋒に當り難く、安平街道に潰走せり。

第十五節　總攻擊

砲戰は午後三時頃に至るまで、尙は著るしき進捗を見ざりしが、午後四時頃に至り、我軍の彈藥縱列漸く到着し迂回運動せし今村聯隊も、既に目的地に展開せしゆゑ、師團長は砲兵をして猛烈に砲擊せしむ、敵亦之に應じて發砲せしかば、砲兵の激戰は再び開始せられ、第二大隊の第五、第六中隊の如きは、最も猛烈なる敵の瞰射を受けて、損害甚だ多かりしも各兵士は孰れも沈着して、勇戰奮鬪したり。

此時前日來、戰鬪隊形の儘一晝夜眠食を廢して非常の困苦を忍びし平井、原田の兩聯隊、及岡村大隊は、巧に地物を利用して其所在を隱蔽し、敵の砲彈を避け、總攻撃の命令を待つ。

平井大佐の率ゐる第四十六聯隊は、此時に當り、代家堡の北方細河の左岸を右翼とし、紅廟子より橋頭に通ずる本街道を夾みて散開し、敵と相距る最も近くして、其右翼に在りては、彼我の距離僅に五六百米突内外に過ぎず、細河南方の支流を隔てゝ王家堡子を中央とし、其左右各七八百米突の間に疎散せる者は、原田大佐の率ゐる第二十聯隊なり、尋で今村聯隊の二個大隊到着せしより、戰鬪序列聊變じ、平田大隊を最右翼とし、橘大隊、羽生大隊、豐田大隊、大島大隊、岡村大隊、平岡大隊、竹下大隊の順序に列し、戰線約二千米突、一大扇形をなし、平井大佐は、橘大隊の後方に在りて戰線の右翼を指揮し、今村大佐は、平岡大隊の後方に在りて、正面攻撃隊の左翼を指揮し、原田大佐は、豐田大隊の後方に在りて、其右翼を指揮し、而して木越少將は、原田大佐の右方後に位置して、正面攻撃隊の全線を監視せり、又砲兵第一、第三中隊は、代家堡の北方約三百米突に、第五中隊は六本松に、第二中隊は其前方約二百米突に、第六中隊は紅廟子の西方約三百米突に、各其陣地を轉進して、猛烈なる砲火を開けり、斯の如くにして總攻撃の準備全く定まる、今村聯隊の迂回

運動効を奏し、彈藥縱隊の到着は我砲兵の射撃力を強大ならしめ、午後四時頃には敵稍動搖の色あり。師團長は木越少將に砲兵第一大隊を屬し。又時機に因り第十四聯隊をも指揮し、前進攻撃せしむ。

藤室砲兵聯隊長は我歩兵の躍進と共に其二中隊を前進せしめ、代家堡の西方に放列陣地を布けり、此時敵の砲兵は、退却中にて我兵砲彈を受くるの心配なかりしかば、我砲兵は安全の位置に立ち、歩兵と力を協せて猛射せしゆゑ、敵は多大の損害に屈せず頑強に其陣地を固守して、容易に退却せず、最前より王家堡の南方高丘上に立つて、戰況を監視せし木越少將は、前面の塹壕中に在る敵の大部隊が、最も勇敢に抵抗せるを見て、藤室聯隊長に命じ、第三中隊を代家堡南方高地に進めて、此敵を猛射せしめしに、敵は猛烈なる十字火を送れり。而も我將卒は沈着に其任務を行ひ、以て我歩兵の攻撃を掩護せり。

既記の如く今村聯隊は此時既に我軍の右翼に增加して、木越少將の指揮下に入り、全線一齊敵陣に向つて攻撃猛射す敵兵益々動搖して退却の色あり、平井聯隊は機熟せりと爲し、『突貫前へ』の號令一下、各兵饑渇と疲勞とを忘れ、鯨波の聲山岳を撼し、敵の猛烈なる射撃を意とせず、電光石火の如く突貫せり、同時に原田聯隊も、亦橋頭の西方高地に向ひ、斷崖の下を迂回し、萬難を冒し猛進突貫、遂に敵兵を擊攘して之を占領せしかば、忽ち見

る平井、原田、今村の三聯隊旗、及無數の旭章旗は、高く我軍の占領陣地に掲げられ、翩々として晩風に飜れり、時に午後五時五十分なり。

堅牢の陣地に據り、頑強に防禦せし敵兵も、我軍の猛烈なる攻撃に堪へず、遂に土崩瓦解して、退却せしかば、平井聯隊は右翼より、原田聯隊は正面より之を追撃し、砲兵第三中隊も亦疾風迅雷の勢を以て、橋頭西方の高地に陣地を布き、金家堡子、何家堡、房身村の左側高地を安平街道に向ひ潰走する敵兵を追撃したれば、敵兵の斃るゝ者算なし。

又今村聯隊長及援兵として第二師團より派遣せられし加藤少佐の指揮せし齋藤、吉田の二中隊は、左側山地を前進し、頑強なる敵を擊退して多大の損害を與へたり、竹下大隊は更に北ぐるを追ふて、梨溝東方の高地に到り、橋頭より敗走して、其西北方砂原に集合中なる歩兵約千四五百の大部隊に向ひ、猛烈なる一齊射撃を注ぎたれば、敵は再び狼狽して倉皇關家溝西方高地の背後に遁逃せり、時に午後七時十五分。

此戰鬪に於て、敵の兵力は歩兵第九師團、ブリヤンスキー第三十五聯隊同アロフスキー第三十六聯隊砲兵第三中隊（速射野砲二十四門）と輕砲兵第一中隊（山砲八門）及バイカル哥薩克騎兵三中隊にして、其總指揮官は、中將フエリセリマン旅團長は、マルツヲンノフ少將にして、孰れも歐露キエフ軍團に屬する精兵なり、特に彼等は新來の鋭氣を以て、歐露軍

隊の手腕を示さんと欲し殊死防戰したるが故に其勇敢決して侮る可からざる者ありたり。敵の戰場に遺棄せし死骸は、百三十一、捕虜將校以下六十餘、其死傷數は一千以上にして、或中隊の如きは全滅せし者ありと云ふ、而して我軍の死傷は、總計五百二十五名にして、戰死將校二、下士以下七十名。

第三十六章　浦鹽艦隊出動

第一節　惠山沖の暴行

浦鹽艦隊の蠢行が戰局の大勢に關係なきや言を俟たず。然れども彼等が我艦隊の旅順方面に活動するの虛に乘じ、日本海上に横行して、再び北海道に現はれ、再び元山を砲撃し、再び對馬海峽の通過を企て、其間多數の我商船を撃沈し、金州丸、常陸丸、佐渡丸等の我運送船を轟沈せしめ、一たび出づれば必ず奇功を奏して歸るを以て、我國民は切齒憤慨に堪へざると同時に、彼等の一擧一動に注意を惹けるに當り、七月廿日午後四時頃「グロンボイ」、「リューリック」、「ロシヤ」の三隻を以て單縱陣を作り、函館の西方當別の沖合を過ぎり、次で惠山沖に出で、遂に海峽を通過せり劈頭先づ其災に罹りたるものを我汽船高島丸となす。

東京灣汽船會社所有船高島丸(三百十八噸)は北海道函館へ航行中、七月廿日午後六時頃、渡島國龜田郡根田内沖約五六浬の沖合に於て、三隻の敵艦隊に遭遇し之を避けんと欲したるも能はず乘員二十一名船客一名は短艇に乘じて難を免かるゝを許されしも信號書三冊海圖其他の書類は押收され船は午前六時四十五分遂に彼れの爲めに擊沈せられたり。

敵艦隊は高島丸の沈沒を見て再び恵山沖の方向に駛走せり。既にして恵山沖約十海里の處に於て北海道炭鑛鐵道會社の雇船たる英國汽船「サマラ」號に遭ひ、直に砲撃して其進行を停止せしめ、船長(英人)に命じて曰く、『本船は露國の水兵に運轉せしむべし、船員はサガレンまで同行すべし』と、船長肯んぜずして曰く、『本船は中立國の船舶にて何等の積荷なく、唯持主の命により、室蘭に赴くのみ、燃料極めて乏し、依て貴命に服從する能はず』と、此に於て彼は遂に之を釋放して、再び東方に向て進航せり。

敵艦隊は進んで恵山岬の沖合十五海里に達し、將に津輕海峽を通過し終らんとするや、又尼崎伊三郎所有船共同運輸丸(總噸數百四十七噸)に出會せり。

同船は北海道日高國幌泉に於て漁夫五十名、昆布約四百石、雜貨三百個を搭載して函館に航行中なりしが、船長濱岡粂太郎は到底逸走すべからざるを知り、自ら進行を停止す、敵は三名の士官十八名の兵と一隻の短艇にて來り、船内の各室を檢査して歸艦し『直に港に向へ』と信號す、船長以下船員は茲に毒蛇の口を逃れしを喜び、直に全速力を以て午後三時四十分法華村に着せり。

敵艦隊は遂に我津輕海峽を通過し、我奥羽の太平洋沿岸に沿ふて漸次南下し來れり。巖手縣廳より大本營に達したる電報によれば、廿一日午前七時我鰹舟は同縣山田港より約四十海里の沖合に於て三隻の露艦は南方に進航しつゝありたるを認めたりといへり。

第二節　房總半島沖に現る

廿二日に至りて露艦は更に南下し來れるを見る。廿二日茨城縣より大本營に達したる公報によれば、同日午前九時我漁船は常陸川尻沖六十里内外の海上に於て、露艦三隻漸次南下しつゝありたるを認めて歸へれりと。又同日正午頃同じく我漁船は平磯町沖合約八十海里の處にて三隻の軍艦らしきもの南方に前進するを見たりと。

廿三日午後浦賀より大本營に向て一片の飛電來れり曰く、『本日(廿三日)午前十時半頃房總半島東岸方向に砲聲を聞く』と、同日午前十時千葉縣勝浦發の電報又曰く、『露艦らしき大船三隻只今勝浦沖を南航しつゝあり』と、此に於て露艦の東京灣外に進航し來れるを知れり。

翌廿四日『午前七時十五分伊豆國石室崎の南西約三十海里の沖合に浦鹽艦隊と認むる者三

隻商船一隻を率ゐ東航しつゝあり軍艦は三檣四煙突二隻三檣二煙突一隻商船は二檣一煙突の者なり』との電報大本營に到着、次で達したる電報に曰く『本日(廿四日)午前九時頃伊豆南岸の沖合に於て二檣一煙突の商船一隻擊沈せらる敵艦は其後針路を西方に轉じ伊豆國石室崎の南西約四十海里の處に於て十時三十分頃三隻とも其影を沒せり沖合少しく煙霧あり』と、前電には東航と云ひ後電には針路を西方に轉じとあり。想ふに商船を拿捕し之を擊沈するに至るまで暫く其方向を變じ之を擊沈し終りたる後、再び西に向ひしものなるべし。此擊沈せられたる商船は何號なるや明ならざるも、伊豆沖に擊沈せられたる英船「コンマンダー」號は恰かも之と一致するを見る。

露艦は益々西方に進航し、遂に遠州灘に入りて午後三時遠江國御前崎燈臺より南五十度西北距離三十五海里の沖合に至る比、英國汽船「ツイナン」號(圖南號)の來るに遭ふ。露艦は直に停船を命じ、端艇を以て士官護衛の下に「コンマンダー」號の乘組員たりし印度人の水夫二十一名を送り來れり。士官の言によるに、同船乘組人中歐巴羅人は浦鹽に送らるべしと。

露艦隊は印度水夫を「ツイナン」號に引渡して午後四時三十分同船を釋放し、更に針路を東方に轉じて房州方面に向ひしが、途上端なく獨逸汽船「テア」號に邂逅し、又之を擊沈せり。同船は獨逸人六名、日本人二十四名、支那人二十四名乘組み、魚油及魚粕類を積載し、七

月二十三日小樽港を發し、多度津に向ひ航行せるものなり。

敵艦隊は獨逸船「テア」號を擊沈したる後針路を北方に轉せり、爾後數日其蹤跡を晦ませしが、三十日午後一時頃に及び、再び津輕海峽の東方に現はれ、午後三時二十分頃海峽を通過し、八月一日午後四時半頃浦鹽港に歸着せるものゝ如し。

第三十七章　大石橋の役

第一節　地勢及兩軍の配備

大石橋の戰は遼陽戰と其狀態を均しうするもの、敵にして、若し飽くまで此地角に據るの決心を有し、又第四軍の爲に其左側背を脅威せらるゝとなかりせば、遼陽の如く、必ず數日を盡して、始めて決すべき大戰の一なりしならん。然り大石橋は敵の爲に甚だ樞要にして捨つるに忍びざる地なりしと雖も、奈何せん、其本據たる遼陽を距ること二十五六里而して日本軍の右翼たる黑木軍よりは却て二十里を隔つに過ぎず。即ち大石橋に第二軍を拒止するも、第四軍及第一軍に背後の虛を衝かれんか、殆ど退却の道なきに至り、クロパトキンの全軍は中立地帶に入りて武裝を解くの他術なきに至らん。是れ輒く大石橋を捨て去りし原因なり。

然れども敵は要地を一日たりとも長く占領せんと欲し、其前面一帶の防禦は頗る周密を極め、其兵力亦歩兵四個師團、砲三百門餘を有し、我軍の左翼沖積層地に暴露せし第四師團の如きは、一時非常なる苦戰に陷り、終日一歩も進むこと能はざりしのみならず、其砲隊の一部は夜に乘じて潛に退却せざるべからざるに至れり。蓋し敵砲火の盛なりしは、實に金州及得利寺戰の比に非ざりしなり。

蓋平より海城に至る間、十五六里、小丘陵脈は蓋平の北、海山塞に至りて盡く、其海岸平野は廣く遼河平原に連る、遼河の河口に營口あり。北清に於ける物資呑吐の良港なり。此要地日本軍の手に歸せば露國は其運輸交通全く西比利亞鐵道に由らざるべからず。而して營口を失はざらんと欲せば、勢、大石橋に於て日本軍の北進を阻碍せざるべからず。敵は即ち其左翼を大孤山上陸軍、其後方を黒木軍に威壓せらるゝに拘らず。孜々として其防備を講じ、クロパトキン將軍はサハロフ中將と共に、遼陽より此地に來りて、以て其軍を指揮せり。

大石橋は清國にありては、遼陽街道上の一驛站に過ぎざれども、露國は營口との連絡上、將來益々大都會たらしめんとするの計畫を立て、東清鐵道は此れより營口に達する支線を起し、停車場の大なる、遼陽、鐵嶺等に匹すべし。敵の據りし陣地は、大石橋を南下する

こと約一里餘其一半は平原にして青石山白虎嶺太平嶺の諸主峰を其脈に有する一丘陵脈あり、此丘陵に據れる敵は、全線の首核として、殊に防備を嚴にして、湯池、三元井附近に歩兵一個聯隊を出し、太平洋西方高地、及其南方に當れる萬千口子西方高地に數個の砲壘を築き、以て我右翼方面に對せんとするに似たり。此に連りて、勉汗溝北方高地にも、亦有力なる砲壘を築き、其道路上の低地は殊に砲兵陣地に適せるを以て、數多の砲臺を築き、優勢の部隊を置けるが如し。勉汗溝以西は青石山を中心とし、村落を利用し多くの砲壘を築きたり。

山地方面の防備は此の如し。此より漸く西すれば、地漸く平なれども牛心山、太平山等あり、共に砲兵陣地たるに適せり。而して此陣地の後方大石橋附近には、更に東西に亘る低山脈あり。以て第二線の防禦を爲すに足る。

遼陽街道は蓋平を出でゝ石門、青石嶺舖を經、其平野と山地と相近接する東の一端を過ぎて橋臺舖に至る。橋臺舖の南方一里弱の地に、一小丘あり、望馬臺と稱す。敵は此處にも力を用ゐて防備を施し、掩壕を穿ち、掩蓋を設け、砲壘を築き、鐵條網を廻らし、日本軍如何に强襲するも容易に略取する能はざらしむ。敵の輜重蓋平を撤し去りたるは、此良好なる陣地に據りて戰はんと欲したるが爲なり。而してクロパトキン將軍は停車場に在り。

敵が其左翼山地に據りて、我を防がんとせしは、蓋し其當を得たるものにして、我軍も亦山地を進みて、以て其嶮を拔かんとせり。

我野戰各師團の位置は第五師團最も右に位し、其司令部を置き、其前哨は石門の東老青山を占領し第六師團は第三師團の左に連り、其司令部を蓋平東門外に置き、其前哨は石門の嶮を扼し、第四師團は其司令部を石門外に置き、第六師團と相連聯し、而して秋山騎兵旅團は大部隊の騎兵斥候を放つて敵の騎兵旅團と相對抗することを勉め、其司令部は第四師團司令部の附近にあり。

敵は前述の如き地の利に據り大平山に二段、牛心山に三段、拉々山に一段、白虎青石の二山に各二段づゝの塹壕を築き、且各山に添へる村落中逵子窩棚、孫家嶺子、小房身、橋臺舖、新民屯、灰庄屯、郭家溝等には、砲兵と共に、歩兵の大部隊警戒網を張りし工事に據り散兵濠に銃眼を穿ち、掩蓋を造り、且つ處々に鹿柴を置き、鐵條網を設け、又狼窪及地雷を埋沒し、其延長實に四里に亘れり。而して之を守れる敵の兵力は、第一、第九、第三十五師團及西比利亞豫備師團に屬する部隊にして、彼得利寺の戰に破れたるスタケルベルヒ將軍も亦此地に在り。敵の我第一軍、第四軍の前進を恐るゝこと甚しきは既記の如し。而も敵將クロパトキン亦徒に退却することの甚だ智なきを知り、我三軍の連衡せざるに方りて、一舉に之を破らんとの計略を持せしなるべし。殊に、其附近は、物資供給の兵站地にして戰略上極めて主要の地點たる營口あり、此地一度日本軍の手に委せば、旅順の要塞は絶對的に孤立となり了り、又一片の信書をも送ること能はざるに至らん。是れ敵が左阿右顧しつゝ猶敢て一戰せんとせし所以の一なり。

此時滿洲軍總司令部は既に大連に上陸して、以て其大規模なる作戰の指揮を取れり。

第二節　二十三日の戰

七月廿日、軍司令部より發したる軍命令は左の意味を以て、各師團に傳へらる。

一、軍は來る二十三日攻擊運動を開始す。

一、右翼第五師團は先づ流家溝西方高地附近に前進すべし。

一、第三師團は先づ神樹屯附近に前進すべし砲兵一聯隊を附す。

一、第六師團は先づ西山崗子附近に前進すべし砲兵一聯隊を附す。

一、第四師團は先づ五臺山附近に前進すべし。

一、騎兵旅團は軍の左翼を警戒すべし。

一、軍の總豫備たる歩兵二聯隊砲兵一聯隊は先づ溝家屯附近に至るべし。

一、予は廿三日、高家屯に至る。

而して各野戰隊の宿營地出發期は二十三日午前四時前後に制限せられ、廿二日の夜は東、干家屯千馬河子より西、海山寨に至るまでの各野戰隊は、皆眠らずして其準備に從事せり。

一、第五師團

右翼縱隊たる第五師團は三縱隊となり午前四時前進に就く。時に月既に西に落ち、闇夜咫尺を辨せず、且屢蓋州河を徒涉せざるべからず爲に疲勞困難、名狀すべからざるものあり、漸く黎明に近き、左翼に連繫せる旅團の前面に當り、既に銃聲の起るを聞く。

敵の一部隊蓋州河の北方現家玉にあり。我師團の先進隊は直に勇猛に突進し、蓋州河を渡り銃砲火を開く。山間に散の騎砲兵あり、我に對して霎時應戰せしも、我後續部隊の陸續東北方盆地に展開するを見るや、忽ち遁逃し、現家玉に在りし歩兵も亦先を爭ふて退却す。依て我前進隊は直に現家玉の狹隘を占領せり。時に午前十時第五師團長は之を見て直に牙營を現家玉に移し、以て前方の敵狀を視察す。時に第三師團方面に砲聲起り漸次激烈となる、我前進隊は益進みて馬家溝に至れば、敵既に遠く遁れて其影を示さず。

午後二時、師團長は現家玉より前進を起し馬家溝に至り各隊をして現位置に露營の計を爲さしむ。

第五師團は大石橋戰に於て最も重要なる任務を帶びたり。軍の方略は、軍の主力を右方に展開し潛行に便なる山地を猛進して運搬に便なる山砲隊をして最も敵に接近せしめ、攻撃目標たる太平嶺附近の敵陣地を最初に攻陷し、以て敵の左側背を衝かんとするにあり。而して又、敵か其主力を勉汗溝以西に置き、殊に望馬臺附近に於て、極力我を拒かんとするを知り、乃ち第六、第四の兩師團をして、之を牽制せしめ、我攻撃目標の地點に住ることを思はしめ、其虛に乘じて右翼第五師團に第三師團と協力せしめ、太平嶺を攻陷せしめんとす。

上田師團長は此意を承け、殊に其隊の前進に就いて力を盡したり。而して師團各隊は現在占領せる地點に留まるべき命令を受くるも、明日の大戰に當り遂行すべき大任を完全に實行せんと欲し、種々苦心せり、而も其地點より一歩も前進する能はず、山砲隊の本隊は馬家溝より以北二千米突の山間にありて露營し、歩兵は其前方三千米突の東北線に移り、師團長は馬家溝の狹隘にありて、以て夜を徹せり。

二、第三師團

第三師團は、右翼第五師團の左に連繫して、勉汗溝、山西頭附近に其主力を置ける敵を攻撃すべき命令を受け、二十三日午前三時頃、北門家峽、劉家屯、關家屯、劉家屯の線を發

し、天明二道房に達す。其前に獨立山あり。花兒山と呼ふ。敵は此一部隊を置き、尚其西南約千米突の高地にも敵の騎兵あり、以て我を拒止せんとするものゝ如し。砲兵第三聯隊長島川大佐は即ち其附近に放列を布き、花兒山西南方高地の敵に向つて砲撃を開始す。此時、敵の小銃彈來ること夥し。是に於て、第一大隊第一中隊は更に二道房の左方數百歩に進み、一高地を占領して、放列を布き、以て敵を猛射せり。敵直に退却を始む。騎兵小隊即ち前進して、確實に花兒山を占領す。時に午前十時。

第六聯隊の歩兵は直に猛進し、本隊亦之に次く。右翼第三十四聯隊も其道路上の右路を進し。砲兵は一時間の後、花兒山の東北約五百米突の高地に向つて進む。

展望すれば前面の丘陵波濤のごとく連れる間に、孫家屯北方高地脈に當りて、大部隊の敵の歩兵あり。又白家寨南方高地に、約三個中隊より少なからざる砲を配置せるを知り得たり。我歩兵部隊は丘陵に隱れ、次第に開展し、第六聯隊は其右翼を進め、第三十三聯隊は其左翼を進めり。

午後五時に至りて、白家寨南方高地に在りたる敵砲始めて其の砲彈を我に送る。而も皆我陣地の前方三千米突の處に落ちて、些の効果なし。

午後六時に至り、命令あり、今夜は此地點に止まりて露營すべし。即ち歩兵は皆花兒山の

前後に止まり、其前進線も亦劉家屯に及ばず。砲兵は禿老婆店に露營し、師團司令部は依然として二道房に在り。

此夜、前線の歩兵部隊は皆敵の夜襲を警戒し、歩哨を置き、斥候を放ち、火を禁じ、嚴重を極む。砲兵第二大隊第六中隊長森大尉（勝太）は此夜危險を冐して最も適當なる陣地を選定せり。

三、第六師團

中央縱隊を形成せる第六師團は二縱隊を爲して、午後二時其宿營地を發し、全軍右に偏りて山地に據るを主とせる軍の籌策に從ひ、本街道上より頗る右に位置し、高地と高地との間を前進せしが、黎明に至りて、其前衞隊は腰嶺子東方に向つて、敵の歩兵騎兵の動くを見たり。騎兵一中隊之に向ひ、忽ち其地を占領し、午前八時三十分、其前線は既に標高二百米突を有せる對家山の高地に達せり。

砲兵第六聯隊は始め本隊と共に前進せしが、道路險惡なる爲め一間道を迂回し、黎明高家屯に達すれば、前衞は既に谿谷を隔てゝ敵と對戰中なるを認む。即ち萬難を排して、急遽其左方に進出し、對家山西方高地を占領して、約一個中隊の放列を布き、以て五臺山附近にある敵砲と對戰せり。敵は少くとも砲一個大隊を有し、其勢頗る猖獗を極めたれども、

午後一時前後、我第六聯隊の砲前進して、臥龍岡東方に放列を布き、頗る有効なる砲彈を送るに及び、漸く衰へ午後三時に及び全く退却せり。師團の歩兵は着々前進し、臥龍岡より本街道に亘る線を占領し、完全に、第四師團の第七旅團と相連繋して以て五臺山一帶の地を占有せり。敵は漸次退却して望馬臺、三河子線を保つ。師團長は此時臥龍岡附近にありて、露營を張れり。砲隊も臥龍岡附近にあり。

四、第四師團

左翼縦隊たる第四師團は本街道を主線路として前進の運動を起せり。其最左翼、黄狼堆に面せる地は、秋山少將の率ゆる騎兵の大集團あり。機に應じて、一は我第四師團を保護し一は前進して敵の騎兵團を撃破するの任務を有せり。

縦隊の進んで青石嶺に達するや、右は腰嶺子より左は五臺山に亘りて、敵の歩兵の大部隊密集し、砲兵亦約二十門放列を布きて、我を阻止せんとするを認む。

是に於て砲兵第四聯隊第二大隊は腰嶺子の西方高地の北麓に放列を布きて、五臺山高地の敵を砲撃す。福永聯隊長は更に砲兵少佐武内順次の引率せる第一大隊を腰嶺子の北方高地に進め、同じく五臺山の敵を攻撃せしむ。敵匆惶其影を没して、山背に逸し去る。

茲に於て小川師團長は、歩兵大佐能美成一の率ゆる歩兵第八聯隊をして五臺山北端附近の

線に迫らしむ。敵は我大兵の至るを見て、漸次退却したるを以て、歩兵部隊は直に五臺山一帶の地區を占領し、戰闘隊形を以て露營し、砲兵隊は朱家屯に露營せり。

此の如く我部隊は東北下湯池、羊草溝南方村落、馬家溝、禿老婆店、二道房より、中央、臥龍岡、李家屯に及び、左翼は五臺山より朱家屯、太平社附近に至りて、以て前進を停止せり。

此夜敵は必ず夜襲すべきを期せしに、各前線共に其事なく、皎々たる明月は漸く西山の翠微に沈み、二十四日の朝は、清爽掬すべき高爽の涼風と共に來れり。

第三節　廿四日の大戰

前夜來、斥候を放ちて一意前進の計を爲せし我部隊は遂に敵の第一線に達す。

一、第三師團

二十四日黎明第五旅團（山口少將）の前衛隊は既に前進して、劉家屯北方高地（標高百三十六）に登攀し本隊亦漸次に前進し、其北方一帶の山地を確實に占領せり。時に午前八時。第十七旅團の第卅四聯隊は其左に連れる山地を占領せしが、其前に連れる丘陵、谿谷には敵の砲兵歩兵充滿せるを以て、姑く其地點に止まる。砲兵第三聯隊は午前二時、禿老婆店を發し、劉家屯を經て、唐家屯の東北約六百米突の地に至る。是前夜、第二大隊第六中隊

長森大尉が千辛萬苦して偵察選定したる陣地なり。前面に敵の騎兵若干あり。又北方千米突の高地に少許の監視兵あり。我歩兵は恰も前進に際したれば、我砲隊は之を援護せんが爲め砲戰を開始す、時に午前六時三十分。敵は忽ち退却したれば、砲撃を中止して以て時機の熟するを待つ。

此間各方面に於ける彼我の砲戰漸く盛ならんとし、左翼第四師團及第六師團の方面殊に盛なり。

午前九時我師團の左翼前衞たる第三十四聯隊は、前面に於ける敵の高地を奪取せんとするの運動を開始す。砲兵之を援護せんが爲め約一個大隊の砲門を開く。歩兵は之に勢を得て前進し、其左方一帶の高地及畠地を占領せり。午前十時敵の砲彈漸く來り、其砲兵陣地の白家寨の東にあることを認め得たり。乃ち第一大隊をして專ら其方面を猛射せしむ。

第五師團は此時右翼に進出して、其司令部は我砲兵陣地と一谿谷を隔てたる羊草溝西方高地(標高約百米突)に至りしも、太平嶺より北部白家寨に其砲列を布きし敵の砲兵頗る頑強にして、容易に羊草溝北方一帶の丘陵脈を占領すること能はず、其山砲隊は幾度か其陣地に進入せんとし、而も幾度か敵彈の猛烈なるに退却せざるを得ざりき。殊に、我師團との連絡點に松山あり、其位置、進入するに困難なれども、我之を占領せば、敵の砲兵陣地を攻

撃するに利あり。此に於て第三聯隊の砲兵は其一部を割きて此地に進入すべしとの命令あり。島川聯隊長は乃ち砲兵第二大隊の二個中隊をして直に其方面に前進せしむ。敵亦之を見て、北部白寨子の東五百米突の高地より、太平嶺の南側に亘れる線に砲列を布き、砲撃最も猛烈を極め、我歩兵は地物に據り、前進を中止し進入を企てし二個中隊の砲兵も少時之を路傍に避けざるべからざるに至る。是に於て我本陣地に在る砲兵は、一個聯隊を悉して砲門を開き、以て敵の大砲撃に對抗せり。

此間東北方高地に進みたる砲兵二個中隊は、非常なる困難を侵して、辛うじて其麓に達し急峻なる山路の斜面を登攀して松山の一角を占領するや、敵は盛に砲撃し且歩兵をして機を見て前進せしめんとするの勢を示せり。而も我は六門の砲を開きて、猛烈なる射撃を其方面に送り、又其幾門を東方百六十米の鞍部に擧げんとす、初め敵砲の標準的確にして我陣地に命中するもの尠からざりしが、午前十一時頃より彈道、距離共に大に亂れ、其周章狼狽するを示せり。

二、第六師團

第六師團は前日臥龍岡より本街道に亘れる線を占領し、廿四日未明、前日の如く兩縱隊となりて前進し、孫家屯の北方高地に達するや、敵は望馬臺及其以東に亘れる陣地より盛に

之を砲撃し、其歩兵も亦掩壕に據りて堅く我を防止し、容易に前進すること能はず、止むを得ず砲兵の威力に由りて之に當る。

砲兵第六聯隊(大佐原義成)は胡家屯(五壺山東北方半里餘)に位置して其砲全部の放列を布きしが、敵は牛心山、白虎嶺、望馬臺等の線に堅固なる防備を施し、我軍前進の行動を瞰視せるを以て、歩兵は容易に前進すべからず、陣地亦敵に暴露して、甚だ良好ならざれども、勝敗を一戰に決するより他に道なき境遇に立ちたる我砲兵隊は三大隊相前後しつゝ、約一里に亘る正面を以て、展開放列陣地に就き、一大砲戰茲に開かる。

我砲兵隊が幅員一里に餘る陣地より火蓋を切るや、敵も亦盛に砲彈を送れり。

此時中隊長森大尉(秀吉)は、獨り掩堡の上に立ち、双眼鏡を以て我彈着點を檢し、正確に彼我の距離を測定し、中隊の全砲車に向ひ、大聲、四千八百米突と號令せし一刹那敵の巨彈爆發し、名譽の戰死を遂げたり。三宅中尉は是より先既に右足の脚部を長靴と共に打貫かれたれども、之を聞くや、奮つて自から指揮を取り、愈々猛烈なる砲撃を敵の砲兵陣地に加へたり。

十時より十二時に至る間は、砲戰其頂點に達し、我陣地の上は炸烟漠々として片時も絕ゆる時なし。

此時左翼に連る第四師團の砲は殊に苦戰を極めたる如くなりしも、後部に續ける砲兵旅團第十三聯隊は、第六師團の砲との中間に急遽進入して、新鋭の砲火を望馬臺の敵陣地に注げり。午後一時に至りては、其東方に位置せる敵砲沈默し、我歩兵に少しく前進の餘地を與へたれども、三家子方面の敵は間接射撃を爲し殊に無烟火藥を用ゐたるを以て、容易に其陣地を知ること能はず、接戰更に數刻に及べり。

我歩兵は砲戰中に着々として前進の機會を作るに怠らず、孫家屯北方高地を占領したる後更に青石山南方の敵に對して小砲火を交へ、徐々前進して、青石山と望馬臺の中間に位置せる地區に向ひ攻撃の歩を進めり。

砲兵第六聯隊は、終日苦戰の後、胡家屯東方砲兵陣地より更に前進を起し、漸く孫家屯北方の歩兵線上に達し、猛烈に敵の砲兵を砲撃せり。時に午後六時。

此時敵の砲兵の所在既に明に爆發榴彈を猛射することを得たるを以て、我は漸く優勢に、敵砲次第に衰ふるの形勢を呈せり。而も時既に日沒に際せるを以て戰闘陣列の儘彼我互に相對して夜營す。

三、第四師團

第四師團が左翼に配置せられて、廿三日本街道、太平莊附近の線に止まりしと、既記する

所の如し。其翌日未明より前進せしことも亦各師團と異ならず。

福永大佐の率ゆる砲兵第六聯隊は、本隊と共に前進せしが、其第一大隊（大隊長少佐武内順次）は、五臺山北端の峰燧臺（花大臺）附近に陣地を占領せしに、敵は望馬臺山下の陣地より、忽ち有力猛烈なる砲火を送れり。

我は既に敵の陣地を發見したるを以て、盛に射撃を開始したり。而も彼我共に未だ有効なる射距離に入らず

此時第二大隊も亦砲兵第十四聯隊と共に左方後列約一千米突の地點に放列を開きて砲戰を開始す。午前八時より九時に亘りて、砲戰激烈なりしは既記の如し。

我歩兵は此間に於て前進し其前衞隊は博洛舖の東西に亘る線に進出せり。午後一時砲兵第六聯隊第一大隊は勇敢なる前進を起して、歩兵の一隊の今僅に占領したる博洛舖に向つて運動を開始し、該村落の東南方より、博洛舖北端に至る間に放列を開き、先づ望馬臺の敵に向つて砲火を開く。敵は我第一大隊の最も突出せる陣地を占領せるを知るや、盛に該方面に向つて砲火を集中せり。軍司令官の觀戰地點にありて、敵の砲彈我一陣地に滿つと言ひしは、即ち此陣地なり。敵は時を經るに從ひ、愈猛烈なる砲火を送り且つ其騎砲兵は牛心山方面より、我一大隊を斜射し、殆ど重圍の中に陷れり。加之、時恰も斜陽を面に受け、

且つ前面には遮蔽地物ありて、直接に敵の砲兵陣地を見ること能はず、爲に一層の不利に陷り、又如何ともすべからざるに至れり。即ち今の時に際して、如何に猛射を加ふるも、徒に砲彈を費すのみにして、多くの効果を敵に與ふること能はざるを以て、敵の猛威激烈なる火力の中に在りて、射撃を停止し、砲手は砲側に相對座して、敵の動靜を窺はざるべからざるに至れり。

我の砲撃を中止するや、敵は我砲沈默したりと爲し愈勢を張り、疾風迅雷の如く砲彈を送り來る、此時に於ける我損害と悽愴なる光景とは殆ど名狀すべからざるものあり。

此方面は斯の如く敵彈の集中火の裡にありたるを以て、歩兵部隊は進捗の機會なく、徒に朝來占領したる地點に止まり、空しく日の漸く西に傾き去るを見る。

午後六時に至り、右翼に連れる第六師團の砲、頗る勢力を得、其左に接せる砲兵第十三聯隊も亦盛に敵陣に砲彈を送れり。是に於て、第四聯隊も悉く砲門を開始して、晝間の復讐的射撃を行ふ。博洛舖に突出せる第一大隊亦之に應じて、勵聲疾呼、敵の牙營を猛射す。此掉尾の戰に日は漸く暮れんとし、我は一齊敵を急撃して此日の砲戰を終らんとするの一刹那武内大隊長は頭部に負傷し、川北大尉直に代りて指揮を取れり。日暮るゝに及び歩兵、砲兵隊皆其地點に在りて夜營す。

四、第五師團

第五師團は大石橋役に於て、軍の攻撃目標たる地點に向へり。此方面にして充分に戰術上の伎倆を發展するに非ずんば、軍の策略も遂に徒爲に歸し去るの虞なしとせず。故に軍司令官は其右に連れる第三師團をして、稍此と相連屬せる攻撃を行はしめたり。砲兵の一部を第五師團の左翼たる丘陵の一部に進入せしめたるが如き、第五師團と同時に第三師團の一部の夜襲を行ひたるが如き亦謀略の存する所を窺ふべし。軍の目的とする所は敵の左翼を擊破して、以て大迂回を行はんとするにあり。

第五師團は既記の如く、其歩兵部隊は羊草溝南方の高地より下湯池一帶の地に至りて止まり山砲隊は馬家溝以北の地に露營せしが、廿四日午前二時、前衛は既に徐々行動を開始し其右翼第二十一旅團は進捗殊に速に、敵の斥候騎兵を逐ひ、監視兵を擊ち其尖兵は既に湯池附近に達せり。

然れども左翼を進める第九旅團は、太平嶺の敵砲壘其前に在るを以て、進出頗る難く第十一聯隊の北部羊草溝に入りしは、午前七時なり。北部羊草溝は南部羊草溝と低洩なる一丘陵を隔て、其右に一個の、獨立山あり。前夜の偵察によれば、獨立山は以て我師團司令部の觀戰地と爲すべく、北部羊草溝以北に横れる一丘陵脈は據つて以て山砲陣地たらしめん

と豫定せしが、敵は清國民を利用し、高地に在りて、我歩兵部隊及砲兵部隊の前進を合圖もて報じたるが爲め、忽ち敵彈の猛射する所となり、前進頗る困難を來せり。

我山砲隊は其丘陵脈に據らんとして一たび失敗したれども、此地點を占有するに非ずんば到底完全なる進捗を圖ること能はざるを以て、砲兵第五聯隊長永田大佐は聲を勵して其部隊の進出を命じたり。

中央大隊は砲術家を以て名ある砲兵少佐石井嘉三郎の指揮の下に、勇敢に其丘陵脈に前進し、機を見て、以て其進出を圖らんとせり。敵は合圖によりて、之をも知りたるが如く、萬千口子及太平嶺の陣地より盛に我に砲彈を送り、其危險殆ど名狀すべからず。時正に午前十時。各師團の砲戰は既に盛なり。

此方面の我砲は未だ完全なる砲彈を開始する能はずして、徒に敵砲の我陣地に炸裂せるを認むるのみ。石川少佐は聲を勵して、遂に其中央脈に進入し、敵彈を侵しつゝ、頻りに放列を布きつゝありしが、敵彈飛來して、其胸部に命中し、忽ち名譽の戰死を遂げ。充分進入すること能はず逡巡時を移せり。又其右方丘陵に登りし山砲は、同じく敵の猛擊を受けしも、午前十一時頃には、其地點に進入して、一箇大隊の放列を布き、萬千口子西方の敵の陣地と勉汗溝東方高地との陣地に對して、稍有効なる砲擊を行ふことを得たり。左翼に

出でし砲隊も十二時に至りて、放列を布き終り、太平嶺の陣地及其谿谷に密集せる歩兵を攻撃せり。

既にして中央砲隊も、遂に其丘陵脈上、道路の右方に位置して放列を布き、三面相應じて以て敵砲と相對せり。午後一時半に至れば、第三師團も亦砲二門を出して、以て其方面を掩護す。

午後一時より二時に亘り砲戰殊に激烈なりしが、午後三時三十分敵の一部隊は突如逆襲し來れり。山麓にありし我豫備隊は、警を聞くや、直に其東方の山隈より驅け上りて、其數大凡二箇中隊ばかり、其銃砲火の中に猛進し、我左右の陣地よりも、猛烈なる側射を敵に注ぎたり。我砲兵陣地には、援護の歩兵若干あり。又前進歩兵部隊もこれを聞いて直に其後に出でたれば、敵は其目的を達すること能はざるのみならず、遂に腹背包圍を受くるに至り、其附近に、死屍七八十を殘して敗走せり。

軍司令官は各團體の砲戰甚だ苦境に陷れるを見右翼方面にして敵の左側背に迂回することも能はずんば、此戰爭の危機は却て我軍に落つるやも料るべからざるを知り、軍參謀少佐鈴木莊六を遣して、激勵し且つ命を傳へしめて曰く、『貴師團は全滅を期して勇敢に突進せよ』と。

此に於て第五師團長は、參謀長、參謀幕僚等と共に攻撃の進捗を計りしが、敵の砲兵陣地は頑強堅固にして、其猛火容易に衰へず、動もすれば我山砲隊却つて其脅威する所となるの勢あり。而も我山砲隊は熱心に攻撃を進行し、午後六時七時に至りては、稍地歩を進捗することを得たるものゝ如く、師團長は率先して、其牙營を丘陵脈に進めたり。第五師團の名譽ある夜襲戰此に於て始まらんとす。

五、大夜襲

終日勇敢なる戰鬪も、終に敵砲を沈默せしむること能はざりし第五師團は、全滅を期しても進出すべしとの軍命令を奉じ、其夜を以て全師團を擧げて夜襲を行ふべく決せり。

此決意は上田師團長の發意に出で、參謀長、參謀幕僚の同意を得、更に之を軍司令官に上申せしに、軍司令官も其の處置を是認せしを以て、遂に壯烈無比なる大夜襲を行ふに至れり。

師團の左翼を形成せし第九旅團第十一聯隊は午後七時の頃に於ては、既に萬千口子東南方の畑地に達し、其右に連れる第廿一聯隊も亦三元井附近に退却せる敵の歩兵を擊攘する事を得たり。右翼旅團は下湯池より湯池を攻略し、是れ亦日沒頃には三元井の東南に迫れり。萬千口子の敵壘は最も山砲隊を惱ませしものゝ、然るに我第九旅團の歩兵は、既に其村落に

迫れり。萬千口子の村落と其有力なる敵壘とは、其距離約千米突、村落既に我手に歸せば、敵壘の保つべからざるは自然の數なり、是に於て敵の歩兵は此村落の西北端に密集して、盛に我を防拒せんとす。

時に日は既に沒し、明月天に冲し、劒光閃々たり。砲聲猶盛に銃音亦未だ已まず、人馬肅肅歩一歩敵の堡壘に迫る。敵は我部隊の近くを見るや、巧に一齊射撃を加へ、我兵士の斃るゝもの尠からず。而して左翼旅團の先頭第十一聯隊の第三大隊は、將に敵壘に肉薄せんとし、先づ決死隊を募る、言下之に應じて皆我行かんと言はざるものなし。乃ち十二中隊の決死隊をして、先づ突撃せしむ。鹿島中尉之に長たり。

敵壘よりは砲火を集中するのみならず、小銃を亂射すること雨霰よりも繁し。我決死隊は突撃の喇叭と共に前進し、或は地物に據り、或は凹地に隱れつゝ、遂に敵壘の前に達し、小銃を亂射して以て馳突す。敵は山上より小銃を以て之に應じ、小銃用を爲さゞるに至るや、巨石を投じて以て之を防ぐ。敵壘の斜坂頗る急なるが爲め、我隊の運動自由ならず、我聯隊の第一大隊は萬千口子北方より我に迫らんとする敵の歩兵を撃退し、其第三大隊は殆ど全力を擧げて敵壘に迫りたるが爲め、敵は稍遂巡せり。我決死隊は之を見て勇氣百倍、遂に猛烈なる白兵戰を演するに至れり。

敵砲は此時既に運び去られたるものゝ如く、山上には、半ば砲兵半ば歩兵ありて、猶頑強に我に抵抗し、其右方に位置せる砲壘よりは猛烈なる砲火を我に注ぎしが、我後繼部隊、陸續として至るを見るや、午前一時前後、敵は遂に萬千口子西北方高地を捨てゝ敗走せり。第二の砲壘に於ても同じく多少の白兵戰を行ひたる後、盛に萬歳の聲を擧げたり。太平嶺の敵も亦勇猛に我に當りしが、我軍の烈しき壓迫を受け如何ともする能はず、午前二時全く壘を捨て、其砲は安全に後方に運び去れり。

我師團は夜襲の効果を擧げ得て、午前四時半曙光一帶の地に至らんとする頃、既に日章旗の敵壘上に飜るを見たり。

第三師團の最も左翼に位置せし歩兵第六聯隊は歩兵大佐越野季五郎の指揮の下に、午後二時頃勉汗溝を占領すべき師團命令に接手せしが、砲戰盛にして進出の期至らず、午後五時に至りて、始めて辛うじて東部勉汗溝の南方高地及び山西頭に亘れる線に散兵線を布くことを得たり。此時、敵は東部勉汗溝の西方及北方高地にありて、頻りに我に小銃火を注げり。我聯隊は少時銃戰を交へしが、一擧攻陷せんと欲し、第三大隊は高島歩兵少佐の指揮の下に、午後七時頃、山西頭東方畑地に展開し、以て勇敢なる攻撃準備に移れり。

第十一中隊は左翼となり、第九中隊は本隊となり、直に高地の

敵に向つて前進を始む。山上にありし敵約二個中隊は我兵の進むを見るや、即居塞東北高地より猛烈なる側面射撃を加へ、小銃彈の飛ぶこと恰も霰の如し。我兵これに屈せずして猛進し、八時四十分に至りて、第十一中隊は、勉汗溝西方高地の南方斜面の東部の一角に、第十二中隊は其南方側面の中央山腹に、第九中隊は同高地の南部側面に達し、盛なる突撃を開始せり。

第一回の突撃を試みしは、横山大尉（當三郎）の率ひし第十一中隊なり。大尉自ら率先して陣頭に進み、日章旗を掲げつゝ、且戰ひ且進み、遂に其高地の絶巓に達せり。此時敵と相距ること僅に三四間、兩隊の銃劍互に相接し、凄慘の狀言語に絶す。大尉自ら刀を振ひて敵を斃すこと數名、忽ち敵彈大尉に命中して戰死を遂ぐ。中央及左翼を進みし第十二、第九の二箇中隊も、此時亦高地の絶巓に達し、接戰格鬪亦激烈を極む。高島大隊長亦中央なる第十二中隊の前方に進出し、軍刀を抜きて格鬪し。手づから敵數名を斬りたり。接戰は此に止らず。愈々激烈に、兩軍互に石を投げ、敵の如きは、十字鎌、石材等を投ぐるに至れり。而して敵は遂に敗退せり。

第四節　追撃戰

二十五日東方漸く明ならんとする頃、右翼師團より夜襲戰の効果を軍司令部に報じ來り、

萬千口子、太平嶺一帶の敵陣地の全く我に歸したるを傳ふ。太平嶺既に我手に歸す、迎風寨、白家寨の道路は竟に守るべからず、大石橋一擧して抜くべし。

全線追撃の命令は忽ち電話に由りて四方に傳へらる。

左翼第四師團は曉に至りて、徐々として前進せしに、望馬臺の敵陣地は、寂として聲なし。我歩兵部隊は乃ち望馬臺附近を占領し、敵が一夜の中に全く退去したるを知る、

砲兵第四聯隊の第一大隊は、橋臺舖に向つて追撃すべしとの命を受け直に前進す。午前十一時頃、砲兵隊の螢家屯附近に達するや、敵の騎兵及歩兵の大集團は、大石橋附近に在りて、其騎砲兵も亦東夏家屯に位置し、我砲兵隊の追撃に對し、猛烈に砲撃す。蓋し其歩兵の退却を援護せるなり。我歩兵部隊は橋臺舖に進出したれども、此敵の殿軍の砲撃猛烈にして前進する能はず、我砲の來るを待つ。砲兵第一大隊は大隊長武田少佐負傷し、川北大尉代りて指揮を取り、聲を勵して、其全放列を螢家屯附近に布き、先づ敵の大集團に向つて猛烈なる射撃を開始す。

射彈大凡三十餘發にして、敵の大集團は北方に向つて退却し、次で敵の騎兵も亦退却を續行せり。東夏家屯に在りし騎砲兵も我砲兵の橋臺舖に進出するを見て、匆皇其砲を收めて退却す。

是に於て、騎兵第四聯隊の一部は其敗敵を追撃して、大石橋に入る。

第六師團の歩兵部隊は孫家屯以北より青石山と望馬臺との中間の地區に露營せしが、廿五日、夜未だ明けざるに乘じて前進し、砲兵第六聯隊は、昨日の陣地に位置して、砲撃を開始せしに、敵砲兵陣地は寂として我に應戰する氣勢を見ず、是に於て全線攻撃前進に移り午前九時青石山より灰庄屯北方高地を占領せり。

前方を偵察するに、敵は大石橋附近を北方に退却中なるを認む。乃ち砲兵第六聯隊の一部をして、猛烈なる急射撃を爲さしめ、尙一部隊を放つて、敵の側面を追撃せしむ。

午前十一時第四師團の騎兵大石橋に入るや、第六師團の騎兵の一部も、東方より馳驅して此に入れり。

第六師團は益々前進し、其先進隊は、大石橋東方の山脈を占領したるのみならず、夕に東何家屯、西金家屯を占領し、始めて戰鬪を停止せり。

第三師團方面は敵兵既に遠く、追撃の効なきを以て、午前は各隊共に戰場に留り、午後一時始めて前進を起し、第十七旅團は左翼に、第五旅團は右翼に、相並びて前進し、薄暮、第五旅團は丁家溝、第十七旅團は何家屯に達す。第五師團は夜襲の大成功の後、左翼旅團は張官屯に進出し、右翼旅團は三元井より橋木城街道を前進して、其方面に退却せる敵の

部隊を攻撃せり。而も此方面も距離遠くして、追撃の効果を奏する能はず。

大石橋は斯の如く完全に我手に占領せられたり。

敵は豫め退却に意あり、猛烈なる戰意を示しつゝ、夜間を利用してひそかに退却を行ひたるを以て、我軍の總追撃に移るや、時機既に遲く、遺憾、長蛇を逸し去りたるが如き觀あり。從つて鹵獲品亦甚だ多からず、只停車場に殘留せる糧秣數十萬石、石炭、石油等を得たるのみ。此役、敵の參謀長サハロフ中將徹傷を負ひ、コントラウイッチ中將亦右手に負傷せりと傳ふ。

此役我死傷は合計千〇七十七名あり、之を表示すれば左の如し

	戰死	負傷	計
將校	一二、	五九、	
下士卒	一三六、	八四八、	九八四、
合計	一四八、	八九五、	一〇七七、

大石橋の捷報、叡聞に達し、優詔第二軍に下る。曰く、

第二軍ハ大石橋附近ニ於テ優勢ナル敵ヲ攻撃シ尋テ第五師團ヲシテ夜襲ヲ爲サシメ終ニ大ニ之ヲ破リ防禦堅固ナル陣地ヲ陷レ併セテ營口ヲ占領シ水路ノ利ヲ收ム

朕深ク毎戰善ク其功ヲ奏シタルヲ嘉ス

奥司令官奉答して曰く、

臣等勅命ヲ奉シ遼東ニ上陸セシヨリ以來將卒共ニ士氣日ニ旺盛ニシテ逐次敵軍ヲ擊破シ今又大石橋附近ノ勝利ヲ收メ得タルハ一ニ　陛下御稜威ノ致ス所ノミ然ルニ屢々優渥ナル　聖旨ヲ下シ賜フ　臣等感激ノ至リニ堪ヘス益々奮勵シテ終局ノ目的ヲ達シ以テ　聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス

右謹テ奉答ス

第二軍司令官　男爵　奥　保　鞏

第三十八章　營口占領

大石橋既に我手に入る、先づ占領せざるべからざるは、營口なり。營口の要地なることは既に之を說けり。營口を我手中に收めば、海外より來る物資は悉く之を我に利用すること・を得るのみならず、北清地方殊に豐饒の稱ある遼河左岸平野の富をも自由に之を集むることを得べく、旅順の敵壘をも全く我滿洲軍の包圍の中に孤立せしむることを得べし。既に大石橋を得たる我は、營口の要地を占領するに於て、一刻も躊躇すべからず。

秋山騎兵旅團は第四師團の左翼に連繫して海岸沖積層地を運動せしが、廿四日敵騎大集團來襲せり。其交戰頗る激烈を極めたりしも、遂に之を擊退し、其日沒迄に營口を距る二里の地點に進出するを得たり。

廿五日、敵退却を行ひ、騎兵の大集團は主として其步兵及砲兵を掩護しつゝ、大石橋より營口に通ずる街道上を徐々退却せり。我騎兵部隊の一部は第四師團の左に連りて、猛烈なる追擊を加へ、併せて他の一部隊を放つて營口に進入せしむ。

營口には廿四日まで敵の步兵約四千、騎兵約五百、砲十門あり。遼河には砲艦シヴイチ、及假裝砲艦四隻ありしが、廿五日早朝、命令によりて、軍隊の大部分は北方に引上げ、軍艦は遼河を沂りて田庄臺地方に竄入したるを以て、我騎兵部隊は多く抵抗を受くることなくして、營口市街に入る。

騎兵部隊の進入に續きて、營口占領の命令を受けたるは第六師團に屬せる第四十五聯隊の第三大隊なり。大隊長堤少佐(眞人)は午後四時二十分老爺廟に達し、隊を二分し、藤田大尉の率ゆる第十一中隊をして、牛家屯停車場(所謂營口停車場)に向はしめ、少佐は坂本大尉の率ゆる第九中隊を前衞とし、直に營口の市街に向へり。

停車場に向ひし藤田隊は六時三十分を以て目的地點に達し、敵の隻影なきを見て停車場構

內に進入し先づ國旗を掲ぐ。市街に進みし本隊も、午後九時、無事營口に着し、露國兵營を占領隊本部に充て、其日章旗高く其門頭に掲げらる。

第三十九章　海城牛莊線占領

既に大石橋を占領せる第二軍は前面の敵狀に就き、敵は尙北方に退却を續行しつゝあるを偵知し、八月一日午前四時大石橋附近の陣地を發して前進す。第二縱隊は敵の抵抗を受くることなく、午前九時頃南劣山附近の陣地を占領し、第一縱隊は午後一時當面の敵を攻撃して梁家堡子附近の高地を占領せり。第三縱隊は午前五時金山嶺附近の高地を占領し、前日來敵の占領せる土臺子東方高地に向ひ砲兵を以て偵察戰を試みしに、敵は已に退却せるものゝ如し、依て直に前進し、午前九時半他山浦西北方高地附近を占領せり。此時敵の砲兵約二中隊、葫芦峪東北の高地に現れ第二縱隊及第三縱隊の歩兵に向ひ盛に砲撃す暫くして第二縱隊の砲兵は温家溝附近に砲列を敷き之に應戰す、午前十一時三十分、別に敵の砲兵一中隊、下夾河南端に現れ第三縱隊の歩兵に向ひ砲撃せしが、孰れも正午過陣地を撤し海城方向に退却せり。第四縱隊は途中少數の歩騎を驅逐して、午前十時頃第三縱隊の左翼より趙家屯に亘る線に達せり。其前面には騎砲兵約一中隊を有する敵の騎兵五六中隊、缸

瓦寨附近に在りて若干の射撃を爲せしが、正午頃海城附近に退却せり。第五縱隊は劉家堡子連三屯に在る敵の歩騎兵を擊退して該地を占領せり。敵の兵力は總計約一師團にして其主力は午前十時前後に於て虎王山西麓を經て海城方面に退却せり。我軍は斯の如く大なる敵の抵抗を受くることなく、二日八里河の線に前進し翌三日正午頃海城より牛莊に亘る線を占領せり。此日海城より東北に向ひ退却せし敵は約二師團なり。

海城は敵の一策源地にして、方千二百米突壁高三丈の城廓あり、其南端には幅二百米突の沙河あり、且つ東南より西に亘りて唐王山、嶺甲山、歡喜山の高地あり、敵は此河川の右岸及高地線に砲壘掩堡其他諸種の防禦工事を施せしを見れば、蓋し此所にて猶一戰すべき計畫なりしならん、然るに敵は大石橋を失ひ、而して栃木城亦大孤山上陸軍の爲に七月卅一日を以て占領せられ一方に於ては、我黒木軍奥軍も、栃木城攻撃軍と連繫して、八月一日遼陽を距る僅に十里程の樣子嶺及楡樹林子まで攻め來りたれば茲に海城は正側面及び背面より壓迫を受け、包圍の形勢全く成りしを以て、敵は遂に海城をも棄つるに決し大石橋敗北以來海城退却の運動を續行し、全軍遼陽を指して北上したるものゝ如く、因て海城は一氣呵成に占領せられたり。

第四十章　栃木城占領戰

第一節　位地及攻撃部署

栃木城は遼陽より岫巖に達すべき道路及鳳凰城より蓋平に至る通路の交叉點に在り、南北滿洲を一點に約する要衝に當る。東方に面する一方は開濶の平地にして到底兵を進むるの地形に非ずと雖、南西北の三面は蜿蜒たる山嶺起伏して、屈强の天險たり露軍は數ヶ月以來より此地を中心として、周圍の高地に各種の防禦工事を施し、我軍の北進を阻止せんと期す大山總司令官が七月二十八日午後を以て、第四軍司令官に發したる訓令の要旨に云ふ

予は遼陽攻撃を準備せる目的を以て、先づ逐次第二、第四軍を前方に進めんと欲す。

第五師團は、今より第四軍の、戰鬪序列に入る、貴官は栃木城附近に於ける師團を合し、時機を見て、同地を占領するを要す。

是に於て第四軍は三十日より、栃木城攻撃に着手せんとし、門司大佐の指揮する、後備混成約一師團は、右翼隊となりて、山城子、老達子堡なる敵の前進陣地を攻撃すべく、東條少將の指揮する混成一旅團は、中央隊となつて、白草窪北方高地に、又鎌田大佐の指揮する混成の一聯隊は、左翼隊となり、下八岔溝を經て、其北方高地に前進することゝし、其他の殘餘の師團は總豫備となつて、下八岔溝方面に前進するに決す。

第二節　戰鬪第一日

七月三十日我軍各隊は午前二時より運動を起し、軍の主力の右翼隊（門司大佐）は四時半頃までに文家嶺北方高地に兵力を集め、中央隊（東條少佐）も亦天明前白草窪附近に前進し、左翼隊（鎌田大佐）は下八岔溝北方高地に前進し、天明と共に右翼及中央隊の砲聲は早く既に殷々として老達子堡なる敵の東方陣地を攻撃し、敵亦砲火を開き、應射を始めしも、我右翼隊は前進を續行し、午前八時敵の前進陣地を占領せり。然るに其南方高地は敵本陣地の左翼據點なるを以て、頑强に抵抗し、日沒に至るも猶退却せず。中央隊は大なる抵抗を受けずして白草窪附近一帶の高地を占領し、左翼隊は其西方高地に駈進することを得たり。翌三十一日は敵の本陣地を攻撃する計畫なるが故に、此夜我第一線を進めて諸般の準備を整へんとし、左翼隊は先づ王家堡子西北方高地の頂界線まで、敵の抵抗を排しつゝ其第一線を進め、中央隊も亦左翼隊の右に列つて黄樹溝及范家堡子北方高地の頂界線を占領し、歩兵は天明までに前進陣地を整へ、工兵及砲兵は其嶮阻なる坂路を修理し、困難を冒して所命の地に砲列を布き、主力殘餘の部隊は王家堡子附近の谷地に集合したり。

又攻撃軍の左翼第五師團は三十一日夜三縱隊を以て、賈家堡子東南方高地附近より英落山

を經て王家堡子に亘る線を占領し、三十一日曉霧に乘じて前面高地線を占領せんとす。第二軍は特に兒玉枝隊(怨忠)を出し、師團の左翼を警戒せしむ、

第三節 戰鬪第二日

右翼門司隊は夜半より運動を起し、暗中戰鬪を交へつゝ途次之を擊退し、午前六時敵の本陣地左翼の據點たる栃木城南方高地の一帶を占領し、即ち此方面より盛に陽攻擊を試みたり。中央隊及左翼隊は午前六時頃より砲擊を以て我歩兵陣地を掩護し、歩兵は逐次坂路を擊登して漸く其胸部に達するを得たり左翼隊の左方より特に行動せる安村大佐の一隊も亦同刻より運動を起し、先づ三角山方向なる左翼隊の左側に展開す。七時に至り黄家堡子北方高地の鞍部に當り、敵の騎砲兵一中隊は俄然現出して砲擊を始む。因て總豫備隊たりし歩兵二中隊は此砲兵に對し陣地を布き、安村隊の砲兵八時半頃より砲擊を開始したれども容易に沈默せしむる能はず。此時我第五師團も亦容易に前進する能はず。設けたる二個の砲兵陣地より應戰したるを以て、第五師團は戰鬪大に進捗し、同十然るに襦に太平嶺附近より砲擊前進に移りたる我中央隊及左翼隊は戰鬪大に進捗し、同十時半頃鎌田隊の第一線は敵の山砲陣地を奪取し、東條枝隊の第一線も亦太平嶺の北方高地なる敵の右翼據點に突擊を行ひ亦十一時半頃敵の最右翼なる第一線砲壘を奪取せり。

朝來我進擊軍を苦めつゝありし黄家堡子北方高地なる敵の騎砲兵は正午頃に至り益盛に砲擊し、小房身西方高地の歩兵も之に伴ふて行動するを以て、我中央隊は更に攻擊前進に移る能はず。故に我砲兵は一意此騎砲兵の撲滅に努力しつゝありしが、午後零時半頃に至り、第五師團は三縱隊に分ち、中央隊たる濱田聯隊は午前過ぎ、敵を驅逐して西楊樹溝北方高地を占領し、右翼隊たる山口聯隊は拂曉大霧を冒して賈家堡子北方高地を占領し、更に標高三四五高地に前進し、左翼隊たる廣島聯隊は西楊樹溝西北方標高四三六高地附近を占領せり。尋で右翼隊は午前九時東楊樹溝北方高地を占領せしに、恰も我主力方面に對し敵騎砲兵の頻に猛威を逞しうしつゝあるを知り、其砲兵をして敵の背後より猛擊せしめ、午後一時頃より我主力方面の砲兵と共同砲擊し直角に之を猛射せしかば、敵騎砲兵の威力著しく衰へ、幾ばくならずして沈默せり。山口聯隊の歩兵二中隊(鈴木大尉、高瀨大尉)は乃ち直に肉薄突進して其砲六門を捕獲し(餘す所は二門)、殆ど騎砲兵の全部を鏖殺せり。此に至つて我主力方面の攻擊大に進捗し、午後五時頃より中央隊及左翼隊は共に東條少將指揮の下に敵右翼據點の一部を確實に占領せり。

午後五時半頃栃木城西方高地即ち章三峪地方の敵砲兵及小房身東北高地の敵砲兵は其數相合して約三十二門、東條隊及丸井隊の正面に向つて猛烈に亂射し、尋で六時頃より此砲擊

の援助に因り歩兵の大部隊は逆襲し來れり。是に於て我歩兵線は俄に小銃戰及銃劍格鬪を起し、一場の惡戰を開始せしが、遂に之を擊退し、更に進んで敵の右翼據點全部を占領せり。時に午後七時なり。

此の如く敵の左翼據點は此日戰鬪の初期に於て左翼門司隊に依りて占領せられ、今又其左翼據點も亦中央隊に依りて占領せられたるを以て敵は夜に乘じて退却せり。

第四節　追擊戰

主力各部隊は敵の退却を知るや一日早朝一箇大隊をして直に逃走したる陣地を占領し、同部隊の左翼枝隊は午前四時直に前進して小房身西北方高地に據れる敵を攻擊し、續て之を追擊して桃路屯に至る。

騎兵隊は三家子方向より紅窰嶺及び候家屯を經て劇しく敵を追擊したり。

左翼第五師團は三十一日以來楊樹滯の敵を追擊して三角山の西北方高地より西楊樹滯北方に亘る敵陣を占領して全局の戰鬪終りを告ぐ。此三日間の戰鬪に與りたる我軍の戰死負傷者の總數は九百五十一名なり。敵の戰場に遺棄したる屍體は七百以上を算し其全死傷者は少くとも四千以上なるべし。

鹵獲品野砲六門、砲彈五百七十、小銃六十三、彈藥九百八十、土工具百八十、麥粉八百九十石、大麥五百石、外套百三十等なり。

第四十一章　樣子嶺の激戰

第一節　近衞師團の戰鬪準備

鴨綠江の戰敗以來、其主力を塔灣、樣子嶺一帶の險要に集め、時々强襲して我軍を擊退せんと欲せしも、遂に其目的を達すること能はざりし敵兵は　七月中旬頃より漸く其兵力を增加し未だ旬日ならざるに、既に約四個師團に達し、尙續々南進の狀あり、同月二十七日以後は、敵の運動益々活潑となり、數縱隊より編制せられたる前進隊は、數個の輕氣球を上げ、互に連絡を保ち將に攻勢を取らんとする者の如し。

黑木大將は情報に接し、敵の準備未だ完からざるに乘じ我より先んじて攻勢を取り、敵將の企圖を挫かんと欲す。

時に敵の主力は楡樹林子にあり、樣子嶺附近には其の兵約一師團本溪湖及韭菜船子附近には、約六千の兵あるを偵知し八月一日拂曉を以て、此敵を攻擊せんとし、命令を各隊に下し、各其向ふ所を部署す、即ち近衞師團をして、マクウメンザ、ハンジャブーザ方向より第二師團の一部と協力して、樣子嶺及其北方高地に向つて進擊せしめ、第十二師團をして、岡

崎旅團の援助に依りて、檜樹林子の敵を攻撃せしむ、各師團は攻撃命令を受け急に七月三十日夜より運動を起し、以て豫定の展開地に向つて進發し、黒木大將は自ら幕僚參謀を率ゐ、午後七時草河口の軍司令部を撤し、連山關に出陣せり。

是に於て近衛師團長は急に命令を下し、渡邊少將を右翼隊（歩兵第三聯隊を主幹とす）長とし、先づマクウメンザの東方高地に在る、敵を擊攘したる後、其北方高地よりキユジヤプーザ東北方高地に亘る線を占領せしめ、山田大佐を中央隊（歩兵第一聯隊を主幹とす）とし、ハンジヤブーザ南方高地に亘る線を占領し、左翼隊のハンジヤブーザ西南方高地に進入すると共に、淺田少將の指揮に入らしめ、又淺田少將を左翼隊（歩兵第二聯隊を主幹とす）長とし未明までにハンジヤブーザの西南方高地線を占領して、後中央隊と合し、チユジヤブーザの西方約三千米突の高地に向はしめ、歩兵第三聯隊の一大隊及騎兵若干を總豫備とし、師團長自ら之れを率ゐて、午前二時リオヤツンに進出するに決し、各隊長は孰れも出發の準備に着手せり。

第二節　渡邊旅團戰況

樣子嶺の攻撃戰に於て、最苦戰奮鬪せしは、渡邊少將の率ゆる、近衛歩兵第二旅團第三聯隊とす、旅團は既記攻撃部署に依り出發準備を整へ、三十一日午前一時、飯田中佐の率ゆ

る、歩兵第四聯隊は新開嶺より、小原大佐の指揮する第三聯隊及其他の諸隊は、久米中隊前衛となり、リボ嶺の北方約三千米突の三叉路より樣子嶺の敵陣に向つて行動を起し、無事ウイラヤンザの東方高地に達したるは、東峰將さに朝暾を吐かんとする頃なり。是より先き午前四時三十分、第四聯隊の先頭部隊より出したる斥候は、マクウメンザ東南約二千米突の最高地點に於て、敵の監視兵を驅逐しつゝ前進せしが、中隊全部追及し共に協力猛射して、ヤモリザ東北方約一千米突の丘阜上に在りし、敵兵を擊退して之を占領せり、是に於て飯田中佐は、直に本隊を率ゐて前進し、其主力を以てマクウメンザ北方高地を占領し、別に一中隊をして南方高地を占領せしめたり、此時砲兵聯隊は萬難を冒して陣地の偵察をなし、マクウメンザ東方道路の屈折點に砲列陣地を撰定せり。

隈元大佐の指揮に屬してマクウメンデに進出せし我砲兵は武富少佐之を率ゐ、午前六時頃其一部を以てマクウメンザ東部の畑地及び高地の麓に放列を布き、一部を豫備隊として後方に停止せしめ、七時十分東部樣子嶺に在りし敵砲四門に對つて射撃を開始したり、敵亦直に應戰し勝敗輒く決せざりしが午前九時三十分頃、敵は後退せんとするの狀ありしより、我砲兵は榴散彈を發射して猛烈なる追撃射撃を加へたり。

斯の如く砲兵隊が、勇戰しつゝある間に旅團の中央隊及左翼隊は、皆豫定の陣地に就き、

敵と銃火を交へ、右翼隊の第三聯隊も亦其歩兵の一部隊をマクウメンザ北方高地に停め、主力を以て南方高地より、ヤモリンザの敵歩兵に向つて攻撃を開始す、様子嶺及ヤモリンザ北方高地に據れる敵の砲兵は、我右翼諸隊及中央隊に向つて盛に砲撃し、ヤモリンザ一帶の高地に在る敵歩兵、亦全力を注いで我を射撃す、時に午後一時を過ぐると十分頃。敵は益猛烈に我を射撃し、我各隊が川を徒渉して、ヤモリンザ一帶の高地に至るまで敵彈最も烈しく我に集り、我死傷者極めて多く、就中最も多く我歩兵を苦しめたるは、ヤモリンザ西南方の最高地に據りたる歩兵にして、我軍は主力を集めて之を攻撃せしも、敵頑強にして、容易に退却せず。

マクウメンザ東方なる我砲兵隊は、午前二時半頃、我歩兵の前進を援助する爲め、ヤモリンザに在りし敵の砲兵及歩兵を射撃し、敵砲亦之れに應じたるも、遂に沈默し、同五時半頃に至り、全く退却せり、之と同時に我左側の高地より前進する我歩兵も、敵の歩兵に對つて射撃を開始したるより、一部の砲兵は、マクウメンザの村端に進み、チュージャープーザ北方の高地に據れる敵の歩兵と約四十分奮戰して、我歩兵の掩護射撃をなし、激烈なる榴散彈を注ぎたれば、敵俄に動搖し、先を爭ふて退却せり、時に午後八時なり。

是より先、小原大佐の第三聯隊に附屬せる砲兵隊は、三十日夜藤津少佐指揮の下に、リボ

嶺を通過し、天明後スキアンザ東方の谷地なる豫定の陣地に就き、樣子嶺の南方山地の鞍部に在る敵の砲兵陣地に向つて射撃を加ふ。敵は大に驚きしも、暫時にして激烈なる射撃を開始し午前九時道路峻嶮の爲に後れたる砲車亦來り會し、此に猛烈なる砲戰を交へ、午後一時我彈藥車も漸次到着したるより、士氣益振ひ、樣子嶺南方高地鞍部及ヤモリンザの高地なる敵の砲兵陣地に向ひ、榴彈を發射し、其沈默するや、午前四時より更にスキテヤンザ西方高地に在る、敵の歩兵に對つて射撃し、多大の損害を與へたれば、敵は漸次後方に退却せり。

因て同四時三十分射撃を中止し、同四時五十分に至り、更に樣子嶺南方山上の敵の砲兵を射撃したるに、敵は暫く應戰して直に沈默したるより、同五時三十分陣地を進めて前方高地に放列を布き、スキテアンザ附近に於て敵の歩兵と酣戰中なる我歩兵の掩護射撃を爲し、日暮に至つて止む。

隈元大佐に隷する野崎砲兵大隊も亦武富大隊と共に午後九時、石河塞を發し、微宵十餘里の山河を跋涉して、三十一日未明屈家堡子に達し、其南方の高地に放列を布き、夜の明けざるに乘じ、前面の敵壘に對して砲撃を開始したり、敵は堅牢なる陣地に據り、優勢なる野砲を以て我を下瞰するに反し我は頗る不利の陣地に據り、剩へ、其數の多からざる山砲

を以て、對するが故に頗る苦戰せしが遂に午前八時を以て、樣子嶺の鞍部に於ける敵の一砲壘を沈默せしめたり、然れども敵は尙我砲兵の微弱なるを看取し、此方面よりする步兵の前進を沮止するに全力を用ひ、爲に我正面攻擊は、容易に進捗する能はず、既にして午前四時に及び、左翼隊の步兵は媽滯門子方面より、樣子嶺の本據に向ひたるを以て、我砲兵隊は全力を擧げて之を掩護せしが地勢我に利あらず、敵の射擊猛烈にして、步兵の進行愈困難に陷り、既にして日沒に至りたれば、各隊は戰鬪隊形を以て、一夜を徹したり。

小原大佐は、第二大隊を第一線とし、進行せしも、何等敵の抵抗を受くるとなくして、スウイテャンザ東方道路の南北高地を占領せり。乃ち更にスウイテャンザの西北方高地を占領せんと欲し、各隊皆進む。

午前八時十五分、松前大隊奮戰して、其一隊をスイテャンザの東方に散開して正面の敵を攻擊せしむ。

此時戰鬪漸く猛烈となり、久米中隊は躍進して前方の河を渡涉し、スイテャンザの敵と戰ひしが、敵は險に據り、衆を恃み、高きに在りて瞰射し我兵進むと能はず、是に於て久米中隊の左翼に散開を命ぜられたる高田大尉は直に其二個小隊を散開し、彈雨を潛りて河を渡り、其左翼に增加して射擊を開始せしが、敵は猛射して却て逆襲せんとす。

乃ち更に他の小隊と其左翼に增加して奮鬪勇戰せり、此時敵はスイテャンザの北方及西南の諸高地より、又激烈なる射擊を爲し、爲に又高田大尉等十數名の死傷を生じたり、然れども我兵屈せず、奮鬪苦戰時を移し、午前十一時遂に敵兵を擊退して其陣地を占領せり。

此時左翼隊はスイテャンザ及其北方高地より敵の激烈なる射擊を受け、頗る苦戰せしが、松前大隊の奮進して、其南方高地及村落の敵兵を擊退するに及び、左翼隊も遂にスイテャンザの村落を占領せりと雖も、其西北の高地に在る敵兵は、尙は頑强に抵抗せるを以て、平尾中隊の北條小隊、高田中隊の山本小隊は、協力して之を攻擊せしも、敵は益々猛烈に射擊し平尾大尉、山本中尉亦負傷せり、是に於て各幹部は孰れも必死を期し、劍を拔き、躬ら士卒に先ち奮進して、遂に西北方の鞍部を占領せしも、敵は又更に其東北方に連る高地及其附近より猛烈に射擊したるを以て、我兵又た頗る苦境に陷りしが松前少佐は、布山少尉をして、北條、山本兩小隊掩護射擊の下に敵陣に突貫せしめ、之を占領せり、時に午前十一時三十分。

此時松前少佐は聯隊長よりスイテャンザ東北方の高地を占領して、此所に停止す可きの命を受けたれども、敵は樹木繁茂せる森林の側斜面に在りて、頻りに射擊せるを以て、直に山本小隊を布山小隊の線に增加し之を攻擊せしに、敵兵は益此方面に增加し、屢々逆襲し

て其失へる高地を回復せんと欲す、少佐は乃ち久米中隊をして赴援せしむ久米中隊は直に猛進して、之と射撃を交へたれども、敵は鬱葱たる森林に隠れ狙撃せるを以て、我は寧ろ突貫して、勝敗を一時に決せんとす。

是に於て午後零時半、白澤中尉をして其小隊を率ゐて、久米中隊に赴援せしめ、共に協力して敵を攻撃せしも、敵は高地を回復せんと欲するの念益熾にして我兵容易に敵陣に突貫すること能はず。

午後一時、第一旅團に屬する山砲中隊は、チユジヤプーザの東北方に其陣地を轉進して我前面の敵を猛射したれば、敵は多大の損害を受け、我兵の士氣大に振ふ。

時にマクウメンザ方向に在る右翼隊は、飯島少佐の指揮する二中隊をマクウメンザ北方高地に殘して第二師團と連絡し、兼て砲兵の掩護に任じ、而して右翼隊は全力を擧げて攻撃を實行するに決し、午後二時マクウメンザの我砲兵は再び射撃を開始し、其一部をして猛烈に敵の掩堡線を砲撃せしかば、敵の砲兵は急に應戰せしも、猛烈なる我砲撃に、其砲門を破砕せられ、暫時にして沈默せしを以て、直に其一部に前進を命じたれども、進路危險にして容易に進出すること能はず、再び舊位置に復するの已む可からざるに至りしが、午後四時三十分、第二師團の砲兵は、塔灣南方高地に在る、敵砲二門を猛射して之を破壊せり、此

時第二師團の方面に當り盛なる銃聲を聞き、五時十分頃、其歩兵は既に塔灣及其北方高地に向つて、前進を開始せり。

是より先き、梅澤大佐の指揮する歩兵第四聯隊は、マクウメンザの南方高地に在る敵を撃退して之を占領し、更に攻撃前進の命令下るを待ちしが、午後四時半頃旅團長の命令に接し、直に前方の高地線に展開して攻撃の機を待つ。

既にして戰況熟せり大佐乃ち第一大隊を第一線とし、前進を命じ潮流の一時に湧き來るが如き勢を以て山を下り敵陣に突進せり、掩堡内に隱匿せし敵は之を見て一時に猛烈なる急射撃をなし、又樣子嶺の東南方高地の砲兵も、我前進隊に向つて砲火を集中し我兵の死傷する者甚だ多し、然れども勇猛なる我第一線の歩兵は、勇を鼓し河流を渡渉し、前岸の高地脚に集り直に其隊伍を整頓し、遙に塔灣西南方の高地を望めば、日章旗の翩々として高く其峯頭に飜るを見たり、此時兩軍各所の戰況は、我軍既に六分の勝利に歸したりと雖も、大砲の聲々小銃の撥々は山又山、谷又谷に響き依然として感なり。

午後六時第一線部隊は、更にスウイテャンザに在る小原聯隊の掩護射撃により躍進して黄嶺子の高地を奪ひ、敵を其西方高地に撃退せしが、此時第二師團兵は既に塔灣西方の諸高地を奪ひたれども、敵は堅牢なる數多の掩堡により、頑強に抵抗し、且つ漸次兵力を增加

したれば、我軍亦敵の逆襲せんことを慮り砲銃火を增して之を攻撃し兩軍虎擲龍拏の活劇は益々激烈となれり、

午後八時頃我砲兵の一部は、マクウメンザの西端に前進し、黄嶺子高地の掩堡内に在る、敵兵に向つて急射撃を注ぎしに敵は著しく動搖の色を現せり、是より先、吉田大尉（皆彦）の率ゆる第二中隊は、マクウメンザ西方高地に在る敵を撃退し、更に其南方高地の敵兵を驅逐して之を占領せり、時に午後八時十分なり。

我軍は晝間焼くが如き百十度以上の炎熱を冒し、險を越え、危を蹈み、猛進奮闘して、遂に塔灣、ヤモリンザ、黄嶺子、チユジヤプーザ、スウイテャンザ一帶の狹隘を越え、其の西方附近の高地を占領せりと雖も、敵は豫じめ第二の防禦線として設けたる幾多の掩堡に據り、頑強に抵抗したるを以て、我砲兵も益々前進して歩兵と力を協せ、猛烈なる砲銃彈を注ぎたれば、敵は大に動搖して退却せんとするの狀ありしも、時に日既に西山に沒して夜色黯澹、彼我を識別すること能はざるに至りたるを以て戰闘を中止し、各警戒を嚴にして戰闘隊形の儘露營し、將士疲勞を忘れて明旦の再攻撃を待ちしが、敵兵は朝來我軍の大打撃を受け、力盡き勢屈し、各方面の敵は夜暗に乘じて様子嶺以南に退却し其一部のみスウイテャンザ東方高地及様子嶺南方の西鞍部附近に在るもの丶如く。長谷川師團長は明拂曉

前面の敵を掃蕩するの目的を以て、午前一時淺田少將の率ゆる第一旅團をして、スウイテャンザ西方、約二千米突の高地より其西北方に亘る高地を占領せしめ、渡邊少將の率ゆる第二旅團をして更に砲兵二中隊を增加し、之を率ゐて明朝其主力をチユジヤプーザ東方畑地に配置し、前面の敵を驅逐せしむ、是に於て渡邊少將は拂曉新に加へられたる野砲四門と共に、昨日の隊形を以て前進を起し、ヤモリンザの西方谷地に到着せしも、敵は夜暗を利用して西方に退却せしを以て、旅團の先頭部隊は少しも敵の抵抗を受けず、午前七時南部様子嶺及其西方高地脈を占領せり。

此の兩日間近衛師團の方面に對せし敵は、約一個師團にして、狙撃歩兵第二十一、第二十二及第五、第六聯隊と、砲兵三中隊なり。

第三節　淺田旅團戰況

七月三十日午前十時師團長より命令あり。曰く明日未明までに其主力を以て、ハンジヤプーザ西南方高地線を占領したる後、山田大佐の指揮する中央縱隊を合し、チヤジヤプーザ西方約三千米突の高地に向ひ、攻撃すべしと淺田少將は、乃ち歩兵第二聯隊、騎兵第二中隊を同日午後四時までにマジヤプーザの谷地に集合し、各部隊に皆所要の命令を與へ、北方千五百米突の谷地に進出し、深谷大佐に歩兵第二聯隊本部及び第二、第三大隊を附して、

深谷縱隊となし、チユジヤプーザ西方約四千米突、即ち敵陣の最右翼端に向ひ前進せしめ、石澤少佐(盛松)の率ゆる、歩兵第二聯隊第一大隊(第四中隊缺く)、騎兵中隊、砲兵中隊、工兵小隊を旅團の中央縱隊とし、深谷縱隊に續いて前進し、山田縱隊と共にハンジヤプーザの敵を驅逐し、チユジヤプーザの西方三千米突に在る敵の陣地を攻撃せしむ、斯の如く部署定まりければ、深谷縱隊は、是れより先き派遣した前進を起し午前三時十分辛うじてハンジヤプーザ西方高地に達するを得たり。

石澤少佐の指揮する第二聯隊第一大隊は、旅團の中央縱隊として、午前零時四十五分、アンペの南方約二千米突の斷崖地點を出發し、午前三時二十分、漸くハンジヤプーザの西南方高地の南麓に達したり、次で、又師團長の命に因り山田大佐は、歩兵第一聯隊(特科兵を加ふ)を率ゐ、師團の中央縱隊となり、三十一日午前一時三十分、有吉少佐(雅一)の率ゆる第一大隊及工兵隊を前衛とし、パパン嶺の鞍部を出發し本隊は之れに續行し、ハンツンダウに到着せり。

午前三時三十分、前兵はハンジヤプーザを占領し、又第一中隊をして其東南高地を占領せしむ。前衛本隊は、午前四時ハンジヤプーザ東南に開進し敵は既に遁逃したるを知り一部の兵をして之を占領せしめ、同時に田中砲兵大尉(反巳)は、工兵中隊と共に、其西方高地

に陣地を構成せり。

同四時十五分、左右兩翼との連繫尙ほ完からざるも、幸ひにハンジヤプーザ西方高地の敵兵、未だ我兵の前進を知らざるが如し大佐は此機に乘じ、急に有吉大隊及杉村大隊をして、ハンジヤプーザの村落内を經て、其北方高地に急行進出せしめ、吉原大隊をして、ハンジヤプーザに在りて、此運動を掩護せしめたり、敵は我此運動を發見し、俄然ハンジヤプーザの西方高地及スウイテヤンザの南方高地より射撃せり、時に午前五時二十分、我兵は敢て射撃することなくして天明を待ち、又後續部隊は、敵彈を冒して猛進し、各所命の地點を占領せり。

暫くして東天漸く曙光を呈せり斥候の報告により、約二中隊の敵兵ハンジヤプーザの西方高地に在るを知り大佐は直に大枝大尉(健介)の率ゆる第二中隊をして、此敵に向ひ射撃を開始せしめしに、敵は猛烈に應射し、意外に多數の死傷者を生ずるに至れり、殊に午前五時四十分、敵はスウイテヤンザの南方高地に現はれ、猛烈に射撃しければ、有吉大隊は敵の十字火を受けて、頗る苦戰の狀態に陷りたり、山田大佐は地形の甚だ我に不利なるを見るや、第二大隊長杉村少佐(勇次郎)に命じ、三好大尉(竹三)の第五中隊及大庭大尉(久吉)の第六中隊をして、別路を取りて敵の側面より之を攻撃せしむ、雨大尉は命を受け、

斉然各自から其の隊の先頭に立ちて勇進し、其既に高地線に登るや、ハンジャブーザ及スウイテャンザの散兵壕に據れる敵兵は、我軍に向ひ猛烈なる急射撃を注ぎたるを以て、我兵士の死傷する者頗る多く、三好大尉亦戰死せり、三好大尉戰死したる後、岩崎少尉代つて中隊を指揮せしが、亦敵彈に斃れ、星野少尉(達)更に代りて中隊を指揮し、各兵之が爲に却て勇氣を勵まして奮戰せり、

此時我山砲中隊はハンジャブーザ北方高地の敵に對し砲撃を開始し、有吉大隊も亦我散兵線の東方斜面に連りて開進せり、續いて敵の砲兵は、間接射撃を始めて、專ら我散兵線附近に着彈せしめ、其勢頗る猛烈なりしが、同七時我左翼隊の先頭ハンジャブーザ西南方高地に現はれたるを以て、山田大佐は、此機に乘じ、其全線をスウイテャンザの西方高地に前進し、又山砲中隊を同地附近に轉進せしめ、猛烈なる銃砲火を送る。敵兵爲に動搖を始めたり、乃ち更に攻撃目標たるチユジャブーザの西方、約二千米突の高地に達し淺田少將の前進するに遭ひ、聯隊は其指揮下に屬せり。又最前よりスウイテャンザの西南方高地に在りて、敵と苦戰せし、杉村大隊は漸く敵を驅逐して、其西北の高地に達せしが、チユジャブーザの西方高地に在る敵は尙掩壕内に在りて、砲兵と力を協せて頑强に抵抗し、午後一時を過ぐるも退却の色なく、我は苦戰中杉村少佐を喪へり、大枝大尉は杉村少佐に代り、

敵の右側背に出でんと欲して、更に前進し、午後二時敵の防禦せる圍鐘形の正面約一千米突の高地に達したり。

是より先、荊棘を開き榛莽を排し、遠く迂回して敵の最右翼に出でたる深谷縱隊は、午前六時五十分堡壘山(敵の最右翼に在る鎖鑰地にして我軍呼んで堡壘山と云ふ)西南方高地及其の西南斜面に開進して、全く敵の右側背に進出せしが暫くして石澤大隊及山田聯隊の漸次近接し來るに及び、深谷大佐は、先づ第三大隊長川崎少佐(寅三)をして、二中隊を率ゐて、其の前方約四百米突の高地を占領せしむ。川崎少佐は敵の猛火を冒して急進せしが、急峻なる斷崖絶壁其前後に塞りて、到底攀登す可からず。遂に一時堡壘山の攻撃を中止せり。是に於て左翼隊長淺田少將は、第二聯隊の占領せる高地に到り、自ら其地形及敵情を視察せしに、堡壘山の防禦工事は堅牢なるのみならず、我軍に面する山腹は、傾斜甚だ險峻にして、容易に攀登すべからず、且我右翼隊一般の戰況も尙進捗せず、僅に其一部スウイテャンザ西方高地を占領せしに過ぎざれば、左翼隊のみ孤立して攻撃するの不可なるを思ひ、各隊をして現位置を守備せしめ、友軍の攻撃進捗を待つに決し、只脅威射撃をなさしめしが、午後九時に至り師團長より、第二師團及右翼隊の攻撃は意外に進捗したるの報あり、尋で又明日拂曉を以て總攻撃を行ふの通知あり。少將乃ち各隊に命令して、遺漏な

く準備せしむ。

山砲中隊は、第一聯隊所在地に放列陣地を布き、時期の來るを待ちしが、一日午前五時三十分東天稍曙光を呈しければ、轟然數發堡壘山の敵陣地に向つて發砲せり。然れども敵は更に應戰せず、壕內寂として人なき者の如し、依て砲擊を中止し、斥候をして偵察せしめしに敵は夜暗に乘じて悉く遁逃せしかば、第九中隊をして堡壘山を占領せしめ、其他の部隊は前進して敵の退路に迫り、午前十時一部の我兵は、ニユッヒウイ東南二千米突の高地に達し、退却せる敵の側面より、猛烈なる追擊射擊をなしたれば、敵は周章狼狽して、遠く西北方に退却せり、此戰鬪に於て、我左翼方面に對抗せる敵兵は、狙擊步兵第二十一、同第二十二聯隊なりしが如し。

第四節　第二師團戰況

露軍の據りて以て我軍を防禦せし樣子嶺附近の陣地は、假令些少の工事を加へざるも、殆ど堅壘鐵壁と稱す可き要害なり。

敵が先に分水嶺、連山關、摩天嶺の險を乘て、惜まざりし所以の者は、蓋し之あるが爲なり、殊に我第二師團に對する方面は峰巒縱橫截たる懸崖にして、砲臺を築き、速射砲を据え掩壕を掘り散兵を配置し、而はマクウメンザより、北は三道嶺に至る。日本軍の勇武を以

てするに非ずんば容易に此要害陣地を攻落すべからず、七月三十日午前一時、黑木大將より、軍は明日拂曉を期し、樣子嶺の敵を攻擊する爲め、近衞師團をしてハンジヤプーザ、マクウメンザ方向より、敵の右側に向ひ前進せしめ、松永旅團をして甜水站及塔灣東方高地を占領し、近衞師團の攻擊を援助せしむる計畫なりとの通報あり師團長は直に前進準備に着手せり。

此時敵の主力は大安平附近及第十二師團方面にありたるが如くなるを以て、第二師團の內、步兵第三十聯隊及同第十六聯隊の一部は、第十五旅團長岡崎少將之を率ゐて、楡樹林子に在る敵の右翼に向つて前進せしを以て、西師團長は松永少將の指揮する第三旅團をして、近衞師團に協力せしむ。

松永少將は、步兵第二十九聯隊（第三大隊缺く）をして、西部金家堡子の南方高地を占領せしめ、第四聯隊（第一大隊缺く）をして虎溝の西方高地一帶を占領せしめ、內一中隊を虎溝の南方高地に派遣し、林少佐の指揮する第二十九聯隊第三大隊を、旅團の豫備として、中部金家堡子の北方谷地に位置せしめ、谷山大佐の率ゐる第十六聯隊（一大隊缺く）は南溝の南方高地を占領せり、時に三十一日午前三時なり。又五峰覩より、金家堡子の南方に至り、陣地を選び放列を布く可く命ぜられたる砲兵二中隊は午前八時漸く所命の任務を終り

しが、是より先、六時三十分頃、我左翼近衛師團の方面に當り、砲聲は漸々として遠雷の如く、銃聲は撥々として豆を煎るが如し。金家堡子に放列を布きたる我砲兵は乃ち其方面に向つて先づ榴霰彈を酬ひたり。

午前八時に至るも、我第二師團の前面、塔灣の北方高地に於ける陣地は、寂然として聲なく、又左翼近衛師團及右翼第十六聯隊の情況を知ることを得ず、而して塔灣北方の高地は、到底正面より迫り得るの地形にあらず、又甜水站西北方の地形は、頗る敞開し、塔灣の西北方高地より西方に亘る、高地脈の爲に瞰制せられ、且其高地上には、敵の防禦工事極めて嚴重なるを以て、師團の前進攻撃は、容易ならず、是に於て師團長は、午前八時二十分金家堡子に在る我砲兵に命じ、塔灣に兀立せる高塔の西北方高地に在る敵の防禦陣地に向ひ、猛烈に探射せしめしが應戰する者なし。又近衛師團の銃聲は、一斷一續、戰鬪は依然として進捗せざる者の如し、

午前九時三十分頃となり、一天拭ふが如く、微雲動かず、暑氣漸く加はりて、炎熱殆んど堪ゆべからず。既にして敵は樣子嶺の北方高地より砲撃を始めたるを以て、我砲兵は極力猛射敵をして應戰するもの遑なからしめしと雖も、敵の防禦陣地は堅牢にして、容易に之を拔くこと能はず、友軍戰鬪の情況は尙依然として不明なるを以て、我師團の歩兵は全く

銃火を交へず、斯の如くにして午前十時半より午後三時に至るまでは、兩軍の間只砲聲の斷續するを聞くのみ。是に於て西大將は斷然攻勢を取り、速に敵を擊退して、此戰局を收むるに若かずと爲し、第三旅團長松永少將をして攻撃前進せしむ。

是より先、松永少將は、其旅團を率ゐて拂曉より前進攻撃の時機を竢ちたるも、各方面の戰況進捗せずして、敵の防禦又堅牢なる爲め、空しく腰刀を撫し、煩悶に堪えざりしが師團長より攻撃前進の命を受くるや、直に第四聯隊(吉田中佐)をして、甜水站を迂回して敵の左翼背に出でしめ、第二十九聯隊(島田中佐)をして前方の高地に展開して、攻撃隊の前進を援護せしめ、而して此時我砲兵聯隊も、悉皆所命の陣地に進出したれば、再び急射撃を敵陣地に送れり。

午後四時四十分、吉田中佐は其聯隊を率ゐて疾風の如く高山を下り、河を徒渉して、敵の左側に出でしが、島田聯隊の喜入、向井兩大隊は砲兵と力を協せて、猛烈なる掩護射撃をなしたるを以て、敵は防禦射撃をなすの遑なかりしが、我兵は大なる損害を受けずして敵の左側背を迂回し、甜水站西方の高地を占領して射撃を始めたれども、敵は尙マクウメンザの東南方に在りて防禦せり、時に午後五時なり、此時我二十九聯隊の二大隊は、漸次塔灣に向ひ、攻撃前進し、午後四時頃其西北方高地を占領し、直に敵を追撃せしが、敵は再

び防戰するの勇氣なく、野砲一門、砲彈五十餘發を遺棄し、西方に向つて敗走せり、午後七時頃に至り、銃聲漸く衰へ、八時過ぎ戰鬪全く止む。

八月一日、松本少將は、拂曉運動を起して、豫定の地點に到りたるも、敵は前日來各方面に於て、我軍の爲めに大打擊を被り、夜暗に乘じて退却したれば、我兵は恰も無人の境を行くが如く、午前七時樣子嶺を占領し、一部をして其西方谷地に在る敵を追擊せしめ、他は悉く樣子嶺の鞍部附近に停止せり。

午前九時に至り、近衞師團の一部隊も亦樣子嶺に進出して其附近を占領せり、是に於て西師團長は、松永少將をして樣子嶺附近の守備を、近衞師團に讓り甜水站に撤退せしむ。

第四十二章　楡樹林子の激戰

第一節　第十二師團の戰鬪

橋頭の激戰に優勢の敵を擊退したる第十二師團は、爾來十餘日間、紅庙子附近に宿營して、活動の時期を待ちしが、七月下旬より前面の敵は兵力亦次第に增加し我軍に向ひ、攻勢を取らんとする企圖あるが如し、是に於て木越少將は、平井大佐の指揮する第四十六聯隊を前哨として、防禦工事を施さしめ、原田大佐の第二十四聯隊は、其後方右翼に、今村大佐の

第十四聯隊は其左翼に在りて、敵と相對せり。蓋し此方面一たび守を失はゝ、遼陽は其左胸部を脅威せられ、如何に海城方面に力を致して旅順と連絡を通ぜんと欲するも、能はざれば也、故にクロパトキン將軍は、七月十八九日以來、自ら出馬して此方面の軍隊を指揮し、以て我第一軍の北進を防遏するに止まらず、漸次に攻勢に轉ずるの兆候を現はし來れり。

黑木大將は敵狀を察し、其攻勢準備、未だ全からざるに乘じて、之を擊破するに若かずとなし、七月三十日午後四時命令を發し、翌三十一日拂曉を期し、近衞及第二師團（步兵四大隊缺く）をして樣子嶺の敵に當り、第十二師團（後備混成旅團を含む）をして楡樹林子附近の敵を攻擊せしめ、而して岡崎旅團（二大隊缺く）をして、楡樹林子に在る敵の右翼に向つて前進し、第十二師團の攻勢を援護せしむる。

紅庙子に在りし井上師團長は敵兵攻擊の命を受け、直に各隊を部署し、老母嶺、千金嶺及福金嶺に各守備隊を置き、右翼隊（步兵第二十三旅團を主幹とす）は木越少將之れを指揮して翌日午前五時までに先づ枕山より犁荷房子附近の高地に亘る線を占領し、楡樹林子附近に在る敵の陣地を攻擊せしめ、左翼隊（步兵第十二旅團を主幹とす）は佐々木少佐之を指揮して翌日午前三時三十分、大臺溝附近を發し、右翼大隊の動作と、岡崎少將に連繫して敵

の右翼を攻撃せしめ、又近衛後備歩兵旅團（四小隊と二分隊缺く）又騎工兵若干を本隊として、師團長自ら之を率ゐ。

第二節　木越旅團戰況

木越少將は三十日午後十時師團命令を受け、直に各隊の向ふ所を部署し平井大佐の率ゐる歩兵第四十六聯隊（第二中隊缺く）をして、午前五時までに枕山の敵を攻撃せしめ、原田大佐の率ゐる歩兵第二十四聯隊（第一大隊缺く）をして、午前五時までに、旭山の西方高地を占領せしめ、其他各隊の部署悉く定まり各隊午前三時を以て進發し、平井大佐は午前三時を以て橋頭の宿營地を出發せり。

午前四時四十五分、右翼第一線に展開を命ぜられたる第一大隊長羽生少佐は、重久大尉の第一中隊を右翼とし、眞崎大尉の第四中隊を左翼とし、攻撃隊形を取りて前進し、第四中隊の枕山北方高地の中腹に達し、第一中隊の其南麓に到るや、俄然數十發の敵彈を受く。而も此地附近は、高粱又は密林の爲めに敵の所在を知ること能はざるを以て、各兵は銃に着劍し、枕山北方の最高峰に向つて攀登し、山上に在る敵の幕營陣地に突入し、忽ち激烈なる格鬪戰起りしが、敵は遂に支へ兼ねて稜線以西に退却せり、時に午前五時十六分なり然るに此時敵約二大隊は、尚ほ枕山西方高地に幕營せるを以て、第四中隊は、更に此敵に

向つて猛烈なる射撃を加へ、第二中隊（大山大尉）及第一中隊も亦左右兩翼高地より急射撃を注ぎしかば、敵は周章狼狽して四方に潰亂し、其大部隊は、楡樹林子に向つて遁逃せしも、他の一部隊は、尚幕營の西北方高地に停まりて我兵を射撃し枕山の北側稜線に停止せる敵の歩兵約二中隊も亦射撃して我兵の前進を防禦せり。

此時山麓に在りて、右翼隊の戰況を觀望せし木越少將は、敵兵の退却するを見て、直に原田聯隊の淵野中隊をして、其東北方高地を占領して、退却せる敵を射撃せしめ、其他の中隊も相續いて、各所の山上に攀登し、今や相蹂躙して潰走中なる敵を瞰下し、猛烈に射撃しければ、敵兵の斃るゝ者算なく、山谷は忽ち死骸を以て塡塞せらる。

是より先、枕山の正面に向つて、前進攻撃を命ぜられたる橘少佐の第四十六聯隊第二大隊は午前四時載家堡子に大隊を集合し、身長を沒する高粱の畑中を行進して枕山に向ひ、五時半頃其山麓何家堡子に到着し、先づ其の二中隊を散開して前進するや、枕山の北方高地及頂上より猛烈なる敵の十字火を受け、忽ち多數の死傷者を出したるを以て、一時地物を利用して、前進を停止し、羽生大隊の其北方高地より、敵の左側に進出するを待つ。

枕山の檬子嶺に於けるや、戰術上極めて重要の地點なるを以て其守備亦甚だ嚴なり。之を占領すること固より容易ならず。

是に於て午前四時十分木越少將は我兵の枕山占領困難なるを察し、敵を砲撃する爲め砲兵聯隊長をして砲兵陣地を撰定せしめ、又午前五時十分、旅團の豫備隊たる大島大隊の第一中隊を、何家堡子の東北高地に派遣して、平井聯隊の右翼に增加し、枕山攻撃の準備をなし其左翼に進出したる橋大隊も亦枕山の鞍部を固守せる、敵を攻撃せんと欲して、我兵の前進を鼓舞せり、而も敵は死力を致して防禦せるを以て、容易に其目的を達すること能はず、橋少佐は戰況の進捗せざるを見て更に猛烈なる射撃を開始せしめしが、恰も好し羽生大隊前面の敵は、我兵の猛烈なる畝射に堪へず漸次潰亂して細河を渡り、退却を始めたり、是に於て橋大隊は其正面より、羽生大隊は其右側より、猛進して敵を追撃せんと欲したるも張家堡子に在りたる敵の歩兵は、高家嶺に在りたる砲兵と力を協せて、我軍を猛射せしを以て、我兵亦容易に進むこと能はず、再び兩軍の激戰となり、碧血混々、死屍累々たり。午前七時二十三分、藤室砲兵聯隊長は敵兵頑強にして容易に退却の狀なきを見て、何家堡子西端に在る、第三中隊をして枕山の敵を砲撃せしむ。

敵左翼の砲兵忽ち砲火を開いて之に應戰し、其勢頗る猛烈なれば、枕山の敵兵は之に力を得て、益々頑強に抵抗し、毫も退却するの色なし藤室聯隊長は、更に其第二中隊をして、第三中隊の左翼に放列を布かしめ、山砲十二門一齊に榴霰彈を敵陣地に注げり。

午前八時二十分、我軍の進撃喇叭敵の左側背に吹奏せられ、同時に吶喊の聲は、山岳を震動して起れり、是れ羽生大隊の敵陣に突撃せるなり、左翼に在りし橋大隊、此聲を聞くや橋少佐は自ら劍を抜いて、先頭に立ち、『前へ』の號令を下せり各將校兵士先を爭ふて奮進突貫、遂に枕山を占領し、旭章旗は翩々として、其最高峰に飜れり、時に八月一日午前八時五十分なり。

羽生、橋の兩大隊は、枕山を奪ひ取りしも、敵は尙ほ何家溝の西方高地及高家嶺の砲兵陣地より、枕山を占領したる我軍に向ひ、猛烈に砲撃したるを以て橋大隊は、其頭上より霰の如く、砲彈を注がれ、頗る危險の狀態に陷りたれば、敵の設けたる塹壕に伏臥して砲彈を避けたり、羽生、大島大隊の一部も其左側より猛烈なる敵の銃丸砲彈を受け、一時高地の反側に避けたれば、枕山の橋大隊は敵彈の燒點となり、防戰甚だ艱む。

午前十時二十五分、敵の砲火毫も衰へず、且其增兵約二個中隊、我右翼に迂回せんとせり。是に於て何家堡子に敵彈を避けたりし我砲兵第三中隊は、猛進して枕山の鞍部に蔭蔽して砲列を布き、敵の歩兵線を距ること千百米突の位置に在りて、猛烈なる迅速射撃をなし、敵に非常の損害を與へしが、巧に高家嶺の右方に蔭蔽せる敵の砲兵は、忽然我第三中隊を猛射し、歩兵も亦我砲兵に集中射撃をなしたれば、我砲兵は一時射撃を中止し、後方に下り

て時機を待ちたり、此時我砲兵第二大隊は何家堡子南方畑地より敵の左翼砲兵を射撃したれば、大損害を受けて沈默せり。

是より先、午前九時三十分、左翼佐々木旅團は、激戰數時にして、西偏嶺を占領し、岡崎旅團は、同十時佐々木旅團の左翼に連絡し、敵の右翼を包圍攻撃し木越旅團の進入を容易ならしめんとせり。而も午後零時三十分に至るも、楡樹林子方面の敵は更に動搖せざるのみならず、益其兵を增加し枕山の正面に在る敵の一部は我右翼に迫り、一部は張家堡子の北方高地に停止して、猛烈に我兵を射撃し、又楡樹林子南方より增加せる敵の約二大隊は細河を渡渉して我軍に向ひ前進せり。

是れ敵は逆襲して其失ひたる枕山を恢復せんと欲するなり、午後一時より敵の增援隊は絡繹として前進し、漸次に加はり來るを以て、我砲兵は之に向つて間斷なく射撃せりと雖も、敵の銃砲火は益激烈となり高家嶺の森林中に在る數の砲兵は歩兵と力を協せて、枕山を占領せる我橘大隊に十字火を注ぎ、其勢非常に猛烈を極めしかば、我兵の死傷者甚だ多く、橘少佐は豫備隊たる第二十四聯隊第四中隊を戰線に增加したりと雖も、午後二時半頃までは頗る苦戰の狀態に在り然るに我砲兵は其陣地を花紅溝西北の高地に放列を布き、猛烈なる繼續射撃を加へたるを以て、敵の砲兵は遂に沈默するに至れり、而して又此時山岡少佐の

率ゆる後備近衛歩兵第一聯隊第一大隊は、師團長の命により增援隊として來り、木越少將の令下に屬したり。

羽生、橘兩大隊の苦戰に陷り、我砲兵亦一時其陣地を撤退せざる可からざるの運命に遭ふや、敵の歩兵約二個中隊、枕山の西南側より、橘大隊の左翼に向つて猛烈に逆襲し來れり。橘少佐は自ら最前線に出でゝ散兵を指揮し、銃を構へて敵の接近し來るを待たしむ、敵は驀地に猛進して、既に防禦線より、二百米突計の地點に來れり、我兵乃ち猛烈なる一齊射撃を加へしに逆襲兵は狼狽して退却せり。我兵は一たび逆襲せる敵を撃退せしも、約三十分の後再び橘大隊の右翼に向ひ、猛進來襲せしが、又直に一撃の下に撃攘せらる。

然るに前面の陣地より、此狀況を觀望したる敵の砲兵は、逆襲隊の退却して砲彈危險界を脫するや、猛烈なる連續射撃をなし、砲彈を宛然萬雷の如く、枕山の陣地に落下して、岩を碎き、樹を倒し、木片、石片、鐵片霏々として飛び來り、我兵爲に多數の死傷者を生じ暫く掩堡に伏臥して其猛勢を避けたり。

午後三時、敵の砲聲漸く衰へたりと雖も、益其兵力を各方面に增加して、一決戰を試みんと欲する者の如し。師團長より增援せる山岡少佐の一大隊は兩軍酣戰中に戰線に參加し、山岡少佐は泰然猛火の間に立ちて、戰線を指揮し敵彈の爲めに右腕を貫かれたるに屈せず

左手に劍を揮つて大隊を指揮せしが、敵は意外に優勢にして、勝敗未だ決せず、且此時本溪湖方面の敵兵も、益增加して前進し來るの急報頻々なるを以て、我軍は其左翼に警戒するの必要あり暫く其位置を固守せざる可からざる狀況となれり。

正面の敵兵斯の如く頑強を極め、更に左翼本溪湖の方面よりも、敵兵續々前進して、形勢容易ならざるを以て、井上師團長は、三上中佐をして近衞後備歩兵第一聯隊の幾部を率ゐ木越少將の令下に入らしめたり、然るに午後四時、一時沈默の態度を裝ひし敵の砲兵は、何家堡子西端に在る我砲兵に向ひ、最良射擊距離を以て猛烈なる射擊をなし、歩兵も亦全線急射擊をなして、將に攻擊し來らんとするの氣勢を示せり。

午後四時二十分、福崎少佐の率ゐる近衞後備歩兵第二聯隊の二中隊も、援兵として來着せり。

此時に當りて各方面に於ける彼我の狀況は互に其兵力を戰線に增加して、相譲らざらんと欲する者の如く、兩軍相持して日沒に至れり。日既に暮る。敵は晝間の敗勢を挽回せんと欲し夜間に至るも其運動を停止せず、依て我軍は斥候を出して、敵情を偵察せしめ敵の夜襲に備ふる所あり、此夜零時十五分、敵兵約一中隊枕山の西南方より、ウラー〳〵の喊聲を上げ、軍樂を奏し、橘大隊の左翼に襲擊し來れり、我兵夙に準備して待つ敵接近するや、

直に之を擊退せり。

始め佐々木旅團は西偏嶺方向より楡樹林子に向つて、敵の右側背に前進せんとせるを以て此と連絡を取り、以て右翼平井聯隊の戰機熟するを窺ひ、楡樹林子附近正面の敵を擊退す可き命を受けたる原田聯隊は三十日午前二時三十分、細河沿の舍營地を發し、橋頭の戰鬪以來我兵が勞苦經營したる旭山の陣地を超え細河の左岸に沿ひ、西方に前進すること約四千米突の山上に出て、前面に屹立せる天字山の敵と相對陣せり。

午前五時三十分、我左翼に於ては佐々木旅團の敵と交戰し右翼の平井聯隊も既に敵と戰鬪を開始せしが、原田聯隊前甲の面の敵は、楡樹林子東南方高地の頂界線を占領し、堅牢に構築せる塹壕内に散兵を配布して、防禦準備をなせるが如くなるを以て、原田聯隊も亦敢て輕しく進擊せず、斥候を出して、精密に前面の地形を捜査し、以て佐々木旅團の進出を竢ち、敵を夾擊して鏖殺せんとす。

然るに佐々木旅團の情報は、午後四時五十分に至り、木越少將よりの通告に接したるも其後何等の通報なく、狀況全く明ならず。故に其夜は戰鬪隊形の儘、夜を徹せり。午前四時三十分、旅團長よりの命令に接し、原田聯隊長は、前日來占領せる陣地を、福崎少佐の指揮する後備近衞歩兵第二聯隊の二中隊に譲り、敵の右翼に向ひ行進し、先づ其前方に在る峻峻

なる山脈稜線を占領し、更に愛野大尉の第七中隊をして賈家子南方の高地を占領せしめ、以て敵の退路に迫らしむ、然るに此時敵は既に夜暗に乘じて退却せり、此時枕山方面の平井聯隊も、原田聯隊も同時に、正面の敵を擊破せんと欲し斥候四隊を編成して、敵情を偵察せしめしに、敵は夜暗に乘じて退却し掩堡内亦一兵なし、想ふに高家嶺以西に集圖せる敵は夜暗に乘じ、其戰線及高家嶺に在りし歩砲兵は拂曉陣地を撤し、安平街道を退却せしめ者の如し。

楡樹林子の戰鬪に於て、我軍に對せし敵兵は、新銳なる歐露兵にして、第三十一師圖歩兵第百二十一、同第百二十二及びセーフスキー第三十四聯隊の一大隊、第三十一旅圖野砲兵二中隊、コーカサス及西比利亞騎兵若干にして、外に老關嶺北方の陣地に砲約六門あり此指揮官は旅圖長キジョーフにして、第三十一師圖長マウ中將は三十日安平にありたりと、捕虜及土人の語る所によれば、敵の死傷は一千五百以上なりと云ふ、我軍の損害は戰死將校二名、下士卒以下四十三名、負傷將校六名、下士以下百八十八名。

第三節　佐々木旅圖戰況

椙原大佐の率ゆる歩兵第四十七聯隊、今村大佐の指揮する歩兵第十四聯隊は、左翼隊長佐々木少將の指揮下に屬して、三十一日拂曉各其舍營地を出發せり。其目的は西偏嶺の敵を

擊攘し右翼は木越旅圖の原田聯隊、左翼は岡崎旅圖と相連繫して、楡樹林子に在る敵の右側に出て敵を包圍攻擊せんとするに在り。

三十日午後十一時、佐々木少將の師圖長より此命令を受くるや、直に今村大佐をして、明日拂曉までに、其一部隊を以て、東偏嶺を占領せしめ、其主力約十二個大隊をして嚴に守備せるを以て我軍の進擊を見て、勇敢に抵抗し、戰鬪漸次激烈となれり、同七時に至り、竹下大隊方面の敵は、益增加して頗る優勢となり、動もすれば逆襲し來らんとす佐々木少將は乃ち田上少佐をして其大隊を率ゐて、志波大隊と竹下大隊との間に應援增加を命じ、東偏嶺より西偏嶺に通ずる道路に沿ふて前進せしめ、更に全線をして攻擊せしめしも敵は險に據り壁に隱れ、高きに在りて瞰射するを以て、我兵の死傷甚だ多く、激戰約二時間半戰鬪益慘憺を極む。

東偏嶺に放列を構へたる我砲兵は最前よる猛烈なる歩兵の掩護射擊をなせしが敵は我頑強

なるを見て一層激烈なる急射撃を注げり。

志波少佐は剣を揮ひ自ら戰線に立ち、『前へ』の號令を下し、敵の右翼なる可しと思慮せし陣地に向ひ、驀地に猛進せしに、意外にも敵が最も優勢の兵力を以て防禦せし中央に突進し、爲に其兩翼より夾撃せられ非常の苦戰に陷ゐりしが、恰も好し、此日午前一時孫家子北方の宿營地を發し、六里の行程を急行せし岡崎旅團の前衛は急に敵の右側を脅威し、其一部は散開して猛烈に李家峪附近の敵を攻撃したるを以て一時勇壯に抵抗せし敵も、漸く退却の兆あり椙原、今村兩聯隊の勇將猛士は乃ち機を逸せずして敵陣地に突貫し、更に散亂せる敵兵を進撃せり。

是より先、敵の右翼に迫りたる岡崎旅團の大部隊も此時既に敵の退却を瞰射し得可き高地を占領し、是れ亦猛烈なる射撃をなしたれば敵は非常の損害を受けて敗潰せり、我軍は西偏嶺に於て、勇戰奮闘大に敵兵を撃破し、更に李皮峪に追撃して、殆ど之を鏖殺せしが、此時右翼木越旅團に對する、敵の方面には敵兵益增加して頑抗し、動もすれが逆襲に轉せんとするを以て、師團長は頻に傳騎を飛ばして、佐々木、岡崎兩旅團の進出を促せり佐々木少將は乃ち椙原大佐をして其占領したる位置に停止せしめ、岡崎旅團の進出を竢つて樹林子に在る敵の右側に出でんと欲せしも、岡崎旅團に對する敵も頗る勇猛に防禦し、且

進路險峻にして容易に進むと能はず、而して右翼木越旅團の方面、益す危急を訴ふるを以て、佐々木少將は、遂に西偏嶺の守備を岡崎旅團に讓り、自ら旅團全力を提げて、前進するに決し、午後六時先づ今村大佐をして、第十四聯隊及砲兵中隊を率ゐて、北偏嶺に前進せしむ。既にして傳騎來り、師團長の命令を傳ふ。曰く『木越旅團は、午後五時樹林子東方に於て、激戰中なり、貴官は、萬難を排して、速かに敵の側背に向つて攻撃す可し』と。

佐々木少將は、師團長よりの命令を受け、旅團全分を提げて、西偏嶺を發し、北偏嶺に向ひたれども、途中日暮れて露營するの已む能はざるに至れり、此時木越旅團方面は、戰闘尙ほ歇まずして、敵兵其陣地を固守して抵抗し、師團長よりは佐々木旅團の進出を促すこと益急なるを以て、午前一時少將は、先づ梨溝附近に在る敵兵を攻撃する爲め、今村大佐をして歩兵第十四聯隊（二中隊缺く）を率ゐて、敵の最右翼を、田上少佐をして其右翼に連繫して進撃せしむ。

午前三時三十分、少將は北偏嶺に在る、砲兵陣地に至り、各隊を指揮號令せり、敵の占據せる梨溝附近の陣地は、巖石崔嵬、其東南面は傾斜頗る急峻にして、登攀すべからず。

然れども木越旅團方面の戰況は速に佐々木旅團の其左翼に進出するを必要とするを以て、

少將は意を決して、今村大佐、田上少佐をして、前面の高地を占領す可きを命じたり。

午前四時頃より、各隊は、夜暗を利用して攻撃準備に着手し、同五時二十分、今村聯隊の最左翼中川少佐は其二中隊を率ゐて三家堡子の正面高地を占領し、續いて今村聯隊は其北方に連繫し、又田上大隊は其右翼に在りて前進せり、既にして岡崎旅團の一部も、西偏嶺に進出せしを以て、稻村少佐は其守備を之に讓りて北偏嶺に來り、尋で中川大隊の二中隊も亦到着し攻撃準備全く整ふ。

午前六時十五分、我砲兵は先づ猛烈なる射撃をなして戰鬪を始めたり、敵も險に據り高きに俯して、勇敢に防禦しければ、戰鬪は忽ち激烈となれり少將は砲兵をして一層猛烈に射撃せしめ、中川大隊をして其援護に依り、敵の最右翼に向ひ、攻撃突貫せしむ、敵は忽ち退却したるを以て、少將は更に全線を前進せしめ、午前七時今村聯隊は、梨溝の西方高地を占領し、漸次北方に蹜進し、田上大隊も其右翼に連りて前進せしが、敵は濠匈子方向に退却しつゝありたれば、少將は之を追撃せんと欲せしが、前面の地形は懸崖壁立し且敵の歩兵尚一大隊計り、其西方高地に在りて、猛烈なる援護射撃をなし居るを以て、我兵容易に進出すると能はず、良久しく對戰せしが、午前十一時少將は更に戰線に兵力を增加し、全線一齊に勇進して、敵を包圍屠殺せんとせり、敵は此勢を見て大に恐れ其一部は孤家子方面に向つて退却せり、是に於て我歩兵は、砲兵と共に力を協せて、猛烈なる追撃射撃を行ひたるを以て、敵は相踏藉し斃るゝ者算なし、依て田上、竹下、中川の各大隊は、更に北ぐるを追ふて、濠匈子方面に前進し、悉く其附近の諸高地を占領せしが、敵は遠く安平街道に退却せり、時に午後零時四十分。

第四節　岡崎旅團戰況

歩兵第十五旅團長岡崎少將は馬塲大佐の歩兵第三十聯隊及加藤少佐の歩兵第十六聯隊第二大隊を指揮し楡樹林子附近に於ける第十二師團の攻撃を援助し、敵の右側背を攻撃す可き命令を受け直ちに部署を定め、各隊を召集し旅團は孫家子を經て、長貝嶺附近に向ひ前進せんとするを告げ、歩兵第三十聯隊第三大隊及騎兵二分隊は前衛となり、馬塲大佐をして之れを率ゐ孫家堡子を經て、長貝嶺に向ひ前進せしめ、得べくんば西偏嶺附近の高地を占領すべきを命じ、加藤少佐をして歩兵第十六聯隊第二大隊を率ゐ前衛として先發せしめ、先づ石盤嶺の東北方高地を占領す可きを命じ、歩兵第三十聯隊第一、第二大隊を本隊として、岡崎少將自ら之を率ゐ、前衛の後方六百米突に在つて進行を始む。

七時二十分、其前衛は既に長貝溝に達す。更に約二千米突前進せば、長貝嶺あり。多數の敵兵

其附近を防禦せり、我尖兵の長貝嶺附近に達するや、敵は始めて射撃を開始せしが、同地附近の東西高地を占領せる我前衛は猛烈に敵の雨翼を夾撃したるを以て、敵は忽ち狼狽して、狄水溝の谷地に向つて潰亂せり、此時第三十聯隊の第三、第二の兩大隊は共に馬塲大佐の指揮下に屬せるを以て、大佐は直に高草木少佐をして第二大隊を率ゐて長貝嶺一帶の地を占領し、敗潰せる敵を追撃せしむ。續いて岡崎少將は、豫備隊たる第三十聯隊第一大隊及び第十六聯隊第二大隊を戰線に增加し敗敵を窮追せしに敵も窮鼠猫を噛むの勢を以て勇敢に抵抗し、尋で敵は山砲四門を、李皮峪の東方高地に布き、我追撃隊に向つて榴霰彈を注ぎ敵の援兵亦續々增加し、加ふるに右翼軍の戰況亦詳かならざるを以て正午十二時頃暫時追撃を中止せり、午後五時四十分佐々木旅團は、全力を擧げて楡樹林子附近に在る、敵の右翼を攻撃するの通報に接し岡崎少將は、第三十聯隊の第一大隊及び第十六聯隊の第二大隊を率ゐて、長貝嶺、偏嶺附近の高地を守備し、馬塲大佐をして第三十聯隊の第二、第三大隊を以て、佐々木旅團と連繫して、楡樹林子の敵を攻撃す可く前進せしめしが、途中夜に入り、其目的を達する能はずして歸還せり、八月一日午前四時、井上第十二師團長より敵の右翼を包圍攻撃すべき命令あり。是に於て岡崎少將は、直に各隊を長貝嶺に集合して部署を定む。

馬塲大佐は狄水溝より約千五百米突を前進したる時、李皮峪の東南方より、敵の射撃を受けたるを以て、大佐は直に兒玉少佐の第一大隊及宮川少佐の第二大隊を展開して之れを攻撃せしが、敵は有利の地形に據り、勇敢に防禦せるを以て、交戰約三時間に亘るも退却の狀なきより、大佐は一部隊を敵の右側に連なる高地に迂回して、其側面より猛烈に射撃せしに敵は忽ち動搖せり、大佐は之を見て、全線吶喊して敵陣に突入せしむ。

高草木、兒玉、宮川の三大隊長は各劍を拔いて先頭に立ち『突貫前へ』の號令一たび下るや先を爭ふて敵陣に亂入せり、此勢に恐れて敵は宛も群羊の猛虎に追はるゝが如く、李皮峪を望で潰走せしも、我兵の追撃徐ろ急なるを以て、敵兵の斃るゝ者多く死屍谷中に堆積して、山上の草木色を變ず。此戰鬪に於て我軍の死傷僅に十數人、而して敵の死傷は七百餘の多きに及ぶ。

我軍奮戰二晝夜、樣子嶺、堵灣、楡樹林子一帶の要害を死守せる敵を擊破して、遼陽に進出する關門を占領するや、優詔第一軍に下れり。曰く。

第一軍ハ嶮難ナル山地ニ在リテ克ク各部隊ノ動作ヲ律シ楡樹林子樣子嶺附近ニ於ケル優勢ノ敵ヲ擊退セリ　朕深ク汝等ノ屢々戰捷ヲ奏スルヲ嘉ス

黑木司令官奉答して曰く

優渥ナル勅語ヲ賜フ　臣等恐懼措ク處ヲ知ラス益奮勵以テ　聖恩ニ酬ヒ奉ランコトヲ期ス
謹ンデ奉答ス

第四十三章　黃海大海戰

第一節　敵艦隊の大擧出港

第一軍司令官　男爵　黒木　爲楨

敵の旅順艦隊は、既記の如く要塞の運命日に迫まるを以つて、港内に安居する能はず、乃ち出港の目的を達せんと欲し、屢々驅逐艦を港外に派して我封鎖線の強弱を偵察せしめ、又監廠大小孤山沖に艦艇を進め、我攻圍軍の左翼を攻撃し、我艦隊を牽制して脫出の隙を作るに努む。而も我陸軍の攻圍作業は毫も其の妨碍を受くるに至らずして着々任務を遂行し、大口徑攻城砲及海軍砲を以て市街及港内を猛撃し、刻々損害を與へたれば、敵艦隊は遂に意を決し、十日午前九時頃に及で悉く出港せり。其の目的は封鎖線を突破して浦鹽艦隊に聯合せんと欲し、若し能はずんば、附近の中立港に竄入して餘命を保たんとするにあり。故に出港したるは、殆ど旅順艦隊の全部にして、即ち「ツエザレウキッチ」「レトウキザン」「ポペータ」「ペレスウキート」「ポルタワ」「セワストポリー」の六戰闘艦「パルラタ」「デヤナ」「アスコリド」「ノーウキック」「バーヤン」の五巡洋艦及八隻の驅逐艦にして、ウキトグフト中將は「ツエレウキチ」に坐乘して全隊の指揮を執る。海軍陸戰隊指揮官として英名あり し少將マツセウキツチも亦同艦にあり、此日巡洋艦「バーヤン」も亦港口を出でしが、途上敷設水雷に罹りて大破を受け、已むを得ず港内に引返せり。

第二節　第一次會戰

我は敵が早晩港口脫出を計るべきを知る故に益々封鎖を嚴にし警戒する所あり。此日午前八時半頃、哨艦は敵艦隊の大擧脫出するを認め、其動靜進退に注意し、一々無線電信を以て之を旗艦に報じ、旗艦は之を各艦に傳へ、指揮命令些の違算なく、各艦皆戰闘準備を整へて接戰の期を待てり。

前回六月二十三日敵艦隊大擧脫出したる際は、彼我接戰地點港口に近かりし爲め、充分我威力を用ゆる能はずして、敵艦を港内に逸したるを以て、今回は勉めて敵を港外遠く誘出し、以て最後の決戰を爲さんことを期し、輙く砲火を開かずして敵を誘致するに力めたり。敵は六戰闘艦、四巡洋艦、八驅逐艦は、單縱陣を作りて益南航し、正午過三十分頃、早くも既に旅順口を去る約三十海里の沖合に出たり。其時我旗艦三笠の檣頭高く戰闘旗を見る、午後一時頃彼我の地位益接觸して過岩附近に會するや、三笠先づ砲火を開き、各艦相繼で

砲撃を開始し、敵艦又之に應じて發砲し、般々器々戰鬪漸く激烈となる。概するに我砲彈は殆んど虛發なきに反し敵艦よりする砲彈は、空しく我艦の四邊に落下するのみ、其命中彈も爆裂力極めて微弱にして損害甚だ少し。砲戰約二時間にして敵に多大の損害を與へ、彼我艦隊は一時分離して砲撃を中止すること約一時間に及ぶ。此戰鬪、當初は彼我單縱陣形を以て相對せしが、二時半頃我一彈「アスコリド」に命中して大損害を與ふるや、敵艦隊は俄に狼狽し、各巡洋艦は裝甲艦の左方に隱れ遂に小單縱陣を作りたるを以て、我は敵裝甲艦を目標として砲火を加へたり。

第三節　第二次會戰

砲火一旦緩ひたる後、敵は依然針路を南東に取りて進行す。我艦隊は飽くまで單縱陣形を保ち、敵本隊と殆ど駢行し、全速力を出して之に接近す。五時半頃彼我の距離益近づき、我先頭艦三笠と敵旗艦「ツエザレウキッチ」とは七千三百米突、其殿艦「ボルタヴ」とは七千五百米突の距離に達せり。此時「ボルタヴ」先砲火を開き、我直に之に應じ、茲に第二回の戰鬪を開く。恰も好し此際我一等巡洋艦二隻は新に來りて本隊（戰鬪艦四隻一等巡洋艦二隻）の左方に列し、大に我勢力を增加せり。之より彼我の砲戰益猛烈となりしが、六時三十七分、我十二吋彈の敵旗艦の司令塔に命中するや、同艦は急に右舷に傾きたるも幸に沈沒を免れ船

體頻りに回轉を始め、二番艦三番艦相繼で回轉し、其三番艦は、將に四番艦と衝突せんとしたるを以て、五番艦は其危險を避けんとして右方に出で、我と相距ること三千五百米突となり、他の各艦も皆右方に避けたるを以て、我は此近距離を制して益集彈射撃を試みたり。此時敵の陣形は全く紊亂し、我は整々の陣形を以て之を包圍し、極力砲火を加へたり。此時我一等戰鬪艦他方面より馳せ來り、同時に海防艦二隻、二等戰鬪艦一隻、亦戰列に加はりたるを以て、我勢力は益增加して十二隻と爲り、以て紊亂せる敵艦を包圍攻撃せり。凡そ敵艦の損害は概ね此包圍中に受けたる所にして、巡洋艦列は第一回の會戰に際して、裝甲艦の陰に隱れたる爲め、幸に完膚を保ちたるも此包圍攻撃を受るに及んで、遂に免るるを得ず、戰鬪艦の損傷は最も甚しく、就中「ボベータ」の如きは、檣二本共に折れ、砲門は全く破壞せられ、殆ど軍艦としての能力を喪失せり。其他「レトウキザン」及「ツエザレウキッチ」の二艦亦「ボベータ」に讓らざる大損害を蒙りたり。我は此の如く敵艦を包圍して大打撃を加へつゝある際、時恰も日沒に及びたるを以て、敵艦の處分を驅逐艦、水雷艇に讓り、暫く後方に退きたり、時に八時二分なり。

第四節　彼我の旗艦

此海戰に於て、敵彈の集中したるは先頭に立ちたる旗艦三笠にして、從て比較的多數の死

傷者を出したり、午後五時五十六分の頃、敵の巨彈飛來して三笠の十二吋砲塔左側に破裂し同艦分隊長博恭王徽傷を負ふ。尋で双互の距離益接近し、砲戰益激烈と爲り、六時二十分巨彈又飛來して三笠艦橋の左舷前部に命中せり。其高所コンパス安置の附近には東郷司令長官、島村參謀長、伊地知艦長等八人敵狀を視察しつゝあり、敵彈の炸裂したるは恰も其下邊の海圖室にして、藤浪中尉、信號長、信號兵、軍樂手等を斃し、破片飛んで上部コンパス附近に落ち艦長參謀官二人及少尉一人を傷けたるにも拘はらず、其側に在りたる東郷司令長官の損傷を蒙らざりしは天佑と謂ふべし、此日司令長官は終始艦橋上に屹立し、從容として指揮を努め、士氣爲に一層の昂進を加ふ。

敵が我旗艦三笠に砲彈を集中したるが如く、我亦敵の旗艦「ツエザレウキッチ」に向て砲彈を集中せり。同艦は常に先頭に立ち、距離最も我に近かりしを以て我より發する巨彈は連續同艦に命中し、大小幾多の損害を與へ、殊に第二次の會戰に於て、我より放ちたる十二吋砲彈は敵艦の司令塔に命中し、其艦機を損じ、且つ幾多の致命傷を加へしかば、該艦は急に右舵に傾き、旋轉して將に沈沒せんとし、又將に後續艦と衝突せんとするの悲運に陷りたり。而して敵司令長官ウキットゲフトは爲に其身體を粉碎せられ、僅かに足一本を殘して無殘の最後を遂げ、其傍に立ちたる參謀及多數の士官も之に死し、參謀長マセウキッチ少將傷き、艦長亦既に重傷を負ひ、航海長全艦を指揮したりと云ふ。

第五節　水雷夜襲

敵艦隊は此の如く我大打擊を蒙り、各艦皆大損傷を受け、司令長官ウキットゲフトは悲慘なる戰死を遂げたるを以て、少將公爵ウクトムスキーは代て全艦隊の指揮を執れり。敵の新司令長官は、味方の損害餘りに甚大にして、到底南方に逸出する能はざるを認め、各艦に對し旅順退航の命を傳へたるも、各艦は多時の激戰に其信號機を損じ、長官の命令通達せず、陣形全く潰亂して、各艦空しく海上に徘徊するのみ。時既に日沒に際し、水雷攻擊の時機正に熟す、驅逐隊、水雷艇隊は命を受けて直に發動し、猛烈なる襲擊を試む。終日の苦戰に多大の損害を蒙りたる敵艦は、今又此襲擊に遇ふて、狼狽益甚しく、各艦個々に分離し、或は旅順に退航し或は南方に、何れも死力を出して遁走せり。我は此敗退敵艦に對して間斷なく追擊を加へたれば、敵艦の損害一層甚しく、特に「ツエザレウキッチ」の如きは、南方に遁走せんとする途中に於て、更に其損害を增大し、辛ふじて我視界を逃れたり。又五驅逐隊の巡雲（艦長中佐松岡修藏）は、四百米突の距離に於て「パルラタ」型巡洋艦に水雷を發射し、其命中を認めたりと云ふ。翌朝天明に及んで敵狀を見るに、戰鬪艦六隻中「ツエザレウキッチ」を除くの外五隻巡洋艦四隻中「パルラダ」一隻及驅逐艦八隻中

の一隻、幷に病院船は、辛ふじて旅順口に再歸し、他は何れも南方中立國に遁竄したり。要するに當夜の襲撃に於て、敵は死力を盡して奔竄したるが爲め、我は多くの敵艦を撃沈するに至らざりしと雖も、何れも多大の損害を蒙らざるなし。

此戰闘に於て、我艦隊は多少の損傷を受けたれども戰闘に支障を生ずるに至らず、又各艦の死傷者は三笠に戰死者三十二、負傷者八十八。其他諸艦に戰死者三十八、負傷者百〇八あり。提報叙聞に達し、左の勅語を賜ふ。

聯合艦隊ハ敵ノ艦隊主力ヲ旅順口沖ニ邀撃シ大ニ之ヲ破リ多大ノ損害ヲ與ヘタリ　朕深ク其勇武ヲ嘉尚ス

東郷長官奉答して曰く。

旅順ノ敵艦隊ニ對スル戰捷ニ對シ茲ニ復タ優渥ナル　勅語ヲ賜ハリ臣等　感激ニ堪ヘス殘ノ敵ノ主力ハ再ヒ旅順ニ竄入シタルモ各方面ニ於ケル作戰尚進行中ニ在リ臣等　齋勉有終ノ戰果ヲ收メンコトヲ期ス

右謹テ奉答ス

第六節　敵艦の遁竄及捕縛

朝に堂々として旅順口より出動せし十八隻の敵艦は我猛烈なる砲火を蒙り、夕に全然潰亂し、其一部分は辛うじて旅順に逃れ歸りたるも、巡洋艦及驅逐艦の大部分は何れも左の如く中立港に遁竄せり。

戰闘艦ツエザレウキツチ、膠州灣に竄入す。

巡洋艦アスコルド、先づ膠州灣に竄入し、次で上海に逃る。

巡洋艦ノーウキツク　先づ膠州灣に竄入し、次で北海に航してコルサコフ港に入る。

巡洋艦ヂヤナ　先づ膠州灣に入り、次で遠く西航して佛領西貢に入る。

驅逐艦グロゾボイ　上海に入る。

驅逐艦ベスシユムヌイ　膠州灣に入る。

驅逐艦ベスボチヤドヌイ　同上。

驅逐艦ベストラーシユヌイ　同上。

驅逐艦二隻(名稱未詳)威海衛に入る。

蓋し敵艦隊當初の計畫は、小型軍艦は或は附近中立港に竄入するの已むを得ざることあらんも、大艦は萬難を排して必ず浦潮斯徳に達するに在り、然るに我攻撃と遮斷と頗る猛烈且つ周到なりし爲め、遂に其目的地に達する能はず、四分五裂して何れも中立港に竄入す

るの已むべからざるに至り、今回の港口脫出も不成功に歸し、徒に其損害を增加するの結果に終りたるなり。

露艦既に相率ゐて中立港に竄入せり。乃ち之に對して適當の處分を爲さゝるべからず。凡そ交戰國一方の軍艦が中立港に竄入したる時は、該港灣を領有する中立國は竄入艦に對して二十四時間內出港を命ずべく、若し天候の不良、乘員の不足、食糧炭水の缺乏等に依り、實際二十四時間內に出港する能はざる時は、更に二十四時間の猶豫を與へて出港せしむべく、又艦體損傷して眞に航海に堪へざる時は、航行に堪ゆるに足る修理を許し、速に出港せしめざるべからず。戰鬪力回復程度の修理を加へ、若くは中立港を以て作戰の根據地と爲すが如きは斷じて之を許さず。是れ近時國際法の認むる通則にして、各國概ね之を採用せざるはなし。今回遁竄せし露艦は如何に中立國に於て處置せられしか。

一、膠州灣竄入の露艦

膠州灣は敵艦隊の夙に避難地として私に期したる所なり。且此地今回の交戰地に近邇するを以て、敵の敗艦は期せずして同灣に竄入したる者多し。即ち旗艦「ツエザレヴキッチ」を始めとし、巡洋艦「アスコリド」同「ノーウキック」及驅逐艦三隻ありしが「アスコリド」及「ノーウキック」の二巡洋艦は、獨逸官憲の命令に依て同灣を去り、殘るは一戰鬪艦三驅逐艦の四隻と爲れり。

「ツエザレウキッチ」は奮鬪最も力め、爲に自ら我艦隊の集彈を蒙り、殆ど其戰鬪力を喪失せしが幸に沈沒を免れ、辛くも我視界より遠ざかりたるを以て、自已の汽力に依りて浦潮に赴かんと企てたるも、到底不可能なりと斷定し、其出し得べき限りの速力を以て南航し、十一日午後九時を以て膠州灣に竄入したり。

獨逸固より露國に同情を寄すと雖も、中立の條規を無視すること能はず。此を以て膠州灣の獨逸官憲は先づ一たび露艦に出港を要求し、其之を肯んぜざるや、同艦の戰鬪に從事するを防がんが爲に大砲の一部を取り外し、以て本國政府の指揮を待てり。獨逸政府は「ツエザレウキッチ」が相當の時間內に修理を完成する能はざるべきを認め、又出航に意なきを看取し、即ち同艦をして武裝を解除せしめ、膠州灣に抑留せられたり。

「ベスシユムヌイ」「ベストラーシユヌイ」の三驅逐艦中「ベスシユムヌイ」は機關部に損傷を受けたるも、二日間位にて修繕を了すべく、他の二隻は大なる損害なし。獨逸官憲は各艦の出港を促がしたるも肯んぜざるより遂に獨逸本國政府の命に依り、武裝を解て之を膠州灣に抑留せり。

二、芝罘竄入の露艦

敵の驅逐艦「レシテリヌイ」號は、十日夜辛ふじて我水雷艇の襲撃を免れ、十一日午前四時を以て芝罘港に竄入せり。同夜海軍中佐藤本秀四郎の率ゐる第一驅逐隊は、朝潮（艦長少佐松永光敬）霞（艦長少佐大島正義）の二艦を以て四散せる敵艦を捜索中、遙に敵艦一隻西に向て急航するを認めたるも、夜陰の爲め其踪迹を失せしが、翌十一日捜索を續行し、前夜遙に認めたる敵艦が芝罘に入りたる形迹あるを以て、港外に在りて之を監視せしに、敵艦は深く港内に竄入して輒く出で來らざりしを以て、日沒後、港内に入りて偵察を遂げしに、敵艦は即ち「レシテリヌイ」號にして、未だ武裝を解除せざるのみならず、却て同港竄入後石炭を積込みたる事實を確かめ得たり。

是に於て敵艦に對し適當の交渉を爲さんと欲し、藤本司令は朝潮乘組の中尉寺島宇瑳美に通譯幷に下士十餘名を附し、十二日午前三時を以て敵艦に赴かしむ。敵艦長は到底其免るべからざるを自覺し、部下に命じて自艦爆發の準備を爲さしめ、而して日本軍艦の使者に對しては腕力を以て之に應せんとを期し、私に之を部下に令す、一艦の決心既に斯の如し我軍使寺島中尉は同艦甲板に上りて敵艦長に面し、談判するもの凡一時間遂に要領を得ず、彼は蓋し自艦爆沈の準備熟するに至るまで談判を繼續せんことを期す、故に時間を空費せんと計りたるなり。寺島中尉乃ち捕獲の手續を行はんとして身を起すや、敵艦長は突如鐵拳

を固めて寺島中尉の面部を撲ち相格闘して海中に落つ敵水兵等亦艦長に倣ふて我通譯及水兵と格闘を演じ、相擁して海上に轉落するもの勘からず。爲に艦員五十一名中三十餘名の死傷者を出し我亦死者一名傷者十五名を出せり。

寺島中尉は再び甲板に攀ぢ上り、敵艦捕獲の事に從ふ。此時敵艦は其前部より爆發し、爲に派遣員に少數の死傷者を出したるも艦は沈沒するに至らず。依て我は應急修理を施して之を捕獲し、午前五時十五分曳船を以て之を大連に送れり。

三、上海竄入の露艦

巡洋艦「アスコリド」及驅逐艦「グロゾボイ」の二艦は、十二日午後相前後して上海に竄入したり。「アスコリド」は十二日夜の水雷攻撃を逃れ、一度膠州灣に入りたりも、獨逸官憲の爲に二十四時間内に退港を命ぜられ已むを得ずして同港を去り、南下して上海に入りたる者なり。彼れ蓋し清國の意思兵力共に薄弱なるに乘じ、此地に於て十分に修理を加へ、又十分に食糧炭水を積み込み、「グロゾボイ」を率ゐて遠く浦鹽に奔らんとを期したるものゝ如し。「アスコリド」と同一事情の下に膠州灣に入りたる「ツエザレウキッチ」及二驅逐艦は、獨逸政府の命令の下に武裝を解除し芝罘に逃れたる「レシテリヌイ」は清國の中立條規に服せず且我に抵抗したるを以て、遂に我捕獲する所と爲れり。清國官憲は「アスコリド」外二

艦に對して至當の處分を爲さゞるべからず。乃ち二十四時間以内に退去の事を命じたり。然るに「アスコリッド」艦長は同艦の損傷甚しくして航海に堪へざるを辭とし、切に修理の爲に入渠を請ひ十四日午前二時を以て修理の爲め船渠に入り「グロゾボイ」は同五時頃、江を遡りて佛朗西租界の前に投錨したり。北京政府は露國公使の強硬なる意見に屈譲し、訓電を上海道臺に下し兩艦の上海に於て修理を加ふるを許し、但し其修理程度は航海力の回復に限り、且つ其期日を五日とし、期間滿了後二十四時間内に退去せしめんとす。然るに「アスコリッド」は航海力回復の程度まで修理を加ふるを以て足れりとせず、且つ修理完成せば出港して再び戰闘に從はんとを期するものゝ如く、又「グロゾボイ」は本來修理を加ふるの要なく、唯「アスコリッド」の修理完成を待てり。

我政府は清國政府の優柔決せざるを見るや、抗議を提出し、清國政府若し速に中立の義務を厲行せざれば則ち帝國政府は斷然芝罘竄入の「レシテルヌイ」號に對して取りたる手段を以て上海竄入の露艦に臨まんと擬せり。上海道臺願る窮し、乃ち十八日を以て露國總領事に通牒し、速に武裝解除を決行せんことを求めたり。

而も露領事は修理の容易に終る能はざるを主張し、以て武裝解除を拒絶せり。此に於て上海道臺は詳に事情を陳して露國の中立違背を在上海領事團に訴へしが、領事團は二十二日

を以て會議を開き、他國は之に干與すべきものにあらずと決定したり。

我政府は既に激烈なる抗議を提出したるも、到底清國政府の爲す無きを看取し、一面上海道臺に交渉を累ぬると共に、優勢なる軍艦を呉淞港外に進めたり。列國亦各其軍艦を同港内外に集中し、緩急に備へ形勢頗る急なり。露國は此に至り形勢の非なるを看て遂に屈し、二十四日夜在北京レッサル公使より武裝解除を上海領事及兩艦長に命じ、同領事より之を上海道臺に傳へ兩艦は遂に二十九日より解裝に着手し、數日にして之を完了し久しく日清露三國間の問題たりし上海竄入露艦處分の件は、茲に全く解決を告ぐるに至れり。

四、哥爾薩竄入の露艦

巡洋艦「ノーウキック」は僅に三千噸の二等巡洋艦に過ぎずと雖も、此小型の巡洋艦は、二月九日の開戰以來、旅順港外に於ける毎次の海戰に參加し、苟くも我主力艦隊が攻撃を試むるに當りては、彼れ必ず猛然として突出し、常に先頭に立ちて奮闘を試みたるは、我將士の感嘆措く能はざりし所なりしが、港口逸出の目的を達し一たび膠州灣に入りたるの後、去て遠く浦港に向つて進航中我軍艦千歳對馬に要撃せられ、自國の領水コルサコフ港に於て壯烈なる最後を遂げたり。事後章榊太コルサコフ海戰に詳なり。

五、西貢竄入の露艦

巡洋艦「ヂャナ」は、再び旅順口に逃れたるものと認められしが、後十餘日を經て、倫敦電報は突然同艦が佛領西貢に竄入したることを報じ來り。其事實なること日ならずして判明したり。

佛國は露國と斷つべからざる同盟の誼ありと雖も、其中立の宣言に對し適當の措置を執らざるべからず。乃ち武裝解除を露艦に命じ此旨を我政府に通牒したり。

六、威海衞の敵驅逐艦

以上揭記するもの、外に艦名未詳の驅逐艦二隻あり、日本艦隊の水雷攻擊を冐して南航し、山東角西北方の地點に於て暗礁に觸れ、頗る進退に窮しつゝあるの際、偶英國水雷艇の發見する所と爲り、曳かれて威海衞に入れり。是れ八月十二日の事に係り英國官憲は翌十三日を以て直に武裝解除を命じ、之を威海衞に抑留し、其乘組員は之を香港に送致したり。

第四十四章　蔚山沖の海戰

第一節　敵艦發見

浦鹽艦隊が本邦沿海に出沒して蠻行を逞うすること既に數回、固より戰局の大勢を動かすに足らずと雖も、我海運に障害を與ふること鮮少ならず。殊に其行動の兇暴なるは我同胞の切齒して憤激する所なり。

第二艦隊は開戰以來速に浦鹽艦隊を擊碎し以て後顧の憂を除かんとし、經營頗る慘憺たりと雖も、時未だ至らずして屢々長蛇を逸せしが、蔚山沖の一戰敵艦隊に大打擊を與へ、殆んど其戰鬪力を滅却し、海上の不安を一掃すると共に、同胞累月の欝憤を霽することを得たり。

蔚山沖の海戰は數日前の黃海々戰と相關聯す。蓋し旅順の敵艦隊は、背面よりする我陸軍の壓迫に堪へず遂に八月十日意を決して港口を逃出し、我聯合艦隊の爲めに大打擊を蒙り、四分五裂或は港內に逃避し、或は各方面に奔竄す。聯合艦隊司令長官は、此奔竄艦浦鹽艦隊と會合せんとする企圖なるを看破し、浦鹽艦隊は此際必ず出でゝ奔竄艦を迎ふべきを推斷し、乃ち命を第二艦隊に下し、敵を朝鮮海峽に扼して之を擊退するの任に當らしむ。時に第二艦隊は或る任務を帶びて東北海上に在り。此命に接するや、上村司令長官は、直に麾下各艦を率ゐて南航せり。當時の第二艦隊は出雲（艦長大佐伊地知季彥）吾妻（艦長大佐藤井較一）常磐（艦長大佐吉松茂太郎）巖手（艦長大佐武富邦鼎）の四隻より成り、上村司令長官は出雲に坐乘し、司令官三須少將（宗太郎）は磐手に坐乘す。各艦の勇將猛卒は、勇

氣俄に昂進し、熱心索敵運動に努む。

十四日午前四時二十五分、我艦隊は蔚山の南方沖合約二十海里の地點に達したる頃、遙に三隻の巨艦浪を衝いて南航するを認む。即ち「ロシヤ」、「グロムボイ」、「リユーリック」の三艦にして、彼等は此順序を以て單縦陣を作り、沖ノ島方面に向て南進せり。此に於て旗艦出雲は『敵艦見ゆ』の信號を各艦に傳へ、十分の警戒を加へ、相當の角度を取りて進航す。而して敵は未だ我艦隊が着彈距離内に在るを知らざりしなり。

我各艦は益す猛航を續け、適當の距離に達するに及び、戰鬪旗々艦檣頭に翻へり、各艦皆之に倣よ、旗艦出雲先頭と爲り、磐手、吾妻之に次ぎ、常磐殿艦となり、規定の距離を保ちつゝ前進し倏然敵の前進路を壓したり。敵艦隊は頗る事の意外なるに驚き、例の如く遁逃せんと欲し、先頭の旗艦「ロシヤ」、盛に煙を揚げて北進を始め、「グロムボイ」、「リユーリック」、之に次で北進す、而も我艦隊は嚴に其前路を扼し、我れ先づ砲門を開き、敵亦之に應戰し、玆に激烈なる海戰を開始したり、時に十四日午前五時二十二分なり。

第二節　彼我接戰

開戰當時の彼我艦隊距離は約八千米突にして、其陣形は丁字形なり。敵は單縦陣を作りて我に當り、我は絶えず其先頭を壓迫し、常に丁字の陣形を保ちたり。故に彼我の利不利著

しく懸絶せり。且我艦隊は旭光を背にし、敵艦隊は之に向て我に抗するを以て、是れ亦我に便宜を與ふると共に、敵の苦痛は少からざるものゝ如く、我は常に此位置を保ちて敵艦に迫れり。

砲戰は最初より激烈を極めたり。我は陣形と位置とを利して正面より敵艦に迫り、其發射する砲彈に虚發なく、敵の各艦共に勘からざる損害を蒙れり。敵は再び針路を轉じて北方に逃竄せんと企てしが、其殿艦たる「リユーリック」は常に前進二艦より後る我艦隊は前進二敵艦の逃走を遮ると共に、「リユーリック」に砲彈を集中し、彼我の距離僅に四五千米突に過ぎざりしを以て其着彈正確にして一發毎に敵の損害を增し、進退頗る困難の地位に陷らしめたり。我將卒は恰も射撃演習を爲すの思を以て益す猛射を加へ、砲彈の命中する毎に萬歳の聲盛に起り、發砲の響と相和して海波爲に震動す。「ロシヤ」、「グロムボイ」の二艦も「リユーリック」の苦戰を見るに忍びず、再び轉回して之を擁護し、又丁字の陣形を作りて猛烈なる砲戰と爲る。此時「リユーリック」は我砲彈の爲に火災を起し、又舵機を損じたるものゝ如く艦體操縦の自由を失ひて唯旋轉するのみ。「ロシヤ」、「グロムボイ」も亦火災を起し三艦より吹き出す黑煙は天に冲し猛風は火光を飛ばし、艦内は非常の混雜を極め、艦體は全く黑煙に包まれ、海上濛々として一時彼我の所在を知る能はず、敵亦極力奮闘せり。

我將卒之を見て勇を皷して奮闘し、就中「リューリック」に向て砲彈を集中したるに、同艦は刻々損傷を增し、艦部に命中したる砲彈の爲に大孔を穿たれ、海水次第に浸入し、艦部少しく沈みて左舷に傾きたるも、尙ほ能く戰闘を繼續し、飽く迄應戰して止まざりしは嘆稱するに足る。先刻來戰線を逸走するに勉めたる「ロシヤ」及「グロムボイ」は「リューリック」を窮地より救はんが爲に屢々戰線に引返し、其都度圓形を描きて航進し、僚艦援護に努めたるも、我は尙ほ丁字の陣形を保ち、近きは四千米突の距離より、二艦に彈雨を注ぎたるに其着彈正確にして、「ロシヤ」の上甲板は勿論、中甲板の砲塔も大半破壞せられ、檣折れ、煙突亦折れ火災を起して烟焰艦窓より噴出するを見る。又「グロムボイ」も上中下甲板の防禦物亦悉く損し、是れ亦火災を起せり。即ち二艦現下の情態たる、自ら其艦體を保護修理するに急にして、復た他を顧みるに遑あらず。此に於て「リューリック」救助の事を斷念し、辛うじて北方に遁走せり。時に午前八時三十分なり。

第三節　「リューリック」擊沈

「リューリック」は大破したりと雖も、未だ全く戰闘力を失はず。逃走せる「ロシヤ」、「グロムボイ」も之を追撃せざるべからず。即ち我第二艦隊は此二様の任務を有す。是より先き戰方に關なるの時第四戰隊司令官瓜生中將（外吉）は、自ら浪速（艦長大佐和田賢助）を率ゐ

て戰場に來り、出雲外三艦より成れる本隊の行動に準じて敵を砲撃せり。既にして「リューリック」大に驚き、「ロシヤ」、「グロムボイ」逃走するの交恰も好し第四戰隊所屬の高千穗（艦長大佐毛利一兵衞）亦來り會したるを以て、上村司令長官は「リューリック」の處分を浪速高千穗の二艦に托し、本隊は遁走敵艦を追ふて西航せり。此に於て瓜生司令官は浪速高千穗二艦を以て單縱陣を作り、直に「リューリック」に迫る。既に半死の地に陷れる同艦は前面に現はれたる我二艦の勢力微弱なるを侮り、俄に勢力を回復し、十二節內外の速力を以て進航を起し、極力應戰したりと雖も、前來の損害の爲に著しく砲力を減少し、且つ我浪速高千穗二艦より四千米突內外の距離に於て猛烈なる砲撃を受け、艦部より火藥庫への浸水甚しく十時三十分敵の砲火は殆んど止み、艦體後部漸次沈沒し始めたり、敵は到底其援ふべからざるを覺悟し、自ら「キングストン」を開きて沈沒を早め、艦員の海中へ飛び込む者續々たり、既にして砲火全く止み艦部が水中に沒すると見るや否や艦身は急に逆立し、驚くべき勢を以て水底に沒したり。時に十時四十二分にして、其沈沒の場所は韓國蔚山と長州角頭との中間より少しく北方に位し、兩地より約四十五海里の地點に在り、此の如くにして一萬零九百三十三噸の堅艦は空しく海底の藻屑と爲り了る。眞に小意氣よきの極みなれど彼れ亦軍艦として其任務を十分に盡したるもの、特に最後の瞬間に至るまで應

砲を絶たざりしは稱嘆に餘りありと云ふべし。此に於てか、我第二戰隊は直に海上の敵救助に着手したり。

第四節　「ロシヤ」「グロムボイ」、

我本隊は、「リューリック」の處分を浪速高千穗に委し、全速力を以て「ロシヤ」、「グロムボイ」を追撃す。兩艦共に快速力の堅艦なれども既に多大の損傷を蒙り、我追撃に對して應砲したるは極めて少し。既にして我砲彈又敵艦に命中し、「ロシヤ」は五回、「グロムボイ」は三回火災を起せり。而も且防火し且奔竄し、慘狀憐むべし。我は追撃するもの一時間乎前十時頃追撃を中止し、元位置に向つて進行すると數十海里、浪速高千穗の一隊より無線電信を以て「リューリック」號沈沒の報を傳へ、艦隊將士員始めて安堵せり。

第五節　敵兵救助、捕虜六百人

「リューリック」の處分に任じたる浪速高千穗の兩艦は、敵艦の全く沈沒したる後、直に溺者救助に着手したり。偶出雲磐手等の本隊は追撃戰より元位置に歸還し、浪速高千穗の救助運動を目撃するや、上村司令長官は直に信號を以て敵兵救助を各艦に傳へ、之を遇すること努めて親切丁寧なるべく、負傷者に對して十分調攝すべしと嚴命したり。各艦は端艇を卸して救助に從ひ、新高、對馬、千早及水雷艇隊も亦た來り加はり、共に溺者救助に努

力せり。此時附近一帶の海面は、木片ハンモック等幾多の物品に掩はれ、多數の露兵は其上に集合し、或は悲鳴を揚げ或は合掌して哀を乞へり、各艦は鋭意救助に從ひ、忽ち六百一名を救助し之を各艦に收容せり。

第二艦隊の偉勳に對し、優詔下れり。曰く

第二艦隊ハ萬難ヲ排シ朝鮮海峽遮斷ノ任ニ當リ遂ニ大ニ浦鹽方面ノ敵艦隊ヲ擊破シ其一艦ヲ沈メ偉功ヲ奏セリ　朕深ク將校士卒ノ勤勞勇武ヲ嘉尙ス汝等益ス奮勵シテ前途ノ大成ヲ期セヨ

上村第二艦隊司令長官奉答して曰く

本艦隊ハ浦鹽方面ノ敵ニ對シ戰勝ヲ得タルハ一ニ　大元帥陛下ノ御稜威ニ據ル然ルニ特ニ優渥ナル　勅語ヲ賜ハリ恐惶ニ堪ヘス臣等奮勵以テ　聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス臣彥之丞誠惶謹テ奏ス

第四十五章　樺太コルサコフ海戰

第一節　我艦隊の索敵追撃

八月十日の海戰に於て我水雷艇及驅逐艦等の猛烈なる襲撃を受け、水線上に三個の砲彈を

蒙りたるも漸く脫して南方に航し、一たび膠州灣に入りたるも、獨逸官憲より二十四時間內退去の命令を受け、乃ち若干の石炭を積み込みて同港を退去したる敵の巡洋艦「ノーヴキツク」は出港後の踪跡全く不明に屬せしが、彼は大隅沖を經て太平洋に入り、其快速力を利用して巧に踪跡を晦まし、漸次北して國後水道を過ぎり、十九日を以て薩哈嗹島のニルサコフ港に入りたること、後に至りて判明せり。蓋し同艦が膠州灣を去りしときの希望は、遠く北航して浦鹽艦隊に合併せんとするに在りしならん。是より先き「ノーヴキツク」の膠州灣に竄入したるの報あるや、上村司令長官は千歲（艦長大佐高木助一）對馬（艦長中佐仙頭武夫）に命じて之を追擊せしむ、二艦は命令に依り同方面に急航せしが、途中敵艦北に逸走したるを知り、日本海を直航し、十八日午後一時を以て函館に着し、十分に索敵すと雖、未だ敵艦が津輕海峽を通過したる形跡を見ず、翌十九日午前函館を發し、北海諸方捜索中、敵艦は同日午前七八時の頃千島國アトエヤ岬燈臺沖を北西に向ひ通過したるの急報に接したるを以て、兩艦は直に宗谷海峽に急航せり。此日濃霧極めて深く咫尺を辨せず爲に捜索上不便勘からず、加ふるに宗谷の水道は幅二十海里に亘るを以て敵を逸するの虞特に深かりしが、高木千歲艦長は、敵艦の速力を其國後海峽通過の時刻により打算し、又同艦の石炭及飲料水の積載量に考へ、今や既に缺乏を告ぐる頃なるを推測し、其寄港地は必ずニルサコフならんと推定し索敵しつゝ北進し、二十日未明に禮文島の北西二十海里に達し、宗谷海峽の中央に進みしも敵影を見ず、且つ天候不良にして展望十分ならざるを以て、八時二十四分、宗谷岬に向ふ途中恰も對島は禮文島の西方六十海里より索敵しつゝ來航したるを以て、千歲は直に宗谷岬とシレトコ岬との一線上に進みて監視の任に當り、對島をして十時三十分よりコルサコフ港方面を索敵せしむ。

第二節　軍艦對馬の奮戰

對馬は午後四時二十分ニルサコフ港外約二十五海里に達せし頃、遙に港內に檣頭を認め直に港口に進航したるに、敵之を覺りて港外に突進し來る。對馬は敵艦の進路を遮りつゝ相竝んで南進し、四時三十分、兩艦適當の距離に達するに及んで、我對馬の右舷に紫電一閃直に敵に向て砲火を開く、敵艦亦砲彈を亂射し、剩へ二十五節の快速力を利用し、我運動を妨ぐ、砲戰約一時間、敵艦尾の上甲板に命中したる我巨彈は、致命傷の如く、黑烟漠々として艦體を掩ふ。敵は今や到底抗する能はざるを覺り、俄に艦首を回轉し其快速力に依りて再び港內に逃入したり。此砲戰に於て、敵の一彈我艦の右舷に命中して六番八番の炭庫を破り、之が爲め浸水甚し。乃ち追擊を中止し、直に應急の修理に着手し航海戰鬪に支障なきを得たり。

第三節　軍艦千歳の活動

千歳は宗谷岬の線にありて監視の任に當りしが、午後四時二十分對馬より『敵艦見ゆ』の無線電信に接したれば『其位置を示せ』と發信せしに、『敵はコルサコフ港内に在り』の返電を得たり。依て千歳は全速力を以て其方向へ疾走せしが、日既に沒し、敵艦を認むる能はざりしを以て、港外に在りて敵艦を監視し、對馬は退て宗谷海峽の警戒に任じたり。翌二十一日未明千歳は進んで港内に入る敵艦は市街陸岸に近く淺瀬に乘揚げ、艦體は著しく右方に傾き、艦尾は上甲板迄浸水するを見る。是れ敵は前日の我攻撃に依りて著大の損害を受け、到底免るべからざるを自覺し、同夜自ら擱岸を試みたるものなるべく、今朝我艦の港口に顯はるゝや、敵は狼狽を極め、小蒸汽船又は端艇に乘じて陸上に逃走するを見る。此に於て千歳は六時二十五分より砲撃を初め、七時十四分迄繼續し、敵艦をして全然敗艦たらしむるに至れり。我は既に長驅追撃の目的を達したるを以て、千歳は宗谷海峽に在りたる對島と合し、相共に根據地に歸還したり。此戰闘に於て、兩艦共に一人の死傷者を出さず、「ノーヴキック」撃破の事叙聞に達するや、左の勅語を上村司令長官に賜ふ。

千歳對馬ハ哥爾薩港ニ於テ敵艦ヲ撃破シ長驅追撃ノ目的ヲ達シタリ　朕之ヲ嘉尚ス

上村司令長官奉答して曰く

千歳對馬ノ哥爾薩港ニ於ケル奏功ハ一ニ　大元帥陛下ノ御稜威ニ依ル然ルニ玆ニ又優渥ナル　勅語ヲ賜ハリ恐懼ニ堪エス臣彦之丞誠惶謹テ奏ス

第四十六章　大海戰後の旅順口

黄海大海戰は敵艦隊をして一蹶復た起つ能はず、空しく港内に蟄伏せしむるに至らしめ、勇猛なる我將卒をして轉た髀肉の嘆に堪へざらしむ。此に於て我艦隊は新に陸戰重砲隊を組織し、陸上背面より攻圍軍の攻撃を掩護すると共に、併せて港内の敵艦を砲撃せしむ。此より我海軍の任務は專ら陸戰重砲隊に移り、爾後海上に於ける壯快なる戰爭を見ず。然れども艦隊は依然封鎖を繼續し、陸上の攻圍軍及重砲隊と相應じ、早く要塞を攻陷し且敵艦を殲滅せんことを努む。

第一節　旅順港外の小衝突

敵艦隊は、黄海大海戰に蒙れる損害極めて大なるを以て其修理容易に進捗せず、一方には陸上の砲撃益急なるを以て、露軍は其敗艦より重砲を陸上に引揚げ、水兵を徴して陸兵と共に防禦の任に當らしむ。然れども驅逐艦の損傷は比較的大ならず、又完全なる水雷艇を存するを以て、敵は十日海戰後も屢々此等小型艦艇を港外に派し海岸線に沿ふて我攻圍軍

の行動を妨ぐるに努めたり。

大海戰の翌十一日小平島附近を警戒せる摩耶、赤城の二砲艦は午前十時頃敵の砲艦「ギリヤーク」及「オトワズヌイ」の二隻鮮生角附近に出で來りて我陸軍の左翼を砲撃するを認め直に進みて龍王塘に至り之を砲撃せしに赤城の一彈「ギリヤーク」に命中し敵は直に旅順方面に退却せり此時崞嶼嘴附近の敵も頻に我二艦を砲撃せしが一も損傷を受けず。又烏海以下の砲艦隊は驅逐隊と共に同日朝來前日の海戰に敗走したる敵艦の旅順に入るを追躡して敵狀偵察に努め其迅速確實なる報告は我艦隊の行動に尠からざる利益を與へたり。

第二節　崞嶼嘴砲臺の砲撃

八月二十三日に至り、敵は崞嶼嘴附近の陣地より頻に我攻圍軍を砲撃し、戰闘艦「セバストポリ」亦港外に出でゝ牽制運動を試む。八月二十三日は即ち我攻圍軍第一回總攻撃の末日なり。我日進、春日二艦は午前十時陸岸に接近し、崞嶼嘴砲臺を砲撃す。敵は俄に砲の方向を轉じ、我二艦に向つて盛に集射せり。黄金山砲臺亦協力して我二艦を砲撃したるも砲彈我艦に達せず。交戰一時間餘にして敵砲臺は遂に沈默せり。二艦は尙龍王塘附近より鮮生角附近に出で間接射撃を行へり。又朝來砲臺と共に我攻圍軍を砲撃するに努めつゝありし「セバストポリ」は午後一時機械水雷に罹り、著しく右舷に傾き、艦首を水中に沒し、

大形蒸汽船に曳かれて旅順港内に遁逃したり。

第三節　敵艦艇の爆沈頻々

敵は我攻圍軍の行動を妨ぐるが爲に屢出動すれども、我敷設水雷の爲に航行自由ならざるを以て、頻々艦艇を港外に出して掃海に努め、而して頻々水雷の厄に罹れり。

十八日午後七時五十二分「オトワズヌイ」型砲艦一隻老鐵山より一千米突の海面にて掃海隊掩護中機械水雷に罹り沈沒せり。

越て二十四日午後六時二十分老鐵山の東約二海里の處に於て敵の驅逐艦一隻機械水雷に罹り忽ち沈沒し、尋で同二十五分他の一隻の敵驅逐艦も亦水雷に罹り、僚艦に助けられて港内に入る。朝來敵の港外に出でしは掃海艇五隻、驅逐艦三隻にして、此遭難と同時に皆愴惶として港内に遁れ入れり。

次で八月三十一日敵は朝來小蒸汽船四隻、水雷艇三隻、特種掃海艇四隻、端艇數隻を旅順口外に出し作業を爲せしが午後二時二十五分城頭山下約一海里の所を掃海しつゝありし敵の特種掃海艇一隻は機械水雷に罹り爆沈せり。

此の如く敵は頻々我敷設水雷の爲に艦艇を損し、且我監視亦極めて嚴なるを以て、漸次掃海の念を絶ちたるものゝ如し。

第五編　戰爭第一期　下

第一章　三面鋭鋒遼陽に鍾る

我第一期作戰計畫は始めより遼陽攻擊を主眼とし、滿洲軍の三面上陸は各特殊の任務の下に各方面より所在の敵を破りつゝ、皆遼陽攻擊の連繫運動を目的として前進せり。而して其連繫の目的は左方第二軍に於ける大石橋の占領、中央大孤山上陸軍に於ける析木城の占領、右方第一軍に於ける樣子嶺、檜樹林子の占領が一週日の間に相應じて敏活に成効せり。海外の批評家が『日本軍の加へ來る攻擊を、露軍は以て孤立運動となしたるも、實は其運動たる總て脈絡ある全進軍の一部にして、此の如く觀察するにあらざれば、日本軍の運動を相當に了解する能はず』と云へるもの實に肯綮に中れり。

敵は、第一軍の方面に大兵を集めんとすれば析木城攻擊軍に腹を突かれんとし、析木城方面を重しとすれば第一軍に腋を刺されんとす。而して遂に兩つながら防止する能はずして遼陽に壓迫せらるゝに至れり。當時三面より壓迫せる我軍の地位を里數のみにて示せば左の如し、

檜樹林子、樣子嶺より遼陽まで　約十二里

析木城方面より遼陽まで　約十二里

海城より遼陽まで　約十五里

此の如くにして、三面壓迫の形勢全く定まり、三軍共に既に險坂隘路を踰越し、前方又我を遮ぎるアルプス山あるなし。我勇猛の將卒を以て目標地點に進軍するや、恰も長江の堤を決して、平原に奔注するが如く、敵の豫期せしよりも時機早く到來し、遼陽に於ける日露兩軍の大激戰となれり。

第二章　遼陽の大戰(一)——總說

第一節　遼陽の地勢

敵將クロパトキンの滿洲に於ける策源地として選定したる遼陽の城市は蜒蜿起伏して遠く東北方より來れる連山脈の漸く陵夷して平野に沒するの所にあり、故に東南二面は山峰自然の垣墻を成し、西北二面は所謂遼野千里に連りて一望際涯なく、渾遼の二水其間を千彎萬曲して自然の濠溝をなす唯太子河の激流、城の南西を繞らずして西北二面を巡環するが故に、守者に取りて適退路の障碍物となるべきも、攻者に對して防禦物に利用すると能はざりしは、露軍に取りて唯一の不利益なりしならむ、之を外にして天然の地形、悉く皆露

軍に利せざるは無く、殊に太子河の上流が彼の策線と並行して流れ、首山が平野に獨立して四方を瞰制するが如きは、殆ど自然に得べからざる恰好の陣地と謂ふべし。

遼陽は又四通八達の要衝に當れり。露軍の所謂マンダリン街道は北、奉天に通じ南、海城に至り東、朝鮮よりする大道は九連城、鳳凰城、連山關、を經て城の東門に通じ、西北新民廳よりする道路は大民屯、長灘を經て北門に達し、東清鐵道の停車場は、直に北滿洲の策源地たる哈爾賓に通ず。是を以て東南二面の街道を扼し形勝に據つて日本軍を支阻せば安意以て四方を指麾すべく、西北二條の道路に依り所在の物資を徵集せば、兵馬の糧秣、立に辨じ、東清鐵道に依りて、兵器彈藥若くは人馬を補充せば、戰鬪繼續するも、毫も匱乏を訴ふることなかるべし、露軍が遼陽を以て南滿洲の策源地となし、又首力の待機陣地に選定せし所以なり。

第二節　露軍の防備

歐洲大陸に於て軍事工學の一大家を以て名あるベリチコー將軍が畢生の智巧を絞り、百有餘日營々として經始せし露軍の防備は實に周密を極むる者あり。彼は最後の防禦陣地を城外二千米突の田圃中に選定し、西は右翼の一端を太子河の下流に託して、停車場及新市街を其線内に抱擁し、鐵道を横ぎりて城南の西關、玉皇廟、孤楡樹を包み、太子河を挾んで

東は木廠東北の高地を連繫し、半圓形の長き設堡陣を布き、歩兵約一大隊を容るべき壯大なる角面堡は、左右數百米突の間隔を保ちて壘々相望み、外濠の前方及濠内には、悉く鐵條網を張り、狼窪を掘り、地雷を伏せ、拒馬柵を植え、咽喉部の濠内には之に供給すべき用水井を穿ち、隱蔽通過すべき凹道を設け、火線及横牆の下には、野砲榴彈の侵徹し能はざる帽堡、掩蓋の裡に人員彈藥を庇護し、以て攻撃部隊の視線を晦まし又各角面堡の間には或は直線或は折線形の堡壘を連ね、稍後方には重砲兵の據るべき肩牆を營み、各閉鎖堡には機關砲を据付け、是等諸堡より後方に通ずべき坑路は、悉く電光形に屈折し、日本軍の縱射に備へ、其防禦線前の田圃は秋穡の期未だ到らざるに、或は高粱の苅取らるゝあり或は當初よりして高粱の植付を禁じ以て射界を清掃す。故に之を遠望すれば殆ど防禦工事なきが如きも、近接して熟視すれば儼たる半永久築城にして、角面堡は其形狀恰も品川砲臺に外濠を添へたるものゝ如し。正面攻撃に任じたる我突撃部隊が此堡壘の前面に鏖滅したるもの、寔に自然の地利に加ふるに此人工的堡壘ありしを以てなり。

敵は城外の半永久築城を以て最後の防禦陣地となし、更に進んで其前方二里の高地脈に、第二防禦陣地を設けたり。其陣地は西、駐蹕山（九十九高地）の西北山脚より起りて、其頂界線を連ね向陽子、新立屯、方家屯、孟家房、早飯屯、徐家溝、養魚池等の高地を連環し

て、其左翼を湯河と太子河との滙流點たる石咀子の懸崖に托し、總ての頂界線は山骨露出せる石地なるにも拘はらず、深く濶き堡壘、掩堡を連ね蟻蟻尙入るべき罅隙なし。敵は尙此二線の防禦陣地を以て足れりとせず、更に亦第一線防禦陣地を前方數里の外に選定せり。其陣地は西、鞍山站附近の閔山より鞍山、下房身、大西溝を連ね浪子山、弓張嶺、寒坡嶺、紅沙嶺に亘りて黑峪（ペク）の北方に到り、左翼を太子河上流の屈曲點に託するもの是なり。

第三節　彼我の兵力

鞍山站一帶の防禦陣地に在りて、我奥軍及野津軍と相對峙せしは、南方軍總指揮官スタケルベルグ中將に屬せし西伯利第一、第二軍團及サルバエフ中將の西伯利第四軍團なるべく、浪子山附近にありて近衞師團と交戰せしは、嚮にケルレル軍團長を嶺子嶺に失ひたる新任軍團長イワノフ中將の西伯利第三軍團を首力とせる所謂東方部隊なるべく、第十七軍團の一部其左に連りたり、黑峪（ペク）の陣地にありて露軍の最左翼たりしは、楡樹林子より擊退せられたる第十軍團なるべく、レチンカンプ及マドリロフ兩將軍の師團は別働隊として、太子河上流一帶の右岸を警戒して日本軍の側面攻擊に備へ、大將クロパトキンは爾餘の總豫備隊を率ゐて遼陽城外の停車場附近に駐屯せしものゝ如し。然れども此部署たる、戰鬪初日に於ける情態に屬し、幾轉窮りなき十餘日間の繼續戰は甚だしく其配置に異同を生じて、隊伍紛糾せしが故に、八月廿八日以降の部署は、推知すると能はざれども、其兵力を合計すれば步兵百八十四大隊、騎兵百二十八中隊、鍬兵七大隊、十五珊知重砲十六門（其內鹵獲せられたるもの六十餘門をも含む）之に對する日本軍の兵力は果して幾何なりしか。黑木軍は其策動以前に於て近衞、仙臺、小倉三師團の外に、梅澤少將の近衞後備旅團、可兒大佐の後備第二十九聯隊を併合し、野津軍は姬路、廣島兩師團の外に、門司大佐の後備部隊を加へ、奥軍は名古屋、大阪、熊本の三師團、內山砲兵旅團、秋山騎兵旅團以外に隱岐少將の海南後備步兵旅團を增加せり、故に其總數は步兵百十八大隊、騎兵聯隊（外に後備一中隊）、砲兵十一聯隊（外に戰利速射砲重砲臼砲及後備砲兵各一中隊）、工兵八大隊徒步砲兵一聯隊なり。然らば其實數に於て、露軍必ずしも優勢なりしにはあらず。唯彼は守者にして、我は攻者たり、彼は機關砲ありて、我は之れ無かりしが故に自ら敵を優勢なりと計上し得べきも、實は兩々相匹敵せり。而して日本軍の優勢なざらりしが爲に、黑木軍の側面攻擊が頗る機宜を得たるに拘らず、流星光底長蛇を逸したるは、千歲の遺憾と謂ふべし。我滿洲軍各師團の編制は既に揭記を經たり。其新に增加したる部隊の主腦は左の如し。

第一軍

近衛後備歩兵旅團長　少將　梅澤道治

近衛後備歩兵第一聯隊長　中佐　三上德治
近衛後備歩兵第二聯隊長　大佐　太田貞固
後備歩兵第四聯隊長　中佐　川崎寅三
後備歩兵第三十九聯隊長(兵站守備)　大佐　平田辰造

(第二師團に隷するもの)

後備歩兵第二十九聯隊長　大佐　可兒巻琳
(第十二師團に隷するもの)
後備歩兵第十九聯隊長(兵站守備)　中佐　三輪光儀

第四軍

後備歩兵第十旅團長　大佐　門司和太郎

後備歩兵第十聯隊長　中佐　杉村愿簡
後備歩兵第二十聯隊長　中佐　田中正和

第二軍

後備歩兵第十一旅團長　少將　隱岐重節

後備歩兵第十二聯隊長　大佐　渡邊勝重
後備歩兵第廿二聯隊長　中佐　香渡範三郎
後備歩兵第四十三聯隊長　大佐　野島丹藏

騎兵第一旅團長　少將　秋山好古

騎兵第十三聯隊長　大佐　田村久非
騎兵第十四聯隊長　大佐　豐渡新作

砲兵第一旅團長　少將　內山小二郎

砲兵第十三聯隊長　大佐　佐野勝次郎
砲兵第十四聯隊長　大佐　藏田虎助
砲兵第十五聯隊長　大佐　柴五郎
徒歩砲兵聯隊長　中佐　村岡恒利

後備歩兵二十聯隊長　中佐　稻葉潤三郎
後備歩兵第四十聯隊長　中佐　田中正和

第三章　遼陽大戰(二)——大戰一般經過

第一節　一般經過

黒木軍は野津、奥兩軍に先だちて攻撃運動に着手せり。蓋し黒木軍の進路上には山峰重疊

して所在露軍の據點とすべき頂界線甚だ多く、之が爲に屢次其行動を支阻せらるゝあらば緊要なる總攻撃に際して、他の二軍と同一戰線に進出すること能はざるを慮りたればなり。故に近衛師團は八月二十三日、塔灣を進發して浪子山、大西溝に向ひつゝ鳳凰城街道を北進し、第十二師團及第二師團は、二十六日拂曉前、夜襲を以て八般嶺、寒坡嶺、弓張嶺の露軍第一防禦陣地を占領し、近衛師團は此日拂曉よりして浪子山、高峰寺附近の敵兵に對して正面攻撃を開始し、二十七日を以て第十二師團は紅沙嶺、第二師團は孫家寨南方の地區、近衛師團は浪子山、高峰寺附近の高地を占領し、敵の東方第一線防禦陣地は、茲に全く黒木軍の進略する所となれり。第十二師團の占領せし八般嶺、寒坡嶺一帶の高地は、露軍の所謂黒峪の左翼陣地にして、歐露第十軍團の左翼部隊の防守せし地點なり、此陣地の夜襲に依て占領せらるゝや、敵の浪子山、高峰寺方面を防守せる、歐露第十七軍團の第二十五師團及び西伯利第三軍團は、直に其背後に逼迫せらるゝの恐れあるが故に、紅沙嶺を守備せる第十軍團の戰列歩兵第三十一師團は極力奮闘し、銃火に次ぐに石合戰を以てし、雨中の防戰二十四時間に亘り、辛うじて西伯利第三軍團及び第三十五師團に退却の準備時間を與へたり。前敵の退却するや、第十二師團は二十八日双廟子附近より英守堡に亘る高地一帶を占領し、第二師團は湯河々孟を超えて草家峪東方の高地を進略し、近衛師團は四方

臺一帶の高地を攻陷し、二十九日近衞及第二師團は大石門嶺より孟家房南方高地に亘る高地脈に進出して、茲に始めて敵の第二防禦陣地と相對峙するの姿勢を取り、第十二師團及梅澤枝隊は、早く既に太子河を渡り右岸に進出すべき準備の爲、河川偵察に從事せり。

野津軍は八月二十五日、姬路師團を右翼とし廣島師團を左翼として、鐵道線路以東の山地を前進し、翌二十六日拂曉鞍山站の南方、甘泉堡より東方山地に亘る敵防禦陣地に對して攻擊を開始し、戰鬪終日に連り姬路師團最も苦戰せり。而も未だ陣地を奪取するを能はざりしが、敵將クロパトキンは是より先き東方黑峪の左翼陣地、我黑木軍の突破する所となりて其壓迫に堪え得ず、遂に鞍山站方面に出で、南方第一線の防禦陣地を指麾せるスタケルベルグ中將をして其首力を首山堡南方の第二線防禦陣地に引揚げしむ、茲に於てスタケルベルグ中將は、翌二十七日鞍山站退却の運動を起し、其後衞は終日盧勢を示しつゝ其夜竊に退却し去れり、二十六日夕暮より二十七日に亘りて、戰地一帶は豪雨の爲、道路泥海に變せしかば、敵は退却に際して頗る困難を極めしが、野津軍は二十六日の戰鬪頗る激烈を極め多數の死傷者を生じたると、豪雨の爲め、前進意の如くならざるとに依り、暫く其攻擊を緩め、二十七日午後夕暉雲を破つて現はるゝ頃より、敵の後衞の瀋家嶴北方の高地に據れるものに對して、攻擊運動を起し、翌二十八日再び激烈なる戰鬪を接え、其後安村

聯隊の側背夜襲、奇功を奏して敵の後衞陣地を侵略し、黑木軍の最左翼淺田旅團と連絡して包圍の姿勢を取り、二十九日更に進んで西、方家屯より東、早飯屯に亘れる敵の第二防禦陣地前に現出し、他の左右友軍に先つて午後四時頃より砲戰を開き、白暮歩兵を進めて敵陣地に逼迫せしも、戰況我に利あらず日暮るゝに及び、砲火銃聲俱に熄む。

奥軍は二十五日夜半より前進運動を起し、名古屋師團は遼陽街道に沿ひ、大阪師團は牛莊街道を熊本師團は其中間を各行進し、秋山騎兵旅團は最左翼に出でゝ軍の側面を警戒しつゝ北進し、翌曉までに西、耿家庄子より東、甘泉堡に亘るの高地線を占領し、二十七日未明、雨を冒して鞍山站の敵防禦陣地に迫れば敵の首力は既に其影を留めず、奥軍は容易に鞍山站一帶の防禦陣地を占領し翌二十八日總追擊に移り、三縱隊一齊に運動を起して、行行敵の後衞を驅逐しつゝ沙河線に進出せり。敵の後衞司令官ルトコヴスキー少將が、速射砲八門を遺棄して潰走し、之が掩護に任じたる東部西伯利第四狙擊聯隊長ラバン大佐が、少將と倶に戰死したるは、即ち此日の追擊戰にして、實に熊本師團の進路上に於て太田聯隊の奇功を奏せしなり。

八月二十日拂曉より九月一日に連りて、我滿州軍の猛烈なる總攻擊は西、首山（九十七高地）の西北脚より東、養魚池の東北高地に亘れる敵の第二防禦陣地に向つて續行せられた

り、敵は其首力を擧げて防戰し、我は野津、奥兩軍の全部及黒木軍の近衞全師團、仙臺旅團を以て攻擊し、彼我八百餘門の大砲は、間斷なく砲擊を續行して、炸雲天日を蔽ひ、砲聲殷々として大地震動せんとす、若し夫れ銃火の如きは、彼我三四十萬挺の小銃、連續發射せられたれば、彈丸の落下すると怒濤の如く、音響は谷に山に反響して、怒濤の岸を洗ふの音よりも凄まじく、數萬の將士は實に此砲烟彈雨の間に、戰死を遂げ、傷痍を蒙れり就中其戰況の悲慘なりしものを首山方面とし、早飯屯、向陽子附近の歩兵戰亦頗る凄絶なり。敵報に據れば、當時クロバトキン大將は其特別豫備隊をも發し盡し、近時歐露より搬送し來りたる第一軍團の先着部隊たる獨逸皇帝を名譽聯隊長に戴ける第八十五ウイボールグスキー聯隊、第八十六ウイリマンストランドスキー聯隊等も亦之に參加し、就中砲兵第一第六旅團の將卒は一名として負傷せざるものなかりしといふ。斯の如く激戰晝夜に連るの間に、黒木軍の一半は人馬肅々として、側面攻擊の準備をなし、第十二師團は八月三十日、木越旅團を前衞とし太子河上流を鏘刀灣より徒渉し、其右岸に進出するを待つて、黒木軍の各工兵大隊は江官屯附近に二個の軍橋を架設し、第十二師團及第二師團の岡崎旅團は、翌三十一日全部右岸に渡河し終りて敵の側背に迫り、梅澤後備混成旅團も亦三十日より行進を起して、太田聯隊の一部を臥龍村より太子河の右岸に進出せしめ、其掩護に依り

て翌三十一日未明より、旅團全部右岸に前進し、午前十一時を以て敵の監視哨を驅逐しつつ本溪湖を占領せり、此運動は敵に多大の恐怖心を生せしめ、遂に正面の激戰を此方面に移して黒英臺の大修羅場を現出するに至れり。

敵將の報告に曰く、八月三十、三十一の兩日、日本軍は大勢力を以て我前進陣地を攻擊し來り、我右翼及中央に於ける猛烈なる戰鬪は遂に接戰となり、本職(クロバトキン)をして特別豫備のみならず、我軍總豫備隊の一部をも戰線に增援するの必要に迫らしめたり、黒木軍の大兵が太子河の右岸に涉りたるとは八月三十一日に於て明に知悉せられたり、三十、三十一の兩日間、我左翼に對せし黒木軍の攻擊が我右翼及中央に對せし敵の攻擊に比しで遙に微弱なりしかば、黒木軍の首力は、我左翼を迂回し、我軍の交通線路を遮斷せんとするものなりと推定せられたり、茲に於て我首力は、前進諸陣地より本陣地に引上げ、黒木軍に對して大兵力を集中するの決心を爲し、九月一日拂曉までに、右岸に達せしめたりと。此敵將の報告は、事實の眞相を得たるものなり、若し黒木軍の一半、敵の側背に現はれざりせば、遼陽正面の激戰は更に凄愴を極めて、奥野津兩軍は苦戰惡鬪を繼續したるならむ而も敵が黒木軍を過大に誤認し、其首力を正面より側面に轉戰せしめ、自ら求めて防備あるの戰線を捨て、防備なきの地點に就きたるは、露軍大敗の一大原因となれり。之が爲に

奥軍の中央縦隊たる熊本師團は、九月一日午前二時、月下の强襲其効を奏して首山の鎖鑰地を占領し、續いて奥野津兩軍の各部隊は首山以東、早飯屯に亘るの高地線を奪略し、黒木軍の近衛師團及松永旅團は、徐家溝北方の高地より虎頭崖に亘るの敵防禦陣地を占領し茲に全く遼陽正面の第二防禦線を掌中に收めて、遼陽を眼下に瞰制するの好陣地を獲得せしかば、九月一日は形勝に據りて、疲勞せる將士に休養時間を與へ、翌二日より再び猛烈なる砲戰を開始し、近衛師團及野津軍の各砲兵は、城南の設堡陣に對し、奥軍の各砲兵及內山砲兵旅團、戰利重砲隊は西關附近の設堡陣及遼陽停車場に向つて、極力砲撃を繼續し此の夜野津軍に屬する川村師團の一部及奥軍に屬する小川師團の首力は、高粱の畑を潜ぐり進みて、敵の角面堡に向ひ夜襲を企てたり。然れども此陣地は悉く皆牢永久築城なるのみならず、鐵條網、猿穽、拒馬柵等の副防禦物、幾重にも設置せられ、壘內には十五珊知の重砲及機關砲等の据付られたれば、二回の夜襲は倶に大失敗に終りたり、翌三日も前日と同一陣形にありて砲戰せしが、此時黒木軍の迂回部隊は既に松永旅團を正面より招致して完全なる二個師團となり、此方面を守備せし軍團及新に正面より此の方面に轉戰せし敵の首力軍と、黒英臺附近に激烈なる戰鬪を開始し、之に次ぐに夜襲を以てし我れ强襲すれば彼亦逆襲し、一進一退互に肉彈を以て、高地の占領を爭ひ、遂に數倍の勁敵を擊破して、

東は大窑附近より、西は水光寺西南高地に亘るの地區一帶を占領せしかば、敵將クロパトキンは已むを得ず、退却の命令を下し、三日天明より敵の大縦隊、幾條の並行道路を取つて陸續北退せり。敵の首力既に退却を始め遼陽の本陣地を據守せる敵軍團稍沮喪の色あり奥軍の砲兵は間隔なく停車場を砲撃して上車を妨げたるに依り、敵は俄に停車場を其北方危險界外に急造して、死傷者及戰員の退却を安全ならしめ、其後衛部隊は更に勇を鼓して奥野津二軍の前進を支阻せんとを勉む。之が爲に我正面攻撃は、三日正午を過ぐるも戰況更に進捗せず、既にして一道の黒煙停車場構內より颺り猛火忽ち八方に漲り、遼陽城市は爲に一炬に葬られんとす、是れ敵が退却の決心を以て、自ら放火せるなり。奥野津兩軍の第一線歩兵は、砲兵掩護火の下に午後五時頃より再び突撃に移り、就中九井少將は自ら福知山聯隊を指揮して、直前邁往、敵の角面堡に殺倒し、殆ど聯隊の過半を犠牲にして、午後七時五十分玉皇廟東南方の敵壘を略奪したり、之を機として野津軍の全線は城の南面に、奥軍は西面に突進し、四日午前零時、城外一帶の設堡陣を占領して凱歌を揚げ、姫路師團は城の東門より、名古屋師團は南門より、遼陽城內に進入し、熊本師團は停車場に向ひ、大阪師團は城の西北方に向つて敵の退路に逼迫せり、然れども敵の殿軍は前夜既に軍橋を渡つて太子河の右岸に退くと同時に、火を鐵橋及七個の軍橋に放ちて悉く陷落せしめ、依て以て

我奥野津兩軍の追撃路を遮斷したり、雨期を去ると遠からざる太子河は濁浪滔々として岸を嚙み、徒涉望みなきに依り、兩軍は暫く追撃運動を中止して、黒木軍の消息如何を待つ。黒木軍は敵の首力を包圍して、遺孽なからしむるの目的を以て、側面攻撃を續行したるも三日拂曉黒英臺の高地を占領したる後、遙に前方を望めば西、羅大臺より臭井子を經て北方に通ずる道路上には、幾條の大縱隊連綿として原野に充滿し、其砲兵百餘門は我黒木軍に對して交互に發砲しつゝ歩武堂々として、所謂繰引法を以て退却す。其兵力少くも數個軍團を算す。我砲兵之を砲撃すれども、射距離短かくして達せず、唯敵速射砲の頻々我陣地に飛來するのみ。寡兵を以て大衆を横撃するの極めて危險なるを顧慮し、梅澤枝隊の本溪湖方面より煙臺炭坑の北方に進出するを待つて、攻撃に轉ずるの方策を取り、敢て急追せず、翌四日梅澤支隊は大迂回して三塊石山桂子山等の高地に進出し、煙臺炭坑を占領する第十二師團の右翼大隊と連繫して、殆ど敵の退路に迫りたれども、是れ亦敵の兵力我に數倍するを見て故らに追撃を中止し、一意現在の地位を固守せり。此夜第十二師團は敵の左翼部隊オルロフ師團を五頂山附近に撃破せし餘勇を鼓して、小達連溝、立林溝に向ひ驀進し、敵歩兵約二個聯隊に大損害を與へ北方に潰走せしめたり。五日近衞師團は既に養魚池方向より双廟子を經て、太子河を渡り、黒木軍の左翼を延伸して、羅大臺附近を占領せしかば、軍は茲に追撃運動を中止して前哨配備を爲し、軍司令部は遼陽に移せり。

遼陽の大戰方に酣なるに當り、優渥なる　勅語は滿洲軍に下り、遼陽の陷落するや、再び勅語あり、我將士の忠誠勇武を優賞し給ふ。　勅語及總司令官の奉答左の如し

勅　語　(一)

滿洲軍ハ、克ク諸軍ヲ糾合シ、各路齊シク防備堅固ナル敵ヲ擊退シ、終ニ之ヲ遼陽ニ壓セリ

朕其勇武ヲ嘉ス、以來日夜劇戰ヲ繼續スルヲ聞キ、深ク其勞苦ヲ懷ヒ、轉々軫念ニ堪ヘス朕ハ爾將卒ノ勇武ニ信賴ス、爾將卒其レ益々奮勵セヨ。

大山總司令官の奉答

各方面ニ於ケル頑强ノ敵ヲ擊攘シ、之ヲ遼陽附近ニ壓迫シ得タルモ、未タ全ク敵軍ヲ擊破スルニ至ラス、然ルニ今ヤ優渥ナル

勅語ヲ賜フ、臣等感激恐懼ノ至リニ堪ヘス茲ニ益々勇奮シ、陛下ノ御稜威に依り、一擧

圣勝ヲ得ンコトヲ期ス、

謹テ奉答ス。

勅語（二）

遼陽ハ敵ノ兵略要地ト爲シ、夙ニ防備ヲ嚴ニシ、軍資ヲ集積シ全力ヲ竭シ死守セシ所、今滿洲軍萬死ヲ冒シ百艱ヲ排シ、奮戰激鬪數晝夜ヲ連ヌ、遂ニ之ヲ拔ク、朕深ク其功烈ノ偉大ナルヲ嘉ス

惟フニ其晝策愼重ニシテ果斷、其運動整齊ニシテ敏活、而シテ爾將卒之ヲ貫クニ忠誠勇武ヲ以テスルニ非サレハ、焉ソ能ク此ニ至ルヲ得ン、抑々作戰ノ前途ハ尙ホ遼遠ナリ、爾將卒其レ自愛堅忍更ニ全局ノ大成ヲ期セヨ。

大山總司令官の奉答

最モ堅固ニ防禦工事ヲ施シ、我軍ヲ迎ヘテ決戰ヲ企圖セントシタル敵ノ陣地ヲ攻略シ、遂ニ遼陽ヲ占領シ得タルハ、一ニ

陛下ノ御稜威ニ依ル、然ルニ優渥ナル勅語ヲ賜ハリ、臣等感激ノ至ニ堪ヘス、爾今益々奮勵シ　聖旨ヲ體シ、誓テ終局ノ大成ヲ期スヘク

謹テ奉答ス

第二節　大戰の結果

遼陽の大戰を通じて我の蒙りたる損害は黒木軍に在りて死傷將校二百三十四名、下士卒五千九百三名、野津軍第十師團は將校下士卒を合して、戰死九百十五名、負傷三千六百七十八名、第五師團は之に比して約三分の一の損害を負へり。又奥軍の犧牲は死傷總數七千六百八十一名を算す。而して之に對して敵の損害は總計二萬五千餘と推算せらる。又各軍に於て鹵獲せし者は左の如し。

黒木軍の鹵獲品は速射砲々車一中隊分(八門)、小銃八百挺、砲彈三千發、小銃彈六十萬發、馬四十頭、石炭四十四萬八千斤、輕便鐵道「レール」六千二百五十米突、鐵寢臺四百二十四臺、被覆電信線三十基米突、セメント百十六樽、鐵道機關車釜三臺、無蓋貨車七輛、油粕二千石、ヂャン十一樽、大麥一石、麥粉四十一袋等なり。

野津軍の鹵獲したるものは小銃四百九十挺、同彈藥三十七萬八千八百發、砲彈千百六十四顆、彈藥車二輛、圓匙六千三百挺、十字鍬三千六百四十挺、手斧四百六十五挺、軍刀九十振、拳銃八十挺、回光通信機三臺、反射鏡三面、携帶電話機六箱、牛肉罐詰一萬八千九百十五個等を其重なるものとす。

奥軍の戰利品は、小銃二千二百八十八挺、砲八門、彈藥車百二十七輛、砲彈五千八百九十九、斧二千百五、米二千石、馬糧一萬三千六百二十石、蕎麥粉一千石、馬三十頭にして、新市街の火災未だ熾甚ならざるに先だち、之

を占領し得たる結果は、露西亞家屋三百五十三棟、倉庫二百十四棟を殘存する事を得て、直に之を兵舍及び病院に使用するを得たり。

遼陽の大戰、我滿洲軍の兵力足らざりしに因り、露軍に向つて再び起つこと能はざるまでに大打撃を與ふること能はず、爲に望蜀の情、戰捷の價値意外に鮮かりしを歎ずる者あり。然れども獨逸人は之を以てセダン若くはライプチツヒの戰役に比し、英人は之を以てウオーターローの成功に比し、我が日本に好意を表するものと然らざるものとに拘はらず、萬口一齊に其大成功を賞讃せり。想ふに日本軍人は北淸事變に於ける露軍の動作に顧み、鴨綠江以來各所の戰鬪に徵して、或は遼陽會戰の勝利を豫期せしものあらむも、世界の軍事批評家は、一人として其成功を疑はざるものなく、海戰に於ては仁川、旅順に機先を制し奇襲、其効を奏して東洋の海權日本海軍に歸したりと雖も、由來世界の勁を以て稱せらるゝ露國の陸軍が、眞面目に決勝戰をなすの秋に於ては、日本の陸軍は到底其匹儔にあらずして、猶ボーア人が初度の戰鬪に勇敢なりしも、遂に英軍の彈壓する所となりて、雌伏せしが如き結果に終るべきを信じたり。

更に淸韓國民の意向を觀るに、彼等官紳の多くは謂へらく、小日本如何か能く大俄國に敵すべけんや、初度の戰勝は未だ以て大局の勝利を左右すべきものにあらず、露軍一たび犬

擧南進せば、日本軍は忽ち其蹂躙する所とならむのみと、故に既に日韓合同條約を締結せる朝鮮國の官僚は、窃に款を露國に通じ、露軍の爲めに、出師する義軍たるを認むるにも拘はらず、駐淸露廷は、日本が淸國の封土保全の爲めに、路を咸鏡道に假さんとし、北京朝國公使若くは露淸銀行員等の所說に耳を假し、動もすれば我を不利の情況に陷れんとし、就中東三省に於ける淸國官吏の如きは、利に啗されて殆ど露軍の爪牙たらんとせり。故に遼陽決戰以前に於ては、我陸軍の價値は獨り歐米人士に重んぜられざりしのみならず、淸韓人士にすら輕視せられしなり。故に日本軍若し失敗せんか、彼等は皆螳螂の斧を以て龍車に向ふものと爲し、失敗を以て自然の結果と爲さん。則ち鷄林八道は復た日本の勢力圈內に在らず、好意を我に表するの中立國、提挈の手を緩めむ、外債固より募るべからず、故に日本軍は、假令遼陽戰に於て砲一門、銃一挺の鹵獲なかりしとするも、無形の利益は十分に獲得して餘りありと謂ふべし。

露軍は如何、彼は正々堂々として豫定の退却をなせりと辯疏すれども、有形上に於て遼陽の策源地を失ひ、大砲十六門、小銃三千五百餘挺、彈藥車百二十九輛、砲彈一萬餘顆を鹵獲せられ、煙臺以南の鐵道、諸建築物、輕便鐵道、煙臺炭坑等を放棄し、二萬五千餘の將士を失ひ、無形上に於て國威を失墜し、軍政の不備を暴露し、內訌を助長し、淸韓官民の信

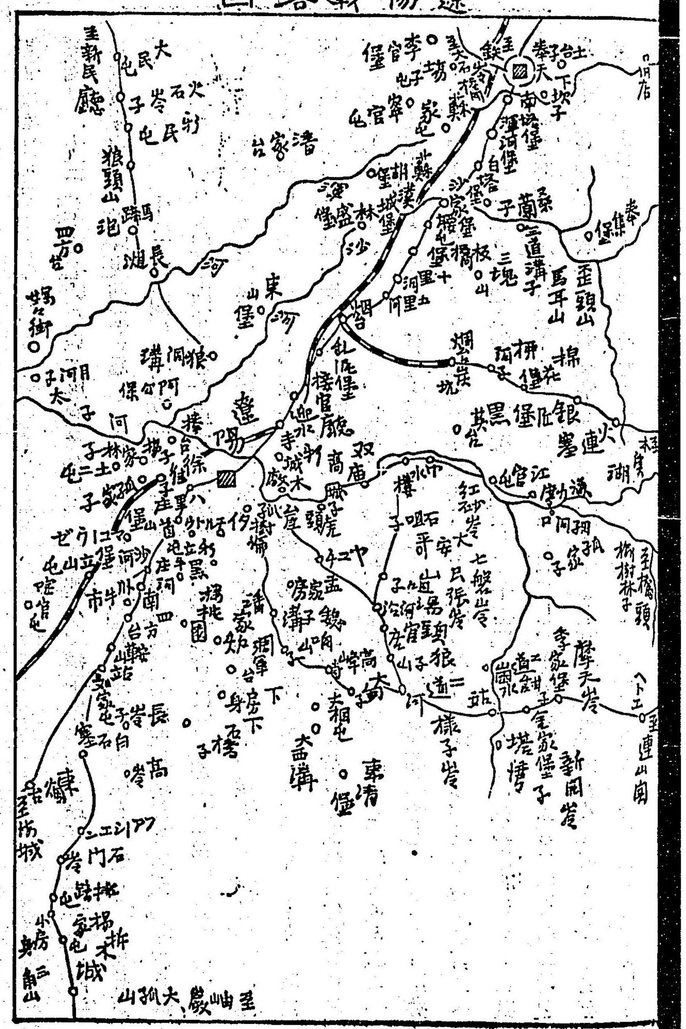
賴を失ひ、世界列國の同情を減じ、露都に於ては悲痛の景巷衢に滿ち、慟哭の聲宮禁より漏れたり。遼陽の一戰、効果決して大ならずと謂ふべからず。

第四章　遼陽大戰(三)——黒木軍戰況

第一節　近衛師團戰況

一、黒木軍左縱隊

近衛師團は、鳳凰城街道を前進して、敵の首力を浪子山（敵の中央縱隊の防禦陣地にして所謂亮甲山と稱する地）方向に牽制し、成し得べくんば野津軍の右翼河村師團と連絡すべしとの命令を受けて、八月二十三日宿營地塔灣附近を進發せり。是より先き雨期は既に過ぎて、所謂滿洲日和となり、森林に乏しき戰地の河川は水量俄に減じて、軍の行動を阻碍せざるまでに淺流に復せしかば、我滿洲軍總司令部は八月二十六日を以て、全軍行動を起すの時機と定め、奥野津兩軍は同二十八日を以て鞍山站附近の敵防禦陣地を占領すべきに依り、黒木軍も亦其機に後れず、敵の第一線防禦陣地を占領すべしとの豫令あり。茲に於て黒木大將は、八月二十五日の夜間を以て大夜襲を行ひ、翌廿六日拂曉までに敵の左翼陣地を奪略せんと欲し、彼の視線を鳳凰城街道に誘致せんが爲に、故らに先づ近衛師團を前



進せしめたり。

師團は二十三日午後七時を以て塔灣を發し、月を踏んで樣子嶺の嶮を過ぎり、牛蹄峪附近に其夜を徹し、翌昧爽前進を起し、貨郎溝を占領し、行々小部隊の敵を擊攘して、黃昏黃崗子に達し、二十五日朝問鳩屯西方高地一帶を占領し、敵は其前進陣地たる大西溝北方高地より大甸子に亘る線を固守するを以て之と對戰し、二十七日に亘れる大激戰の後之を拔き、追擊して瓦子溝方面に達し、此に第二防禦線に達す。敵は四方臺小嶺子より大安平線に停止して我に對抗せんとせしも、其餘地なく、終に第二防禦陣地を捨て、西北に走り、我は即ち追擊して四方臺小嶺子を占領す。此追擊中、特に二十六日に於ける高峰寺の激戰に於ては苦戰其極に達したる者あり、此苦戰の最激甚なりしは第一聯隊にして優勢なる敵の一兵團は凡五聯隊より成り、有吉大隊を包圍したるのみならず、各部面皆之に劣らざる敵勢にして、加ふるに有利なる陣に據れる砲兵は其六十門の火力を猛注し、其不利殆ど言ふべからざる狀況に在り。此危險なる狀況は繼續して午後四時に亘り、彼我の砲戰銃火方に其極に達せし時、沛然たる猛雨に加ふるに激雷を以てし、電光震雷に交ふるに砲火の轟盪を以てす。勇敢なる我兵は吶喊又吶喊、勇奮突擊せしも其効なく、翌廿八日に至り漸く之を拔けり、已にして敵は第三線たる孟家房西方ヤユチ北方高地の險要堡壘に據り、之を固守

せんとす、師團は高地一帶頭崖に亘る線を占領せざるべからず。中央西縱隊は我右翼に連繫し石咀子西方高地より吊水溝南方高地を占領し、右翼井上縱隊は更に其右方に於て太子河を渡過せんとす。

二、遼陽の正面攻擊

八月三十日は我滿洲軍が全力を擧げて敵の第二防禦陣地に迫りたる總攻擊の第一日なり、黑木軍に於て此正面攻擊に參加したるは近衞師團、松永旅團(步兵第三旅團)及後備步兵第二十九聯隊にして、右は石咀子高地より左は孟家房南方の高地に展進し、近く中央軍の右翼と連繫し終日砲戰を試みて、先づ敵の心膽を奪ひ、午後に至りては砲火の掩護に依り、降雨を冒して步兵の谷底を經て敵陣地の高地脚に向ひ突進するあり、東天漸く暗くして暮色將に天地を呑まんとするの頃には砲聲銃聲、四方に起り、殷雷奔り朱電馳せ壯音天を破り駭響地を劈き、速度其の極に達して彼我五十萬の戰士悉く皆耳を聾せんとす、就中最も威力を逞ふしたるは、敵が浦鹽要塞より搬送せしと傳ふる十五珊知巨砲と、我榴彈の破裂力なり、十五珊知敵彈の我陣地に落つるや、將士轟に殪れ、我榴彈の敵地に達するや、火山立ろに現ず、薄暮突擊に移れば、敵は逆襲し來り、夜戰は月出に及びて頗る凄慘を極む。曩日鴨綠江南山の劇戰共に較するに足らず、昔時セダン、ワートルローの壯觀も、亦恐らくは

此以上に及ぶ能はざらん。

此時に於ける正面攻撃の總指揮官は、近衛師團長長谷川大將なりしかば、同司令部は此日未明より徐家溝南方の高地に進み、隈元砲兵聯隊の放列陣地に近接して觀戰せり、此日の戰鬪には砲兵の威力を重んじ、前夜既に所在の砲兵陣地を選定し、中央陣地（隈元砲兵聯隊）の砲兵は、曉霧を破つて其第一砲を敵陣に送れり、昨日は應砲せざりし敵も、今日は直ちに答砲せり、茲に於てか砲火先づ交換せられ、左翼淺田旅團の藤澤砲兵大隊亦之に續いて午前七時頃より、孟家房北方の高地を砲撃し、九時四十分頃よりは敵の砲火俄然增加すると同時に、我が砲兵の應戰も亦頗る猛烈を加へたり。此時に際して奥野津兩軍の各砲兵は、黒木軍の砲兵よりも一層猛烈に發砲せしかば、炸煙は滿天に彌蔓して、遠きは雪花の風に飄るが如く、近きは鱗雲の空に走るが如し。渡邊旅團は、飯田聯隊を右翼とし小原聯隊を左翼として夜間谷底に下り、曉來仰いで敵陣地の攻撃を開始し、約一千米突を隔てゝ先づ緩徐なる射撃を行ふ、既にして砲戰は次第に猛烈を加へ、正午に至りては突進の時機漸く熟するを察し、小原聯隊先づ前進運動を起し、飯田聯隊之と連繫して、其右方に前進す、此時淺田旅團の第一線たる深谷聯隊も、亦中央縱隊の右翼部隊と其戰線を連繫しつゝ、谷地の左方に現はれ各歩兵の戰線は蜿蜒數里に亘りて勇進す、之を見るや敵は銃火を盛に

して我を猛射し、極力我が歩兵の前進を阻害せんとす、我兵屈せず益々猛進して、溪流を渉り、敵陣地の山脚に出で、斜面を攀ぢて突進せんとす、敵兵亦迎へて逆襲に轉じ、山上山下相對して奮鬪す、地の利は總て敵にあり、我軍死傷算なく、須臾にして戰鬪力の過半を減殺せらる、茲に於てか小原聯隊の豫備隊たる松前大隊及び可兒後備隊の牛渡横田兩大隊は、順次に戰線に增援し、突進又突進、遂に山脚を攀躋して敵の凸角堡壘を奪略せり、然るに此陣地は敵の本防禦線にあらずして、斜面の中腹に位する一低壘たりしかば我は依然敵の瞰射する所となり、之が爲に可兒大佐は、鼻梁を射貫せられ、松前牛渡横田の三大隊長、亦皆傷痍を蒙りたり、嬴輸將に決せんとするの刹那戰場は早く既に暮雲の鎖す所となれり。日既に暮るゝや、敵は果然夜襲し來り、閃々たる光彈輝々たる探照燈は、銃火と共に丘を下つて谷底に進む、方に是れ千條の火龍、天より降り、萬頭の金蛇、地より騰るの觀あり。淺田旅團の方面にては、深谷聯隊の第二大隊迎へ撃つて之を屠殺し、渡邊旅團の方面にては、小原可兒兩聯隊之を山腹に要して撃退し得たるも、長谷川大將は地の利に鑑み、死傷の多きに顧み、一時高地線まで背進すべしとの命令を發せり。

三十日の戰況は、彼我交殺の姿なりしかば、翌三十一日正面攻撃に從事せし諸部隊は、終日休養の姿勢にありて敵の逆襲に備へたりしも、敵も亦輕進せず夜に入りて砲火全く熄む。

翌九月一日、近衛師團及松永旅團の島田聯隊は、曉色未だ鮮明ならざるに先だち、攻勢を取つて堂々攻進せしが敵は數砲を放つて我を威嚇し、直に其影を隱せり、戰鬪斥候は拂曉殘敵を驅逐して、早く既に我日章旗を前面一帶の高地に飜へせり。

師團は翌二日、其左翼高地の一部を中央軍の右翼旅團に讓りて、右水峪より左高驪葱に亘るの間に展進し、太子河左岸の敵兵に對して砲戰せり、翌三日も亦同位置にありて砲戰せしが、初更を過ぎて軍命令は下れり曰く、近衛師團は其一部を現在の地點に留め、主力を以て江官屯に轉進し、軍の首力に合すべしと、依て長谷川大將は淺田旅團及び砲兵四中隊工兵全部を率ゐて、四日午前一時半江官屯に向ひ、渡邊旅團は砲兵中隊と共に太子河左岸に止まりしが、黎明遼陽の城市我が友軍に依て占領せられたりと聞くや、殘餘の部隊を擧げて双廟子に至り、爰處に師團の主力と合して翌五日小倉工兵の架設せし軍橋を渡り、殘敵を驅逐して羅大臺を占領し、其前哨を張臺子洪家屯に進めて爾後此附近に滯陣せり。

第二節　第十二師團及第二師團戰況

一、紅沙嶺の激戰

黒木軍の右縱隊第十二師團の夜襲すべき敵陣地は、廣袤四里に亘れる長き山脈の頂界線なり、其の山嶺は北より數へて北八般嶺、乾立山（我が軍の命名せし峻山にして山形乾乙高

く雲表に聳ゆるを以て此名あり）大小寒坡嶺、七八般嶺の數峰とす紅沙嶺とは即ち北八般嶺の一脈中、遠く敵方に延びて最高地點となれる一部を指す。

第十二師團は木越少將右翼枝隊を指揮し、今村大佐（故參聯隊長、佐々木少將に代る）其左翼隊を指揮し、廿五日午後七時を以て運動を起し、八時三十分木越枝隊已に寒坡嶺の高地防禦線を過ぎ、其右翼として大村聯隊（平井大佐）を北八盤嶺に向はしめ、左翼として福岡聯隊（原田大佐）を乾立山に向はしむ。午後十時藍河を徒涉し、敵の監視哨を驅攘して前進す。又相浦騎兵聯隊は其主力を以て井上縱隊の右側を警戒せん爲め藍河口に出で、以て太子河右岸の敵と相對す。北八盤嶺に向ひたる大村聯隊は二十六日午前一時枚を啣み其嶮を攀づ。敵狼狽守を棄てて去る。聯隊已に此嶮を占む、是に於て直に豐田大隊を進めて其支脈摺鉢山を占領す。敵は其西側北滯に聲急集合を行ひ、約一個聯隊の兵力を以て逆進し來り、激烈なる衝突は其の最高地に起り、敵終に敗走す。若し此險要を拔けば、紅沙嶺に亘れる重要なる敵の防禦陣地は其用を爲さゝるに至るべし。故に大隊は直に奮進せり。斷岩削壁、一夫關に當る、萬夫過るべからず。時に午前一時四十分なり。敵殊死して之を守る。彼は岩上に在り。我は岩下に在り。攀登敵を攫ふに由なく、空しく苦鬪を繼續して午前五時に及ぶ。偶高地北方に一登口あるを發見し、一隊奮然前進すると未だ十歩に滿たず、苦戰の狀況は

更に幾倍し來れり。大隊今や岩上の敵を擊つに途なく、岩角に潛み、以て僅に敵火を避く。而も我より彼に加ふべき術なし、身を挺して一步を進めば又彈に應じて斃るゝの外なし。是に於て岩片を投じて相擲ち、次々に格鬪を以てす。喑啞叱咤、碧血岩を染め腥氣天に漲る。午前七時卅分に至り彼我共に疲憊の極に達し、自然に戰鬪は休止せられたり。午後三時、大隊は再び攻擊を起し、敵は銃劍突擊を以て之れに應ず、天佑は此一刹那に下れり、一兵又一兵擧ち又擊ち、劍光電を飛ばし、迸血霧を生ず、奮鬪廿分時、終に此地點を占領す。是に於て聯隊は更に紅沙嶺の砲兵に薄らんとす。敵兵約二個中隊前面の岩崖山に據り、彈雨を猛注して、我の前進を拒止せんとするのみならず、地形前進に便ならず、而れども斷然其一部隊を以て、其前面より紅沙嶺に薄れり。又本隊の砲兵部隊は雨溝高地に在り、猛烈なる砲擊を受けしも、敵は腹背を搏たるゝを畏れ、終に砲を棄てゝ走る、唯其砲兵の抵抗頑強なるが爲め之を奪ふに至らず。又羽生大隊は斜面より之を擊攘せんとす、是に至り聯隊の各隊今や猛然として前進せんとする一刹那、抹雲靄々、猛雨崩然として下り、激雷之に加はり、彼我共に戰ふに由なく、空しく戰鬪隊形のまゝ紅沙嶺を睥睨して夜を徹す。

左翼たる福岡聯隊は、廿六日午前五時四十分、屹立山に向ひ、僅少なる敵の抵抗を擊破して之を占領す、更に屏風山の前面に橫るあり、斷岩峭立削るが如く眞に屏風山の名に背かず、敵は此嶮に據り銃火を猛射して前進を拒止す、翌午前四時に至るも、攻擊毫も進捗せず、午後四時右翼たる大村聯隊の紅沙嶺攻擊に連繫し、攻擊前進せんとせしも、又猛雨激雷に妨げられて果さず。

師團の左翼今村枝隊は廿五日午後八時三十分を以て、運動を起し、李皮峪を發して前進し、其右翼隊として椙原聯隊（太田大隊を缺き、騎兵一部隊工兵一小隊を含む）寒坡嶺に向はしめ、其左翼隊として竹下聯隊（第三大隊は豫備隊なり騎兵二小隊工兵一小隊を含む）を以て七盤嶺及八盤嶺に向はしむ。二十六日午前零時三十分椙原聯隊の稻村大隊は、本街道北側に於ける三角山に至る、又田上大隊は已に小寒坡に至る、月は江漢に澄めり、一隊蕭々として語らず、馬は枚を啣む、而かも拍然一聲高粱を叩きて我頭上に鳴る、我は未だ之れに應射せざるなり。我は唯進んで敵に接近するにあり、俄然として喊聲は地を劈きて湧き、劍光月に映じて閃けり、敵は勇敢なるも頽勢已に成る、叱咤數合小寒坡嶺は已に大隊の手に歸せり、勢破竹の如く、進んで大寒坡嶺を拔かんとす、又敵の抵抗兵力共に優強、苦戰方に酣なり、急を聞きたる本隊は戶澤大隊を急行せしむ、椙原聯隊の苦戰味爽に達し、午前六時增援隊の未だ達せざるに先だち、奮鬪して終に之れを奪取せり。是に於て諸隊追擊に移り、增援隊は本街道を田上隊は本道南面を稻村隊は本道北側を急進せり、田上大隊は

三家子附近の線を占領せり。

又八盤嶺及七盤嶺に向ひたる竹下聯隊も亦枚を啣みて前進し、八盤嶺に急撃突進し、劍尖相搏ち、紫電白電、叱咤聲上に閃き、拳搏肉闘、陸離血中に躍る。敵遂に支ふる能はず、敗れて谷地に陷り、殺傷算なし。走るを追ふて終に七盤山の峻を奪取す。殆ど是れ椙原聯隊の追撃前進と同時なり。

敵は一旦破れて大小寒坡嶺の峻を失ひたるも、之を奪回せんとを計り、午前十一時頃に及び、安平方面に其勢力を增加せり。是に於て豫備隊たる中川大隊は第一線に加はれり。此時優勢となりし三十七門の敵砲は安平附近の高地より大寒坡嶺の陣地を猛射す。而して我は之に應ずるに山砲十六門あるのみ。是に於て屏風山に於ける原田聯隊の一部は馳せて之に加はり、奮戰最も力む。時恰も猛雨激雷、戰闘爲に自ら休止せり。

屏風山の地勢たる、大部隊の兵を用ふるに便ならざるを以て、敵亦屹立山より屏風山系に亘れる地脈を以て其防禦地點と爲せるもの丶如し。屏風山占領を目標とせる大村聯隊は石橋小隊に命じ、其鞍部稜線を攻め、午前八時半を以て其一部を占領し、更に突進せんとせしも其側面は三家子北方の高地よりする敵火に制せられ、其方向を變せざるべからざるに至り、豫備隊の一個中隊は其東北側面より猛烈なる攻撃を行ひ、終に午後三時を以て屏風山全部を占領することを得たり。

此日に於ける左翼前面の敵は優勢にして、午後三時に至るまで我軍前進の機を得ず、既にして敵漸く退却の色あり。全左翼面乃ち攻撃の活動に移り、山家子北方頂點に於ける敵は頑強なる抵抗を試みしも、終に支ふる能はず、屹立山より山家子北方高地に亘る一帶全く我占領に歸し、遼陽右側背の險要已に我手中に在り。

是に於て二十八日右翼隊は紅沙嶺より左翼隊は黑峪北方一帶の山地を占領し、同隊は午後四時五十分を以てコチヤゴウ間一帶の地區を占領せり。時に暮色一望、更に前進に可なり。是に於て右翼隊は進で紅官屯、吊水樓線を占領し、左翼隊も亦進で下手州、双廟子線を占領し、太子河左岸に進出せり。遼陽城既に指呼の間に在り。敵は太子河對岸標高一三一及一五一の高地の堅壘に據り、軍容甚だ壯なり。第二師團は此夜尙石門嶺を占領するに至らす。

此夜より翌二十九日に亘れる敵情は沙坎の下流太子河の右岸に沿ひ、監視哨を置き其優大なる部隊は官屯、房身、水光寺附近に位置し、防禦工事を水光寺下麥窩線に施しつゝあり水光寺西方高地、太子堡北方高地に大部隊の砲兵ありて我一線を捜射す。又攻撃前進路に於ける太子河流の徒渉點は降雨の爲め水量を增大し、爲に其適當なるは鍊刀澗あるのみ。

此夜大石門嶺線は第二師團の手中に歸す。

卅日夜半運動を起し、太子河を渡り、敵の背後を脅威せんとす。前衞として木越枝隊は其の全部を擧げ、島村枝隊（渡邊大佐に代る）を本隊とし、爾餘の枝隊は中央隊として卅一日黎明全く太子河を徒涉し、第二師團の岡崎枝隊及砲兵各部隊も亦踵で到る。本隊の渡河を掩護せん爲め、木越枝隊は高力寨南方高地に前進し、西方高地の敵と相對す。敵は黑英臺西方高地に其砲兵を位置せしめ、以て砲火を送る。是に於て高力寨附近に開進すべき本隊及中央縱隊を掩護せん爲め前衞枝隊は更に前進して官屯西方より力子北方に亘る線を占領せり。右翼軍の太子河を渡過し、直に遼陽の側背に迫るの勢は露軍をして震憾せしめしものならん。强大なる縱隊は遼陽より我右翼面に行進し來れり。而して近衞、第二兩師團前面の敵は退却し、更に第十二師團の前面に增勢し來り、其增大殆ど數倍に達せんとす。此夜敵の一部隊は我前哨を夜襲して敗退す。我山砲隊は官屯西北方高地に在りて黑英臺の敵砲兵と砲火を交換す。而して島村枝隊は正に力子查溝線を占領し、第二師團の岡崎枝隊は第十二師團の東面より太子河の右岸に沿へる線を占領し、步兵大隊を以て本溪湖方面に備へんが爲め、沙坎より燕巢東北方山地線を占領す。又第二師團掩護の爲め二個中隊を島村枝隊より一個大隊を木越枝隊より派遣し英守堡より双廟子に亘る線を警戒せしむ。是れ第二師團の

野砲部隊未だ到達せざるが爲なり。

二、黑英臺附近の激戰

太子河右岸に起伏せる高地を西方より列擧すれば、新城の東方に聳ゆる百五十一の高地は西、遼陽を望み南、湯河の河盂を瞰制し東、太子河の流域を一眸に集めて、群山中最も高き要地なり、此高地東に流れて漸く低く、再び崛起して東北に連るものを百三十一の高地となす、此兩丘相對峙して自然に遼陽側面の垣墻を形成するが故に、露軍は夙に此高地に防禦工事を營みたり、百三十一高地の東北脚に低く隧起して瘤の如くなるものは、則ち所謂水光寺西方の高地にして、敵公報にシーカンタン若くはスイカンツンと命名する旋回運動の中軸點なり、山脈一たび地平線に沒して、再崛起する標高二十米突內外の饅頭形をなせる獨立丘は、我の所謂黑英臺の高地にして、岡崎旅團が連日連夜敵の首力と交互に强襲夜襲を續行したる激戰場なり。此高地よりして以東は坦々たる畑地にして、東北五頂山と相對し東南燕巢城と相望む、以上を太子河右岸の高地脈として、別に一脈の低丘其北方に連亘して相並行する者を求雨山尖頂山及び東京陵とす、遼陽より迎水寺、東京陵、水光寺を經て官屯に通ずる道路は此兩丘脈の峽間にあり。地形は實に斯の如くなるが故に所謂水光寺黑英臺の二高地なる者は、一小丘陵なれども兵略上勝敗を決すべき要樞の地たるなり。

九月一日午前四時標高一三一高地に對しては第二師團之に薄る。敵砲兵は黑英臺及水光寺に據りて其威力を振ひ、砲火を猛注す。又茨兒山附近より强大なる敵の一大部隊現出し來り、第十二師團方面は其側背を搏たるゝ塲合と爲れり。是に於て縱隊の左翼は轉面して之に對し、進んで五頂山を占領す。然れども更に一步を進むるの餘地を存せず。黑英臺の占領未だ其目的を達するに至らず。之を拔かざれば前進の障壁を撤する能はざるに齊し、第二師團岡崎枝隊の猛擊に連繫したる原田聯隊今や夜襲を決行して以て其目的を達せんとす。星斗闌干、夜色悽愴たり。敵は何れの處ぞ、已に近し、銃火暗を破り、敵を距る僅に五十米突のみ。彼亦奮勇相格す。劍尖相摩して電を飛し、叱咤交錯して山を撼かす。伏屍累々流血滾々、黑英臺は主として岡崎枝隊奮鬪の下、火彈血雨の中に我手に歸す。岡崎山の名萬古太子河畔に高かるべし、時に午後十二時なり。

一三一高地の敵は其側背の危懼の爲め、益其兵力を第十二師團前面に增大し、羅大臺より達連溝に連り、野砲七十門より成れる大部隊は第二、第十二兩師團を猛射し、軍の正面及右側は敵砲の猛射面となりたるのみならず、茨兒山には更に六門の砲口を齊へて右翼の側背を猛擊するあり。又太子溝北方高地に於ける八門の重砲は第二師團の左側を砲擊し、狀況頗る危險なり。五頂山より黑英臺に位置せる我砲兵部隊は奮然之に對戰せしも其威力振はず、苦戰刻を追ふて加はるのみ。黑英臺正面に在りては一步も前進の機を生ぜず、是に於て島村枝隊は決然先づ右翼側背の患害たる茨兒山の敵を擊攘するに決し、志波大隊と共に之を攻擊す。敵は其險を恃み、其砲六門の威力と七個大隊の步兵、助くるに三千の騎兵を以てし頑然之に據守す。相原聯隊の倉富中隊は慫然突進し、中隊長先づ斃るゝも、一兵又一兵、奮然納に之を拿ふ、敵大に潰敗し、死傷算なし。志波大隊は急追擊に移り、烟臺炭坑及停車塲を占領す。右翼隊の狀況此の如きに方り、左翼隊も亦攻進し、北達連溝に達す。然れども七十餘門の敵砲は其火力を集注して一步も前進せしめず。

天方に黃昏、第二師團方面に在りては敵砲七十門其威力を黑英臺の陣地に集注し、死傷益加はり、岡崎枝隊の危急將に頂點に達せんとするに際し、此狀況を看取したる敵は陣地を奪回せんと欲し、正面より約一個聯隊、左側より約一個大隊、猛然逆襲し來る。砲火の集注既に其危險の頂點に達す。加ふるに此步兵の襲擊と戰はざるべからず。敵は步一步肉薄し來る。我全滅せられんか、彼を屠殺すべきか、最後の瞬間は已に逼れり。敵は已に耳目相接す、猛然たる我銃丸は虛彈なく、敵算を亂して駢殪す。惡戰苦鬪敵終に敗退す。餘す所は伏屍の累々たるあるのみ。我死傷亦實に夥し。黑英臺の爭奪は實に遼陽戰紀中の一大血痕なり。

軍は各縱隊を前進せしめ、第二師團は先づ水光寺西方高地を占領し、羅大臺に前進せんとし、第十二師團は第二師團の一三一高地奪取と共に前進して三道嶺を占領せんとし、近衞師團を以て軍の總豫備隊と爲す。第二師團は連日の攻擊に於て其目的を達する能はざる一三一高地に向ひ非常の決心を以て前進せり。敵は連日に亘れる猛擊に堪へず、既に退却したるを以て、前日の慘況に反し、直に之を占領せり。

三、追擊戰

遼陽城外の本防禦陣地及城市は正面攻擊に從事せし奥、野津二軍に依りて四日天明までに占領せられ、太子河左岸亦露兵の隻影を留めざるに至りしも、黑木軍の前面に在りては露軍の首力尙羅大臺附近に充溢し、動もすれば掉尾の强襲を試みんとするの勢を示せるを以て、追擊運動は四日夜に入りて始めて着手せらる。

軍の最左翼に出でたる松永旅團は、晝間百三十一高地を奪略したるの餘勇を驅て、右翼岡崎旅團と相連繫し、夜間紅土崖以西、羅大臺以東の敵兵に對して三道嶺方向に前進し、近衞師團は架橋工事其他の事情に妨げられ、翌曉太子河を渡りて羅大臺に向ひ、松永旅團の左翼に延伸せり。故に中央縱隊（第二師團）及左縱隊（近衞師團）の前面に於ては、何等の快戰無く、唯仙臺砲兵が翌曉四千餘米突を隔てゝ、敵の密集部隊を猛射したるに止まれり、是れ一は中央縱隊が追擊行動の旋回軸となりたるに依つて、故らに其前進を控へたるものなるべし。之に反して右縱隊（第十二師團）及び梅澤枝隊は、次第に旋回軸に遠かるに從つて、行動の範圍を大にし、敵の退却部隊と接觸して頗る壯快なる追擊戰を開始せり、乃ち第十二師團は小達連溝立林溝を經て、英城子呂方寺に向ひ、梅澤枝隊は三塊石山桂子山を經て、煙臺停車場の東北方高地に進出し、東清鐵道と並行する戰線を連ねて今方に退却しつゝある露軍の側面より掩護せんとす。

四日午後十時第十二師團は、左右兩縱隊となりて前進す、右縱隊は步兵第四十七聯隊を前衞とし、步兵第十四聯隊近衞後備步兵第二聯隊を首力として大窖より小達連溝に向ひ、島村少將之が指揮官たり、左縱隊は即ち木越旅團にして、五頂山黑英臺の中間より立林溝に向ふ、此夜木越旅團の方面にありては容易に少敵を驅逐し得て立林溝を占領したるも、島村旅團は堅固なる敵の防禦陣地前に進出して、奮鬪半夜に連れり。始め島村旅團は梧原聯隊を先頭に進め、闇中英城子に向つて前進せしに、前衞既に小達連溝の村落を過ぎ、炭坑鐵道の堤防に登り、線路を傳ふて西行するや忽ち梧原聯隊の前面に敵あり、銃火を猛射す。我之に應射せず、直に全隊突擊を以て之を破る。右翼今村聯隊は豫定の如く小達連溝を占領す。時恰も左翼に銃聲起れり。依て馳せて之に加はらんとす。敵は反て其右側に在り。一瞬時

にして我は轉向せり。時に敵の一隊又左側輜重行李面に突進し來る。敵は我本隊を背後として行動せるなり。我は敵の右翼に進入せるなり。四顧暗澹、銃聲交錯、混戰方さに酣なり。島村將軍縱橫馳驅し、三たび其馬を代ゆるに至る。今村聯隊長又其隊を率ゐて突進す。時恰も朧月暗を破り。彼我共に其位置の危險なるを知れり。敵は既に動搖の色あり、我何ぞ機會を逸せん。奮進突擊、敵終に潰敗して逃る。敵屍算し來れば約四百餘、之を第十二師團遼陽最後の成効と爲す。

第五章　遼陽大戰(四)——野津軍戰況

第一節　第十師團戰況

一、鞍山站の防備

鞍山站は遼陽南面の重關なり、一帶の丘陵は臥牛の如く曠野に橫りて東方山地に連り、西南二面は悉く皆其瞰制下にあり、故に鞍山、閻山等の諸高地を連綴して之に防禦工事を施さば、數倍の敵に對し防戰せんと、必ずしも不可能の事にあらず、淸祖の都を遼陽に奠むるや、爰處に關門を設けて明兵の襲來に備へ、今も猶谷盛まりて溪流奔注する所古關の址あり兵略上此地の要害たるは、今も猶古の如く、露軍亦之を知りてスタケルベルグの軍團を

此地に進め、依て以て南來の日本軍を防止せしめたり。

スタケルベルグ中將の率ゆる南方軍は、西伯利第一、第二軍團及ザルバエフ中將の第四軍團より成り、我奥、野津兩軍が析木城、海城等を占領せし當時にあつては、鞍山站の露軍約六七個師團と注せられたり。敵將クロパトキンは、早くも我首力の此方面より攻擊し來るべきを推知し、西伯利第三軍團及歐露第十軍團をして黑木軍を東方に牽制せしめ、首力は時機乘じ得べくんば、先づ鞍山站方面より攻勢に轉じ、以て旅順救援の目的を遂行せんことを企圖せしなり。故に敵は鞍山站を中心とせる防禦陣地に三段の工事を營み、鞍山及び閻山を連ぬる高地線を以て首力の防禦陣地となし、更に一師團を其前方に進め、湯岡子一帶の高地線を以て前衞陣地となし、騎兵旅團は其前方、甘泉堡一帶の地區地物を前哨抵抗線となして騎幕を張り、以て專に我奥、野津二軍に對峙せり。其防禦工事は頗る堅牢にして鐵條網、地雷等の副防禦物悉く密設せられたれば、我奥、野津二軍は共同動作を以て、之を攻擊すべきの方針を取り。而して川村師團特に多大の犧牲を拂ひ、其結果露軍の退却を促せり。

二、第十師團初期の戰鬪

中央軍の右翼たる川村師團は石門嶺より大坎子を經て右側山地を通過し二十六日午前二時

左側支隊として鎌田聯隊を、右側枝隊として安村聯隊を備へ、肅々として行進し鞍山站の左翼ターピンゴウ高地を突破せんとす。敵は銃砲火を猛注して之を防ぐ、我砲兵の威力は大に敵勢を挫きしも其抵抗は尚ほ頑強なり。鳥取聯隊（大佐安村範雄）及福知山聯隊（大佐桂眞澄）の力戰敵膽を寒からしめたる時、一砲彈は轟然として脚下に爆發し森大隊長之に殪れ、餘彈桂大佐を殪せり、大佐遼陽を見ざるは遺憾なり諸子予に代りて之を勉めよと言ひ終て瞑す。一隊の將士憤涙を呑み、皆其心に誓ひ此仇を復せんことを期せしなるべし。

二十七日蕭々たりし前日來の雨は尚ほ休まず、此地を攻撃するの目的を以て、雨を冒して運動を起し、福知山聯隊は特に聯隊長及第二大隊長の弔戰して敵を潰敗せしめんと欲し、午前一時半露營地を發し、昨日敵砲兵の據りたる陣地を進略して開戰の好機を待ちたれども山上山下霧深くして咫尺を辨せず、午前九時に及びて曉霧漸く散じ、敵陣地を望めば敵既に退却せり。我は直に進んで鞍山站方向に前進す。鞍山站方面の敵已に左翼軍の驅攘する所となり首山方向に退却し、我前面の敵は反て潘家爐に走りて我側面を脅威せんとするの狀況なり。是に於て追撃に移り、潘家爐附近に至り此背後高地に據れる敵を攻撃し、上田師團と協力し之を撃攘し遼陽方向に前進す。而るに潘家爐後方に潜める敵砲は尚ほ時々我が働作を妨害せるを以て安村聯隊をして之を撃攘せしむ。依て此夜安村聯隊は猛然として

突貫し、遂に敵陣地を奪取せり。

二十九日川村師團は上田師團と連繫して前進し、敵の本防禦陣地を包繞しつゝ攻勢配備の態度に移り總攻撃は之を明三十日と定めたれども、姫路師團は、午後三時半其砲兵の水氷子北方高地及來家堡高地に進出するや、先づ砲火を以て敵の動靜を探らんと欲し、早飯屯南方高地及俞家溝南側に向つて攻撃を開始せり、之を遼陽正面陣地に對する我が第一砲とす。敵は一時狼狽して後方陣地に引上げしが、果然後方陣地より盛に應砲し遂に我を凌ぐの猛火を集注し、彼我の砲聲は連續して午後七時に及び、暮色全く戰場を包むに至りて、自から中止せり。

三、三十日の激戰

八月三十日は我三軍が三道駢び進みて、總攻撃を開始せし決勝戰の第一日なり、野津軍は前日既に敵の防禦陣地に近接せしかば、午前二時頃より第一線部隊は早くも行動し鋭意敵陣を攻撃せり其配置は川村師團を右翼とし、上田師團を左翼に備へ、右は黒木軍の淺田枝隊と連繫し、左は奥軍の山口旅團と戰線を一にして、三軍半圓形に敵陣を圍繞し、野津軍之が中堅となりて先づ戰鬪を接えたり。川村聯隊の山砲聯隊は東天漸く白みて照準稍々定まるに及び午前六時頃より砲戰を始め、歩兵の爲に其進路を開かんとせしが、敵も亦昨夜よ

り多くの砲兵を此方面に進めて、孟家房北方高地、早飯屯南方高地及び代二屯東側高地より約九十門の速射砲を以て我に應砲し、殊に大口徑の重砲は殷雷の如き轟を傳へて威力を逞うするに對し、我は射距離短き山砲を以て之と對抗するが故に、我の砲火は以て歩兵の進路を開くに足らざるのみならず、夜間敵前四五百米突まで進出せし第一線歩兵は、著しく敵歩砲兵に瞰射せられて死傷續出し、碧血秋草を染めて滿目凄其たり、之が爲に最も死地に陷りたるは小野寺聯隊にして、聯隊長小野寺大佐(實)以下死傷者多く、鎌田聯隊も亦代二屯東側高地の敵砲火より猛射せられて窮地に陷りたり。

是より先、左翼隊たる福知山聯隊は、新任聯隊長八木下中佐(純)の指揮に屬して、午前二時三家子の東西高地を夜襲し、容易に之を占領したるも、曉來敵の砲兵は前方四個所の陣地より我占領地を集射して、最も多くの死傷者を出せり。然れども八木下聯隊は勇戰奮闘益前進して午前九時矢橋中隊を俞家溝に進め村落を占領せしめ、夜間に至るまで其戰線を支持せしが川村中將は此部隊が獨り前方に突出して夜間の位置頗る危險なるを慮り、午後十時其突出部隊をして三家子東側の高地に引上げしむ。

第十師團は遼陽の大戰に當り、最も勇戰奮闘したる師團なり。爲に各師團を通じて最も多くの死傷者を出したるも、遼陽占領の月桂冠は歩兵第二十聯隊の軍旗に冠せられたり。其

戰況は掲げて後章に在り。

第二節　第五師團戰況

軍の左縱隊上田師團は右翼隊として山田旅團を、左翼隊として塚本旅團を備へ、前衛として石田聯隊を進め、二十五日夜半海城より行進を起し、行々敵を驅攘して、二十五日駒馬臺を占領し、鵜澤聯隊は本隊先頭に在り。濃霧暗澹(あんたん)、四顧冥濛(めいもう)、寸前行進の利機を認むるは鞍山站の要地を捨てゝ我に委したるを以て、我は奥軍右翼隊と連りて之を占領し、二十八日には彼我長嶺子の南方と西方高地とに對峙し、二十九日敵の側面に向ひ、塚本部隊及奥軍右縱隊の一部と共に突進したり。右翼塚本部隊は威力偵察の爲、其小泉聯隊及砲兵一部隊を派遣し、鵜澤聯隊之に次がんとす。此時恰も第一軍の一部已に石廟子附近に突出せる爲め、敵其退路を絶たれんことを怖れ、將に退却せんとするの狀あり。依て鵜澤聯隊は平野大隊を左翼とし、長谷川大隊を右翼とし豫備隊としては、井上大隊を備へ、三十日黎明松岡中隊は奮戰の後、高家屯の敵陣地を距る東南約千二百米突の岩山を占領し、牧大尉第一中隊を率ゐ之に踵ぎ、猛烈なる敵の逆襲を退け、前方約四百米突に於ける岩山は原田中隊突進して之を占領し、池田中隊は原田中隊に合し、協力して敵に對す。時に長谷川大

隊は方家屯の堅固なる敵陣に向ひ突貫を始めしも、敵の銃火猛烈なるのみならず、其後方より猛射せる砲火の威力も亦侮るべからず。加之黒牛庄、首山堡方面よりの飛彈を蒙り、大隊の苦戰名狀すべからず。僅に其火力を避けたる廟宇は敵彈一中、壁瓦粉飛、井上大尉以下死傷少からず。此時に當り松岡中隊の占領せる岩山の後方約六百米突に位置せる永田砲兵部隊の砲火は黒牛庄方面に注がれ、鵜澤部隊の攻撃部面は其火力の効果を受くる能はず。爲に苦戰の一層激烈なりしは想像するに餘りあり。彼の岩山を占領せる牧大尉は其高地より敵狀を望見するに敵歩兵の強大なると、砲火の漸次增加するの狀況なるを以て之を平野、長谷川の二大隊長に報告す。尋で牧大尉敵彈に斃る。

小泉聯隊は三十日午前四時特別任務を受けて將に行進を起さんとするに當り、敵狀に依り更に首山堡攻撃に參加することゝなり、前衛として下大隊、白川、松永二大隊を本隊とし、砲火を冒して前進し、恰も金城兵團の已に對戰中に在るに會し、直に其位置に就き、岡田中隊をして迂回して敵陣地を距る約六百米突の前面一高地を占領せしめ、射撃を開始せしに、敵三面より猛射して之に應ず。此時黒牛庄附近に於ける砲兵隊は敵砲と砲戰中なるを以て、砲彈は其位置の頭上に飛過したり。時に道正中隊來りて之に加はり、松永大隊の第七中隊は前方溪谷地に停止して前進する能はず。岡田中隊より派遣したる齋藤伍長の偵察

報告に依れば敵壘面には地雷、鹿柴、鐵條網等の副防禦を施しありと。依て夜襲するに決し、高地附近に向ひ、漸次主力を集めたり。岡田中尉依然砲火を交へ、中隊長傷て斃れ南野中尉之に代る。午後小泉聯隊長は此夜を以て敵壘を奪はんことを決し、黄昏を以て運動を開始し、白川大隊、下大隊は敵火を冒して躍進し、シャオヤンズイ附近に達す。松永大隊猛射を以て之を掩護す。此夜雨頻に降り、且準備未だ整頓せざるを以て、夜襲の計畫を中止し、戰鬪隊形を以て夜を徹し、散兵壕を急造す。三十一日午後一時に至り、四百米突を隔てゝ銃火を交ゆ。今や突撃の機熟す。命令一下、萬努一射の勢を以て、第一第二の二個中隊を先頭とせる大隊は猛進し、各大隊も亦驀進せり。敵の猛火は殆ど比するに物なく、激戰三時間に亘り、漸く一部を以て腰部に達するを得たるも、位地不利の爲め前進する能はず、奮鬪夜を徹す。小泉聯隊長以下大中隊長傷かざるものなく、其激戰の狀一想慄然たらざるを得ず。而も敵の頑強も終に一日の拂曉と共に日章旗影に滅す。

此の如く前面の敵勢は甚だ優勢なり、然れども午前一時、奥軍大久保師團の猛烈果敢なる夜襲は、終に敵をして力屈し、守る能はざらしめ、首山東北方に降下して退却せしめ、右翼縱隊の一部と共に先登の名は千秋戰史の上に輝けり。殊に午前三時大島師團の岳南聯隊が勇敢なる關谷大佐指揮の下に意氣衝天の勢を以て奮進し、大佐先づ斃れ、死傷算なく、

軍神と崇敬せらるゝ橘少佐の壯烈なる最後を見たる如き、其犧牲實に大なるものありしと雖、遼關攻陷に貢獻したる碧血と英名とは萬古不磨なりと謂ふべし。

第六章　遼陽大戰(五)——奥軍戰況

第一節　第三師團戰況

一、向陽子の地勢

遼陽を南に距る二里にして、首山堡の一村あり、遼陽街道は其村落の南方に於て二座の丘陵間を過ぎ、直に大沙河鎭に達す、其西に聳ゆる獨立丘は、即ち首山(駐蹕山)にして、東に峙つものは所謂向陽子の高地なり、其丘頂は一高二低、一脈中數座の巓を形成して、東南新立屯に連亘するが故に、史上亦新立屯西方高地とも稱す、俱に一脈の丘陵なれども、而も其峰頂を異にするが故に、自然戰面を異にするの觀あり、此高地と首山とは街道を扼して遼陽の關門を形成し、所謂一夫道に當れば萬夫進むを得ざるの形勢なれば、敵は最も注意して防禦工事を經營し、堡壘は三重に山腹を繞り、前には狼牙、鐵條網、地雷等の副防禦物あり、後には重砲、速射砲あり、堡壘には機關砲を据え歩兵を伏せ、以て攻者に備ふ、此天險に據れるものは、首山の山上山下に西伯利亞第二軍團の第一、第五狙撃歩兵師

團、及西伯利豫備歩兵第三師團あり、向陽子一帶の高地には西伯利第一軍團ありて、スタケルベルグ中將之を指揮し、就中大島師團の攻撃正面を守備せるものは、コンドラウキッチ少將の西伯利第九狙撃師團にして、砲兵第一旅團、機關砲一中隊を有せり。

二、激戰二晝夜

奥軍の右縱隊たる大島師團は八月三十日午前三時靜岡聯隊及砲兵二中隊を前衛(司令官兒玉少將)とし、前進して沙河附近に達す。敵は我を迎へて直に砲火を開き、我亦放列を布き之に應ず。歩兵部隊は猶ほ高粱中を前進し頭臺子に主力を位置し、其一部は東北方に散開す。黒牛莊に位置したる右翼(山口旅團)は猛烈なる砲火を開く、午前九時を過ぐる頃より敵は我陣地を偵察せんが爲め繫留氣球を揚ぐ。銃砲火の勢刻を追ふて激烈となり、右翼は前進してシャオヤンズイ附近に達す。午後三時縱隊總進撃に移るに決し、歩兵部隊は黒牛莊東方高地に前進したるも、敵の副防禦は我を防止すると同時に銃砲火は驟雨の如く、我死傷算なし。唯其位置に停止して夜襲の機會を待てり。然れども砲戰は更に激烈を加へ、午後五時更に到着したる砲門は其巨口を開きて櫻桃園前方高地脚より敵を猛撃す。敵の左翼及正面陣地の敵砲は毫も衰へずして夜に入る。副防禦破壞班たる工兵部隊は潜行して敵前に鐵條網の一小部を破壞し未明漸くにして右翼縱隊はシャオヤンズイ東方約二千米突の

高地を占め歩兵部隊は約千米突の高地に於ける角面堡を占領するを得たり。敵は方家屯東方高地及東方約八百米突の突出地に在りて我を猛射するが故に、其前進益々困難なり。右翼豐橋聯隊(大佐石原應恒)は其突撃隊として第二大隊、射撃隊として第一大隊、豫備としては第三大隊を控へ、敵前五百米突に達す。敵砲火の威力猛烈にして我の死傷算なきも、決死の諸隊は已に第一線に達す。奮前せる第一大隊第三第四の二個中隊は先頭と爲り、第五、第六、二個中隊は之に踵ぎ、山中隊は前面に吉田中隊は右側より肉薄突進したり。堅壕に在りし敵は猛然として我に向ひ、礮礫を飛ばし、爆彈を投じ、劍尖相摩し、赤手相搏ち、奮撃突戰の狀、得て髣髴すべからず。敵は必死の場合なり。此格闘混戰の頭上には敵の重砲野砲の火雨注がれつゝあり、我の砲火は亦敵砲に向て猛射せられ、硝煙濛々、震響轟々、混戰其極に達す。前夜來繼續せる此奮戰は多大なる犧牲を供して終に午後零時漸く敵壘を占領するに至れり。

左翼靜岡聯隊(大佐關谷鉾次郎)の奮戰は又右翼に加ふるものあり。此日午前四時半行進を起し、遼陽街道を縱隊行進し、多少の損害を受け、其高地脚に達するや、直に突撃に轉じ、嶙然山上を望んで奮前す。敵彈先づ劍を揮ひ叱咤指揮を取れる聯隊長を斃す。聯隊旗手相踵ぎて斃れ事正に急なり、時に第一大隊は勇敢無比なる橘少佐(周太)鬼神の如く敵壘に直

前す。敵兵爲に披靡し、一旦敵壘を占領したるも、各方面より敵の銃砲火を蒙り、剩へ斜面の掩蔽部より乘敵逆襲し來り、砲火劍彈、混戰紛鬪大惡戰の極に達す。一彈來りて其右腕を射る、刀落つ。少佐屈せず、左手之を拾ひ、之を揮ふ。又一彈左手を射る、刀亦落つ。兩腕已に失す。尙ほ叱咤奮迅す。乍ち又一彈其腹部を貫き、少佐終に斃る。陸の軍神として廣瀨中佐と共に英名高し。時に格鬪益々猛烈なり。屍山血河の光景は到底其光景を充すに足らず。塹壕は唯是彼我の死屍のみ壕面は已に平地と爲り、寧ろ丘を爲し、踏むとして碧血ならざるはなし。我兵の勇戰此の如きも敵の砲火は終に陣地占領を繼續する能はざらしむ。午後七時砲兵部隊は全力を擧げて敵陣地を猛射し、左翼隊の前面は勇猛果敢なる攻撃に堪へず、終に此夜を以て退却せりシャオンヤズイ北方高地の敵は尙ほ頑抗せしも翌九月一日午前三時、晨鷄未だ曉を告げざるに先んじ、早く既に新立屯西方より向陽子に至る一帶の高地線を占領せり。大鳥師團は五十餘時間激戰の後なるを以て、追撃運動を左縱隊小川師團及秋山騎兵旅團に讓り、首力は少しく退いて附近の村落に宿營し一日の休養をなせり、好個の要害尙防戰するに足る、而も戰はずして自ら棄て去りしは、黑木軍迂回運動の結果なりと雖も、敵守將の遺憾想ふべし。

第二節 第六師團戰況

一、首山堡の險要

首山は、首山堡の西に聳え唐宋以降著名の勝地なり。山は三尖形にして其脈北東南の三方に垂れ蹴立三百尺、山は花崗石より成り、三裂する稜線を除けば、斜面一帯に急峻なり。唐の太宗高麗を征して蹕を駐むる數日、碑石猶其功を勒して、今に駐蹕山の雅名を傳ふ。山頂方形の塊あり、登臨すれば、遼陽の城壁、沙河の重鎮、皆脚下にあり、故に曰く、駐蹕山は遼陽の重關にして、向陽子マエトウンの鞍部は輾轢の險なりと。

露軍は之を以て南方防禦陣地の鎖鑰點となし、最も嚴重なる防禦工事を營み、土嚢を積で堡壘となし、煙臺を穿ちて觀測所となし、阪路を北方斜面に開きて逶迤山頂に達し、砲車登るべく輜重騙るべく、所有る副防禦壘前を繞りて狼穽、地雷若くは電流を通せる鐵條網等、層々帶をなして殆と狡鼠野兎の潜るべき隙なし、山頂然り、山麓山腹亦然り、之に連るマエトウン向陽子の小丘亦然り、而して敵の南方軍總指揮官たりしスタケルベルグ中將は、此山に司令部を置き日本軍を下瞰して全戰線を指揮せり、大久保縱隊の此天險に克ち人工に克たんが爲に多大の犧牲を拂ひたるもの、決して戰の罪にあらざるなり。

二、小泉旅團の混戰

師團は其右翼には小泉枝隊（歩兵第二十四旅團）、左翼には飯田枝隊（歩兵第十一旅團）を率

ゐ、首山堡攻撃に向ふ。卅日午前五時三十分小泉枝隊は其右翼に江口聯隊（大佐、昌條）を、左翼に香川聯隊（大佐、富太郎）を率ゐ行進を起し、其南地脚に向ふ江口隊の展開前進したるは太子河支流の河堤に沿へるものにして、前線には加藤大隊（少佐、鍊太郎）あり前衛としては南中隊（大尉、正吾）あり、其突兵としては隈元少尉（務）之に當り、已に敵前二千五百米突に達す。時に敵砲火を開始す、我未だ之に應せず、尚ほ進んで千四百米突に達し、聾鋤を取り更に前進せんとす。時に竹内特務曹長の偵察報告に接す。是に於て約千二百米突に在る敵の開豁したる新軍道を利用し、此に地物に依りて銃戰す、一彈乍ち隈本少尉を斃す、時に午後一時三十分なり。銃火刻を追ふて猛烈となり、敵勢甚だ強大なり。江口聯隊長は戰況を觀士氣を督勵せんとし散兵壕に立ち、泰然として無人の境に在るが如く、其手にせし雙眼鏡は鼻梁の上に在り。一彈來て其後頭部を貫射して之を斃す。加藤少佐之に代る。戰況甚だ不利なり。午後五時に及ぶ頃抹雲終に雨を降らし、沛然たること二時間、七時に至りて僅に收る。然れども暗雲濛々、四顧冥々、加ふるに深泥は行動の便を奪ひ、戰闘は休止の止むを得ざるに至れり。此不利の狀況を一轉し、活動進展するには夜襲に出るの外なし、是に於て午前二時決然夜襲を決行し、前面村落に於ける小數の敵兵を驅攘し、前進又前進、第二中隊は已に地脚に達し、第四中隊亦白兵激戰して進む。豐島中尉戰死し、南

大尉重傷を負ふ。天色微茫、曙色已に動けり。相望めば是れ敵前僅に距ること十米突のみ、彼我の叱咤咆哮耳を劈ぎ、激闘惡戰正に其極に達す。深入孤立したる第三大隊は平地に裸暴するのみならず、前には掩蔽せる敵兵の銃火あり。後よりは掩護射撃の効力なく、進退茲に谷り、全滅の外なからんとす。午後六時に至り、原大佐、(義正)の砲兵聯隊の砲火は戰狀を一轉し來り、其猛烈なる砲火は副防禦の過半を破壞し、全縱隊の夜襲と爲り、終に其目的を達するに至りたり。

顧みて又其左翼隊なる香川聯隊の戰況如何を見るに、三十日午前々進して首山堡を距る約一里半の地點に達し、命令に依り江口隊の左側に合せん爲め、更に進んで大趙家屯附近に達す。後方には豫備隊として西村大隊(少佐、淑一)あり、進んで敵の側背たる鐵道附近敵前七百米突に達す、我れは高粱の間に在り、敵狀を望見するに由なく、目標として僅に村落あるのみ雨は瀟々として止まず、敵の砲火は渦せる夜叉の如く、我の危險不利云ふべからず、空しく雨に伏して戰機を待つあるのみ。午後八時敵砲少しく其威力を減退せしを機とし、江口隊と協力し急造立射掩堡を築き、午前二時に至る、既にして夜襲の命あり、一隊決然前進すると約六百米突、敵を距る已に一百米突に過ぎず、敵之を知り、銃火機關砲の猛注、驟雨の如く寸前すべからず、此彈面に立ちたる西村大隊は地に伏して機會を伺ふ

も、敵火反て益々峻烈なり、江島中尉奮然起て大隊長に前進を請ふ、大隊長已に先づ敵彈に伏して語なく、此一刹那一彈飛んで中尉を斃す、九田副官、(中尉、朔郎)林中尉皆已に戰死し、岡本少尉傷き、北村曹長獨り頻に將校を連呼し、一も其答ふるなきを見、決然殘兵を率ゐて奮進す、乍ちにして曹長亦傷て斃れ、一隊已に亦指揮の聲なし、實に中隊一の將校なく、餘す所は伍長三、上等兵と卒廿三名あるのみ。

第十一中隊の如き慘烈之に讓らず、僅に其十三名を餘すのみ、傷きて斃れたる北村曹長は鮮血に塗れ已に半死の域に在り。尙自ら勵まし此戰況を聯隊長に報告せんと欲し、匍匐漸く掩堡內に達す。偶聯隊本部の軍曹に會し、一端一句狀況を語り、之が報告を托せりと云ふ、其壯烈の狀、悲慘の景、瞑想尙は慄然たるを覺ゆ。聯隊の左翼大隊は、太子河支流內に立ちたるまゝ、卅日より卅一日に亘り、不眠不食の對戰を繼續せり、其慘況亦非常にして、或は敵彈に傷きて流れ、或は溺るゝ者算なし。

聯隊長は命を川上大隊長に下し、左翼大隊及西村大隊の戰況偵察の爲め指名斥候を出すべきことを命じたり、川上大隊長は殊に宮崎伍長をして、其十六名を率ゐて此の任務に當らしむ、伍長欣躍直に馳せて西村大隊の本部を索む、叢々たる高粱其果して何れに在りやを知る能はず、敵は其影を認めて銃火を猛射す、是に於て兵を河流內に潛め、單身直前二百

米突に達し、重松中隊長に會し、具さに西村大隊長已に戰死したるの狀況を知り、且つ敵砲火の威力強大にして、前進するの機未だ至らざる旨を聞き、即ち歸途に就き河流に至れば、兵の死傷するもの已に六名に及べり。

伍長の報告聯隊長に達す曰く可なり、前進すべしと、全聯隊前進を起し、進むと百五十米突、敵の砲火果然として猛烈なり、急霰の如く、驟雨の如く到底寸進すべからず、已むを得ず、皆高粱中に伏す、獨り聯隊長は屹然として双眼鏡を手にし、敵情を望む、衆皆其危險なるを諫む、可かず、衆更に其伏委を請ふ、終に勵聲其無用を一喝するに至る、士氣爲めに大に振ふ、時に戰況益猛烈聯隊旗手殪れ、代るもの相踵で負傷す、而も今や前進を起せる全隊は、奮然屍を踰えて突擊す。川上大隊長、三戸副官、皆傷きて殪れ、赤司大尉代て指揮を取る、慘烈の狀筆舌すべからず、敵は、益々兵力を增加し、前面の危險刻を追ふて加はるのみ。此時に際して小川師團の應援隊は始めて戰鬪に參加し、川村聯隊は江口、香川兩聯隊の中間に進み、安東枝隊は旅團の最左翼に連り、強て敗勢を挽回せんとせしも、天險人工兼ね備はれる敵壘は到底奪ふに由なし。午後五時三十分頃より我砲兵の威力漸く敵壘に震ひ、全軍の步兵總突擊を決行したる結果、敵稍動きたるも主力の抵抗少しも衰へず、終に夜に入れり。

三、飯田旅團の奮闘

師團の左翼たる飯田枝隊は其第一線として太田聯隊(大佐、榮次郎)を前進せしめ、三十日午前四時行進を起し、田中少佐の率ゆる一隊は、其第四中隊(大尉、鵜殿輝長)を先頭とし、第三第一第二中隊之に次ぎ高粱間より栗畑に出で午前十時敵前に出で展開して尙ほ前進す、此時に方り、前田大隊は左翼に、堤大隊は右翼に、田中大隊は中央に在り、太田聯隊は更に進んで敵前七百米突に達したる頃、敵の砲火は熾なれども我未だ之に應射せず、唯前進を繼續せり、松本第一中隊長(正人)は戰線に進みありしが、敵の曳火彈の爲め其從卒と共に斃れ、和田中尉(正)代りて指揮を取り前進す、第二中隊亦奮進しつゝありしが吉田中尉(丁秀)頭部に敵彈を受けて斃る。已にして第一中隊の和田中尉亦敵彈に傷けり、敵の火力益々猛烈となれり、然れども吉田隊は已に進んで河岸に達し、其河堤を利用して敵に對抗せり、これより一步を出れば、左方停車場附近の敵陣地なり、左方高地にも亦敵陣あり、右方高地にも亦敵陣地あり、十字火中に投ずるものなり、而れども前方百五十米突鐵道線路に據りて以て敵に近接するの利あり、太田聯隊は、豆畑に進躍せり、果然驟雨も啻ならざる機關砲の猛射は、其の威力を振ひ、我兵尙は二十米突に進みしも、未だ鐵道線路に達するに及ばず、空しく其火力の犧牲と爲るの狀況となれり、此の凄慘なる一瞬間は、每秒